

ドキュメント アーツ秋田構想

2016～2017

Document for Arts Akita



序文

2年前、固い言葉で言えば「地方創生に資する取り組み」として、「(仮称)あきた芸術祭」の開催について検討を始めました。当初は、他都市の芸術祭を参考にしながら、「地域の創造」「都市の再生」をコンセプトに、「世界に向けた社会的課題の提起とアートによるアプローチ」と「市民が地域を掘り下げ、社会的課題と向き合う実験の場」として考えていました。

その後、平成28年に開催した「シンポジウム ~秋田市での芸術祭?開催を考える~」を機会に、「やる必要があるのか」の疑問に向き合い、「地域芸術祭の先を見据えた取り組み」として検討を深め、地域にしっかりと軸足を置きつつ、将来のまちのかたちを考えていく取り組みとの方向性が見えてきました。

今年度(平成29年度)は、「あきたを学ぶ。あきたで創る。~人と土地とアート~」のテーマのもと、たくさんの方々の力をお借りし、秋田の暮らしや人・活動など「日常」を学ぶ「夜楽」と、アートを切り口にまちに積み重なっている、普段気付かない歴史や文化などの「超日常」を考える「シンポジウム」を経て、私達の取り組みの位置付けを見いだすところまでたどり着いたと感じています。

「何のためにやるのか」「なぜ芸術祭なのか」。関わっていただいた方々からのこうした疑問や指摘に向き合い、「自分の住むまちを知る。そして自分がこれからも暮らしていくまちを考え、関わる場をつくるため」に、私達の日常にあるもの、例えば芸術・文化・歴史に限らず、「食」、「音楽」、「文学」、そして「場所の力」や人を含めた「まちの物語」までを多様な「(複数の)アート=文化的資源」と捉え、それをベースに表現し、伝え、つながり、まちに新たな化学変化を起こす「アート・プロジェクト」であるべきと考えました。地域芸術祭の先に何を見るのか。「芸術」と「祭」ではなく、将来のまちのビジョンにつながるプロジェクト「アーツ秋田」として見つめ直して。プロジェクトにより、私達のまちに新たな文化の地層が積み重なり、その先には、愛着を持ってまちに関わる人の姿があり、創造性の高いまちが見えます。

この冊子は、これからも脈々と続いていく、「私達が暮らすまち」をつくるための取り組みのスタートになるようにとの想いをこめて、平成28年度の検討から「アーツ秋田」にたどりつくまでの経過をまとめたドキュメントブックです。

「誰がやりたいのか」。その答えは、これから。冊子を手にしていただくことで、「このまちに関わりたい」「自分も何かできるのでは」など思いを巡らせ、「楽しい人が集まることで楽しいまちになる」ようなプロジェクトをみなさんと一緒につくり上げていければと思います。



第1章　平成28年度　シンポジウム
～秋田市での芸術祭？　開催を考える～

目次

序文 …… 02

第1章　平成28年度　シンポジウム　～秋田市での芸術祭？　開催を考える～ …… 05
「夜学」第0回「秋田市での芸術祭？　開催を考える　あきた豊醸化計画」 …… 08

第2章　「（仮称）あきた芸術祭？」を考える勉強会 …… 09
「秋田市職員勉強会レポート」
「あきたを学ぶ。あきたで創る。」　～職員勉強会からの学び～ …… 13

第3章　「夜楽」《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ …… 14
第1回「もう一つの場所」をつくる　ノート …… 15
ドキュメント …… 17
第2回「食と自然」をつなぐ　ノート …… 21
ドキュメント …… 39
第3回「土地の記憶」を継承する　ノート …… 44
ドキュメント …… 57

第4章　シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク　～地域芸術祭を超えて～」
辺縁と創造のネットワーク～地域芸術祭を超えて～　ノート …… 63
ドキュメント …… 77

第5章　部活プロジェクト始まる …… 78

ネクストステップ　まちのビジョン …… 84

巻末 …… 101

あとがき …… 109

平成28年度　シンポジウム　～秋田市での芸術祭？　開催を考える～

平成28年11月11日（金）、「シンポジウム　～秋田市での芸術祭？　開催を考える～」を開催しました。美術家・藤浩志氏（秋田公立美術大学）と人類学者・石倉敏明氏（同大学）の進行のもと、会場となった秋田市川尻にある「高清水『仙人蔵』」に、市内外から70名を超える方々にご参加いただきました。パネリストにはアドボカシープランナーの佐藤裕之氏（羽後設備（株）代表取締役）、美術史家の山本丈志氏（秋田県）、「のんびり」編集長の藤本智士氏（（有）Re:S代表）の3名をお迎えしました。

前半は「パネリストが醸してきた秋田」と題して、パネリストの皆さんからご自身の活動紹介や「（仮称）芸術祭?」への想いをお話いただき、後半は「トークセッション」として、会場からのご意見やご質問をもとに意見交換するという内容でした。

この当時は、人口減少社会の中、秋田市を豊かに醸そうという想いを込め、取り組みのテーマを「あきた豊醸化計画」としていました。微生物の力で食材が発酵していくように、元の姿を何かに変え、持続可能な価値が内側から生み出されていくというようなイメージでしょうか。

既に秋田の中でもいろいろな活動をしている多くの人達が、これからどのようにつながり、豊かで味のあるモノになっていくのか、「アートは難しい」という決めつけなしに、柔軟な視点でこれからの秋田と芸術のあり方を考えてみたいと思っていたのです。

結果、ゲストの方々からの厳しい指摘と、その一方で「やるのであれば必要な視点」について様々なキーワードをいただけました。振り返ると、このシンポジウムは、私達がじっくりと「（仮称）芸術祭?」の意味を考え、そして今回、まちの将来を見据えたプロジェクト「アーツ秋田」として整理し直し、その必要性を改めて考えるスタートだったのです。少し、振り返ってみます。

佐藤さんはいろいろなまちおこしに関わっていることから、「もっと単純に自分達のまちを知ろう」ということを話してくれました。佐藤さんのスタンスは、商売も市民活動も、ある意味面白さとか遊び心があるからやれる。ヨハン・ホイジンガ（社会学者）の「遊ぶということが人間は本質的に体の中に埋め込まれているのであって、その『遊び』というのは、今の自分を別の場所に動かしていくこと、言い換えれば日常と非日常を行ったり来たりすること」という考え方を教えてくれました。

山本さんは、ご自身が「あきたの美術」という事業を担当されている経験も踏まえて、これからやるべきことは、アートイベントやプロジェクトをやるための人材をきちんと育成して、5年、10年先のことを見越した上で準備していくことと示してくれました。

そして藤本さんです。冒頭、「秋田市で芸術祭やらなあかんのかな?」と一言。「のんびり」の取材を通して秋田を見てきた立場から、「皆さんが普通だと思っているようなことが、県外の人にしたら『すごいですよ、これ!』と思うことがたくさんある」との発言は重みがありました。伝えたいことがあって、それがきちんと大衆に響くということをすごく大事に思っているそうです。だから、既にこのまち（秋田）にあるものに対して、もう少し「編集」という視点でどんどんアプローチできれば、もっと人が寄るし、もっといろんなものが生まれる。こういうことをやるべきでは?　そういう熱意があるのは誰なのか?　ということを提示してくれました。

私達のスタンスをもっとしっかり持つべきというありがたい指摘と受け止めました。「（仮称）芸術祭?」ということが先に立つよりも、もっとやるべきことがあるんじゃないの?　という疑問を投げかけて、私達が本当にやるべきことを考えさせてくれたのだと思います。

「10年、20年後の新しい価値や風景を思い描きながら、まだ見たことのない、出会ったことのない世界と向き合う面白さ」「個々人がわからないことはとても多くて、だからこそ興味を持ち、見たい、知りたいという気持ちや感覚を大事にしたい」「日常の中の小さな変化を発見する喜び、それが継続することで芸術祭のようなことに育っていくと良いのでは」「秋田にあるものを大事にすることがとても大事。日常を大切にしなければ、非日常というお祭りはできない」……。

後半のパネリストの方々の言葉です。

私達も、改めて地元にある資源を編集する、自分達にはこういうものがあると知ることの大事さに気付かされました。ということは、いろいろなまちの誇りとか、場所の力を再発見すること、それが私達の日常に根付けば、より豊かで楽しいまちになるのではないでしょうか。これが今年度（平成29年度）の取り組みのベースになりました。



第2章　「（仮称）あきた芸術祭？」を考える勉強会

「夜学」第０回「秋田市での芸術祭？　開催を考える　あきた豊醸化計画」

平成28年度は、シンポジウムにおけるゲストの方々の意見を踏まえ、私達の悩みや疑問を整理する意味も含めて、「夜学」第０回を開催しました。平成29年2月９日（木）18時30分～20時30分、にぎわい交流館ＡＵ研修室1で、26人の方にご参加いただきました。進行はシンポジウムと同じく、藤さんと石倉さん。ゲストには、シンポジウムに引き続き「のんびり」編集長の藤本さんを迎えました。

０回としたのは、平成29年度から始めたいと思っていた「夜楽」のスタンスを探ることと、まだ「（仮称）芸術祭？」に対する疑問・指摘を整理する準備段階だという意味からです。このプレ「夜楽」が我々にとってのエポック・メイキングになりました。冒頭、秋田市長のビデオレター（市長が芸術祭についての想いを述べたもの）に対して、藤本さんから「熱が伝わってこなかったし、芸術祭に対して、誰に熱があるんだということが謎になった」と一言。さらにそのあとの言葉が響きました。「僕は全否定している訳ではなくて、熱量があって、こういうことがやりたい！　という明確なものがあった時に協力したくなるんですよ」。真正面から考えますよね、こんな言葉をいただいたら（今まで考えていなかったということではなく、今まで以上にという意味です）。

５年、10年経ったら、新しい価値の創造につながるような「芸術祭？」の先を見据えた流れをどうつくるか？　何を目指しているから、やりたいんだ！　というこれまではっきりとした言葉になっていなかったものを担当職員が明確に意識し始めたのだと思います。まさに感謝でした。





この後の議論で、私達は組織の枠を超えて、もっと一緒に考える仲間を増やしていくこと、熱量を持った人を巻き込んでいくことを考え、平成29年度の取り組みにつなげたのでした。まず、一つ目は「職員勉強会」。市職員でこうした取り組みに熱意のある人とつながりたい。そして、何のためにやるのかを一緒に考える場をつくることとしました。二つ目は「夜楽」。おぼろげな感覚でとらえている秋田の日常にスポットを当て、様々な活動者をゲストに、切り口を変えながら活動の視点やまちを見るための気付きを得る場をつくることとしました。そしてシンポジウムで外からのゲストもお招きし、世の中の潮流も知ろうと画策。三つ目は「部活プロジェクト」。「夜楽」からまちや日常に興味を持ってもらえたら、次に関われる場をつくりたい。そんな想いからです。あわせて、「告知が足りん」というアドバイス。行政の弱点ですが、Facebook、Twitter などに地道に取り組むきっかけとなりました。

秋田のまちにこれから何かが生まれるような仕組み、枠組みをつくりたい。まちの懐となるような学びと気付きの場、まちに関われる軸につながるように。まさに藤本さんが言ってくれた「まちを編集する視点」なのかもしれません。では、この三つの取り組みについては、次の章で。

「（仮称）あきた芸術祭？」を考える勉強会

平成29年度、最初は市職員が「芸術文化によるまちおこし」や「（仮称）あきた芸術祭？」という市の取り組みについて考える機会を設けました。普段、私達職員は、各課所室毎に予算を確保し、事業を進めることが一般的で、例えば「芸術文化によるまちおこし」という施策の方向性を知っていても、それに関わる全ての市の取り組みを本当に知っているか？　という疑問と悩みがあります。そこで、本市の「芸術文化によるまちおこし」について知る職員勉強会を開催し、職員同士のトークセッションや意見交換により、課所室の垣根を越えて市の施策への関心を高めることとしました。この勉強会で、「（仮称）芸術祭？」を職員が自分の業務との関わりなどからどう捉えているか、そして業務のみならず個人としてはどんな受け止めをしているのか、積み上げていきました。

第1回　日常について考えよう

第1回は平成29年6月2日（金）に開催し、33名の職員が参加しました。「（仮称）芸術祭？」開催を考える担当でもある企画調整課・齋藤課長から、本市の「芸術文化によるまちおこし」の取り組みについて説明を聞いた後、意見交換をスタート。

テーマは「『日常』について考えてみよう！」です。例えば「自分は何に豊かさを感じる？」「秋田らしい暮らしを感じる瞬間は？」という問いかけにみんなで意見を出し合いました。

「豊かさ」は、参加者の多くが自然や季節、そして食に感じているようです。あわせて、秋田での暮らしは、「五感・心の余裕がある」「季節の移り変わりなど場面の変化が感じられる」、そして「まちの規模が適度で、じっくり歩くと発見があり、いろいろな体験や体感がある」ということでした。次に、こうした日常をベースに、日常と超日常のつながり（関係性）について考えました。

「超日常」は「視点を変えると気付く、日常にひそんでいる新たな価値」、「非日常」は「普段存在しない異なる世界」として整理し、「日常」とつながる「超日常」を考えることにしました。

「日常」は私達個人個人の「暮らし」そのものです。その中の何かに私達が共通の意味や価値を認めたり、広く知られてくると「文化」として認識されていくのではないかと考えました。そして、文化をベースに何らかの表現や活動が立ち上がり、新たな価値として認められると「芸術」となるのでは？　という整理をしました。

一方、「つくられるもの」「見たことのないもの」である芸術は、「不要だけど必要なもの」であり、時間の経過とともに、文化として根付き、暮らしの中に溶け込んでいくものもあるのではないか、という逆方向からのベクトルも意見として出ました。この話し合いが私達の考えを整理する土台となりました。

第2回　芸術祭は何のためにやるのか

第2回は、7月3日（月）に開催し、17名の職員が参加しました。前回の話し合いをもとに、「日常」では、今あるものを再発見・再認識して編集することで、まちの活動と人をつくっていくことが大事であること、そうした中から日常の「豊かさ」やまちの「隙間」が浮き立ち、「超日常」に気付くことで新たな価値が生まれるのではないか、という仮説を共有してスタート。

次に「何のためにやるのか？」を考えるために、その先にある「まちの姿」について意見を出し合いました。私達は、将来秋田市をどんなまちにしたいのか？　どんなまちであってほしいのか？　その姿を思い描いたときに、「（仮称）芸術祭？」をやる意味が見えてくると思ったのです。共通していたのは、「住んでいる市民が楽しむまち」でした。その中に、「まち歩きを楽しめる」「歩きたいと思わせる」「ゆったりとした時間の中にスパイスがある」など、まちへの意見が見えてきました。

踏み込んで、じゃあ、どんな手法でやったら良いのか？　という問いかけには、「まち並みや歴史、自然など今あるもの、見えるものを編集する」ことと、あわせて、「見えない、知らない価値に気付かせて欲しい」し、「今ある見えないものを可視化する」のがいいのではないかという意見がありました。まちのいかがわしさも必要というまさにまちの「スパイス」につながる意見も……。

職員勉強会から

以上が、職員勉強会でまとめた「日常と超日常」です。内容の詰まった職員勉強会。この議論のまとめは、今年度（平成29年度）の「夜楽」やシンポジウムの際に、市の考え方として皆さんにご説明するベースとなっています。また、「夜楽」、シンポジウム、そして部活プロジェクトといった今年度（平成29年度）の取り組みに、ボランティアとして協力したいという職員も現れ、今後に光明が見えてきました。本当は、秋田公立美術大学の「AKIBI Plus」や、障がい者アートなどアートによる活動実例をそれぞれの担当職員から紹介し合うなど、今すでに日常で行われているアートを切り口とした取り組みを知り、超日常が生み出すものを深めることができれば、よりよかったと思います。平成30年度も、熱量のある職員を巻き込んでいけるよう、こうした機会を続けたいと思います。

日常と超日常

「日常と超日常」「暮らしの中の豊かさ」。その意味は一人ひとり違います。でも「豊かさ」という意識の根底にあるのは、「日常（生活）における充実感・満足感」「日常から離れた時の新たな発見・成長」のように、自分の感性や精神のあり方なのではないでしょうか。

歴史、人、活動、今の秋田のまちをかたちづくる様々なレイヤー（層）を感じる機会をつくり、「日常」を知ること。

そして、アートを切り口に日常を見る視点を変え、「超日常」に気付くこと。

ここに住む私達が一緒になって、一人ひとりが持っている感性や才能を発揮できる時間をつくり、5年後、10年後に、まちとしての創造力が伸び、豊かさを感じられるまちになっていれば良いと思います。

もちろん、「超日常」を知るための切り口は様々なものがあります。このプロジェクトが実現したときに、まちや社会を構成する大勢の「人」が主役となって動いた結果、多様なアートがつくり上げられているようにしたいのです。そして「日常」と「超日常」は、単純な二項対立ではなく、その境界線に立ち、ボーダーを超越することで見えてくるものがあります。二つの「日常」と「超日常」の間には、豊かで混沌とした領域があるのです。日常（生活空間）に異物を放り込んで、想像していなかった刺激が生じたとき、市民一人ひとりがどんなメッセージを受け取り、どんな反応をするのか。そうした切り口としてアートに触れ、私達が日常（生活空間）について考え直す機会をつくることが大事だと考えます。

まちには、場所と移動という「空間軸」と、過去・現在・未来という「時間軸」があります。こうした観点から、自分が暮らすまちの成り立ちだけでなく、自分が生まれ育った時代のこと、自分が今いる場所のこと、そういった物事に意識を向ける機会や場所をつくる。私達が普段触れている日常の奥には、もっと深くて遠い世界や時間があるということを多くの人と共有し、住み続けるまちの将来の姿を描いていくことが、これからの時代には必要なのだと思います。

もちろん、終わってからは秋田の文化（しきたり？）として欠かせない懇親会がありました。お酒が入るとまた違った意見が飛び出したり、職場・年代を超えた新たなつながりができたりという、職員勉強会でした。参加した職員からの感想レポートもどうぞご覧ください。



「秋田市職員勉強会レポート」（職員T・K：30代男性）

平成29年6月2日（金）、午後6時から7時30分まで中央市民サービスセンターにおいて、「あきたし豊醸化プロジェクト」を考える職員勉強会が開催されました。参加者は33人。講師は齋藤企画調整課長。最初に秋田市の政策の一つ、「芸術・文化によるまちおこし」について説明があり、市の総合計画における位置づけや、他の計画との整合性を確認しながら、芸術文化やまちづくりの考え方を共有。その後、「あきたし豊醸化プロジェクト」として参加職員と意見交換するため、プロジェクトを検討することとなったきっかけ、昨年度（平成28年度）行ったシンポジウムや「夜学」第０回の振り返りを聞きました。

この段階で参加者のみなさんも「なぜ豊醸化プロジェクトをやるのか？」ということを考え、それぞれ想いを巡らせたのではないでしょうか。その一方で、「自分が暮らすまちの豊かさとは？」「本当に自分は秋田の日常を知っているのか？」といった疑問も持ったのではないでしょうか。

当日の意見交換のたたき台として、「日常と超日常」というイメージが示されました。平成28年度は芸術・アートという言葉にとらわれすぎたことから、平成29年度は「日常」をしっかり見つめ、知ることがベースであり、その上で「超日常」を表現する部分にアートが関われるのでは？　としました。後半は、これをもとに意見交換です。

ファシリテーショングラフィックで参加者の意見を書き出しながら、意見交換となりました。参加した皆さんの日常における「暮らし」や「豊かさ」と感じるキーワード（食材＝産地の近さ、体感、季節、自然、夕日、場所の変化、まち歩き＝発見、まちの規模＝距離感、なべっこ＝ローカルイベント）は共感が持てるものでした。これらは、現在秋田市で働く私達大人（今回は公務員）が感じている秋田市の魅力だと思うので、これを次世代にどのように伝えていくかを考える必要もあるのではと感じました。

また、日常と超日常をつなぐ過程を、暮らし（Life）→文化（Culture）→芸術（Art）と仮置きして、どんな変化があると過程が変わるのか、意見交換をしました。自分は、芸術はホワイトボード（模造紙）のはるか外にあるものでは？　という気もしました。逆に、例えばポートランドの City Repair（道路の交差点をペイントしたり、みんなで食事できるようにする）や Naked Bike Ride（車依存社会に抗議するために裸で自転車に乗る、裸で自転車に乗って走る）などを見ると、楽しいまちは、日常のすぐ裏側に超日常があるのでは、とも感じました。

勉強会を終え、少し落ち着いてから考えると、まだ、「なぜ豊醸化プロジェクトをやるのか？　という疑問がありました。受益者は誰なのか（役所っぽい）。どんなまちにするためのプロジェクトなのか。参加者それぞれが様々な想いを抱いたのではと思いました。次の機会がまた楽しみです。



第3章「夜楽」
《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ

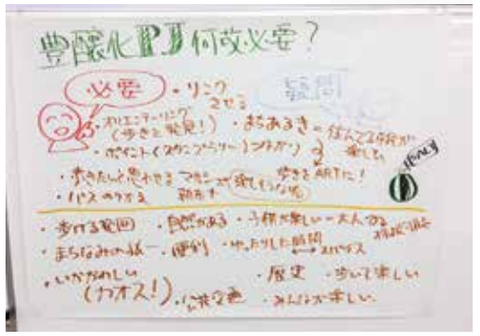
「あきたを学ぶ。あきたで創る。」
～職員勉強会からの学び～

職員勉強会を終えて、次の段階として私達は、「日常」と「超日常」の二つの面を意識し、「あきたを学ぶ。あきたで創る。」という視点で取り組んでいくこととしました。「あきたを学ぶ。」では、日常における人と活動、そして過去からの時間の流れを浮き立たせることで、まちを生き物のように見せ、普段感じることのできない流れを可視化、可聴化します。今年度（平成29年度）の3回にわたる「夜楽」では、「もう一つの場所」「食と自然」「土地の記憶」のキーワードでゲストをお招きし、人類学者の石倉敏明氏（秋田公立美術大学）のコーディネートのもと、あきたの日常を学ぶ展開となりました。

その一方、いつもの環境で生活していると日常に埋没して、自分と自分の住んでいる場所を客観的に見ることができなくなることがある、と感じることがあります。「あきたで創る。」は、（広義の）アートが普段、自分達がいる場所、時代を批評的に振り返る機会を与えてくれることから、一人ひとりがアートに触れ、見えないものを見る、想像力で風景を見るなど、暮らしの中の「ゆらぎ」に気付く視点を持つことで、「超日常」が目の前に立ち上がる機会をつくろうとするものです。こうしたことから、「夜楽」と連なるシンポジウムでは、「辺縁と創造のネットワーク」をテーマに、地域芸術祭の先を考えました。

その意味で職員勉強会は、日常の中にある豊かさや深さを学び、目の前にはないもう一つの世界や選択肢を、私達が暮らしの中に垣間見えるようにすることで、次の時代、未来への気付きを積み上げる機会になったと感じています。







「夜楽」《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ

プロジェクトにより、何らかの刺激、「日常」と異なる視点を提示する。「超日常」という気付きを得て、もう一つの道を指すことで、行動や発想を自由にしたい。開放したい。

例えば、私達は、音楽や美術を通して、普段「聴こえないものを聴いたり、見えないものを見る」ことができると思います。他都市での地域芸術祭も、出会うはずがないものを出会わせる回路をつくる、という面が少なからずあると思います。

そうした中、「夜楽」では、これまでの取り組みを通して、歴史や文化、まち並み、風景など、先人が積み上げてきたものを、私達の普段の生活とどのように結びつけ、これからの新しいまちづくりや場所づくりに生かしていくか、という視点で、コーディネーターの石倉さんから三つのテーマを提案していただきました。

・「もう一つの場所」をつくる
・「食と自然」をつなぐ
・「土地の記憶」を継承する

「『夜楽』《秋田のリアル》から未来を考える対話シリーズ」では、いずれのテーマにおいても、興味深い活動をしているゲストの方々をお招きし、秋田の日常を考え、深く知ることで新たに見えてくるものを探ることができたと感じています。ゲストの方々のお話から私達（担当職員）が受け止めたキーワードやメッセージを「ノート」としてまとめてみました。「ドキュメント」とあわせてご覧いただき、今年度の取り組みの意味を感じていただければと思います。









上から第１回、２回、３回の「夜楽」とシンポジウムの打ち合わせ。

「夜楽」第1回「もう一つの場所」をつくる　ノート

平成29年10月18日（水）18時30分～20時30分　エリアなかいち　にぎわい交流館ＡＵ2階　展示ホール

出演者　田村　一　氏（陶芸家）
　　高橋　希　氏（写真家・オジフェス主宰）
　　佐藤　祐輔　氏（新政酒造　社長）
　　服部　浩之　氏（インディペンデントキュレーター）
コーディネーター　石倉　敏明　氏　（人類学者・秋田公立美術大学准教授）

「場所」。私達が日常的に使う言葉ですが、深く、大事な言葉だと思います。「場所」にはそれぞれ歴史があり、文化があります。その中で芸術など様々な表現や活動が生まれ、風土と相まって土地の個性が育まれます。

「場所」とは「人が生きていく空間」。ゲストの方々のお話をうかがって、私達が今いる「場所」は誰がどうつくってきたのか。そしてこれからはどんな「場所」をつくっていくのか、と思いを巡らせました。

私達が取り組むプロジェクトにおいても「場所（私達が住むまち）」の成り立ちや日常を知り、まちを楽しむ様々な人と活動がつながる「場所」を意識していきます。まちに新たな化学変化をもたらす機会をつくること。そして、そのためにはどんな将来像を見据えて取り組んでいくべきなのかも常に考えていくこと。「場所」をつくるということに対して、軸足の置き方をしっかりと認識することができた、「夜楽」第1回を振り返ってみます。

一つのジャンルで括れない面白さ

高橋希（のぞみ）さんは、秋田に戻ってきて5年目。その前は東京でカメラマンをやっていました。戻ってきたときは、高校時代までのつながりも一旦途切れていて、友人も少なく、仕事もない、八方ふさがりな状況と感じていたそうです。

これを打破するために始めたのが「オジフェス（オジモンフェス）」。20年間過ごした東京を去るとき、お別れの意味を込めて撮った大事な友人達のポートレートを実家が所有する元事務所の建物で展示したのでした。テーマは、1年目（２０１４年）が「つながる」、2年目が「ひろがる」、3年目は「まじわる」。次々と変化していくユニークなテーマ設定ですね。

面白いのは、本当に「場所」づくりをやってきたことです。2年目の会場は、今、秋田市でも人気のスポット「KAMENOCHO STORE」が入居するヤマキウビル1階。3年目は、潟上市にある小玉会館。いずれも眠っていた「場所」をまちに開いています。小玉会館は30年使われていなかった小玉醸造さんの宿舎だった建物。ほ

ぼ仲間だけで改装したそうです。その結果、いずれの建物も、今、使う人が現れているということ。オジフェスの２０１７年、第４回のテーマは「つきぬける」で、一つのジャンルがどんどん広がっていて、最後は突き抜けるということで一段落となりました。

子ども向けのワークショップを入れたり、来場者と一緒に作品をつくったり、人を巻き込んで、「場所」をつくって、そこに人を集める。一つのジャンルで括れない面白さを持った「場所」をつくり、次につなげています。

高橋さん自身もアーティストなのですが、「場所」をつくるという立場で、マネジメントのノウハウを自然体でやっており、さらにはリトルプレスも編集するなど、本当に意識が広い方と感じました。

境界をまたぐ　磁場をつくる

服部浩之さんは、10年ほど美術館のアートセンターで学芸員をしていました。今は、文化施設に所属するのではなく、個人で展覧会やプロジェクトを企画するインディペンデントキュレーターをされています。

公共施設で働いていると一つの取り組みをやるにはすごく時間が掛かると感じ、自分でアートスペースをつくればいいんじゃないか、ということで「場所」をつくったのだそうです。そのきっかけは、当時一緒に仕事をしていたアーティストが「このプロジェクト、今の形ではできないけれど、何か一緒にできる方法はないか」とか「そういう人達をもっと別の視点で紹介する方法はないか」という視点を持っており、ご自分でも「自分の住んでいる家を開けば良いんじゃないか」と考えたのだそうです。結果的に、自分のやっている仕事をちょっと他の視点でこっちに持ってくるみたいな感じで、別の道（回路）をつくるような形になり、その時の人脈が今も続いていて、自分の活動の基盤になっているとのことです。

芸術祭みたいなことが起こることによって、できていく磁場があることが感じられ、プライベートとパブリックの境界はどこにあるのかなど、気になることが増えたとのお話には、非常に参考になるものがありました。

境界を曖昧にする　間口を広くとる

服部さんのつくられた「場所」には、自然に子ども達が立ち寄るようになったそうで、高橋さんのオジフェスと「子どもが遊べる余地、余白」という共通点があるということでいろいろな話をお聞きすることができました。例えば「縁側」のように境界が曖昧な「場所」への意識。やっていることは狭くても、間口を広くとることで、外の人を入りやすくするとか、一般人とアーティストの境目をなくすような参加の仕組みとか……。

そのためには会話をしたり、アイデアを交換したり、コミュニケーションが必要になります。何かやるときは、相手がいないと成立しないのですが、誰と対話するかを考える必要があります。意図や向いている方向さえ合っていれば、コミュニケーションが取れるので、そういった一緒に巻き込まれる「場所」、同じものが好きな人を見つける「場所」があったらいいのでは、と感じました。

高橋さん、服部さんのお二人からは、自分のやりたいことを実現するための人の巻き込み方や、自分自身の生活を開いて、いかに新しい実験の場をつくっていくかという視点のお話をお聞きできました。

秋田の磁場　地域の化学変化が見えてくる

次にご登場いただいたのは、田村一（はじめ）さんと佐藤祐輔さん。このお二人は親戚なのだそうです。そして年齢は田村さんが一つ上なものの、同じ小・中・高に通われたそうです。田村さんが友人に新政を勧められて「お酒として明らかにおかしい。変な奴、若い子が造っているんだろうな」なんて思っていたところ、お父さんから親戚であることを聞いたとのこと。その後、とあるところで顔を合わせる機会があって話したところ、酒の話ではなく音楽の話で盛り上がって、共通のバックグラウンドを感じて一緒に飲むようになったそうです。

お二人に対して、私達が共通して感じたのは、「遊び」と「まじめ」の連続性、そして柔軟に境界をまたいでいく引き出しの多さです。

田村さんの作品は、器でもあり、アートにもなり得る。大きなフィールドの中でいろんな場所を渡り歩いていると思います。音楽と合わせて制作したり、ご自身がキュレーターになって、「土地に縛られない」という視点で他県で創っている作家を秋田で見せる「辺境地展」を開催したり、その活動はつかみどころがありません。

最近は、ご自分の思考の中に「秋田の秋田らしさ」という新しい部分がでてきて、阿仁のカラミという素材を埋め込んだ作品を創っています。できてみなければわからない宇宙的な色合いに惹かれたのだそうです。新政とのコラボレーションで御自分の器と組み合わせたお酒を造るなど、お二人での活動も目が離せません。

そのお酒を造っている佐藤さんは、東京で物書きの仕事をしていて、日本酒という素晴らしいものを誰も知らない、もっと知ってもらわないといけないという思いから、酒造りをしたくて秋田に帰ってきました。戻ってみると実家の会社は経営状況が厳しく、立て直すために経費削減ではなく敢えて投資をして、酒造りと経営を同時にやれたことで、自分の好きなものをいち早く実現できたということでした。

佐藤さんは、「みんなが嫌がることは、自分にとっては競争相手がいないから面白い」と思うそうです。例えば、秋田は秋田杉の産地で、桶屋は小さい桶はつくるけれど、江戸時代に仕込みに使った大きなものはつくれないし、大阪のメーカーも木桶づくりをやめてしまう。そこで自分も木桶づくりができないか、と考え始めているとのこと。自分の暮らしているまちの問題、これから課題としてやらなければいけないことを遊び心をもってやっていくのがユニークだと思いました。

二人の活動の共通点は、土地に根ざしているものをしっかりと見つめながら、もう一方で他の地域とのシャッフルで化学変化を起こしていること。科学的なところと文学的なところの両面から、広い意味でのアートを捉えており、同じ山を異なるルートで登って頂上で出会うようなイメージを見ることができました。器から酒造りまで、大きな秋田の磁場というか、大きな地域の化学変化が見えた気がします。広い意味でのアートが、まちにどんな化学変化をもたらすのか考えさせられました。

「良い加減でこれからの秋田が見える場」をつくりたい

後半は、ゲスト4人でのお話です。コーディネーターの石倉さんは、「秋田という場所でクリエイティブなことをやるにはどんな条件が必要なのか」という視点で、ゲストの発言を引き出してくださいました。

服部さんは、「前提条件を疑うことからスタートするのは、美術やアートがやってきたこと。そういう意味では、田村さん、佐藤さんの実践は、今まで築かれてきた技術みたいなものを否定するわけではなく、前提としつつもどういうものを疑っていけるかとか、何が生まれるかということをやっていて面白い」と共感を覚えながらお聞きしていたそうです。

田村さんの「最初に想定していたものとは、結果的に違うものができるけれど、それが正解だと思うことがある」という言葉も印象的でした。これに関して、佐藤さんも「思った通りにできてきたらたちまち飽きてしまうけれど、もしかしてこうなったらという思いが酒造りを進化させてきた」とお話されていました。想定できない範囲が入ってくることが良いものになる。これからのまちにも、こうした「人による化学変化」があると面白いと感じました。

また、高橋さんは、「服部さんが自分にとってのメイン（仕事）の場所のまわりで自発的に余白をつくることで、自発的に動く人が増えてきて、面白いものになったことは、自分も同じ思いでオジフェスに取り組んでいた」ということをお話してくれました。

服部さんは、「アートのマイナーなところにも良いところがあって、隙間であるとか、誰もがいいと思わないとか、わからないみたいなことが重要じゃないか」とお話されていました。「余白」や「隙間」。この言葉は深いですね。

「いろんなタイプの方がいて、誰かが何か失敗したときに、誰かが違うところで何か新しい視点を引き出したりする、そんなことが起こる場が良い」「何か起こった時にどうやって次のステップを考えるか」と服部さん。「無名なひとでも面白く感じられる仕組み」「有名な作家さんばかりではなく、もっと場を求めている市民の方々も巻き込み、参加できる仕組みだったら面白い」と高橋さん。

お二人とも、「良い加減な」部分を見つけ、あいまいな何かを実現していく。そして、過程や結果において関わった方々お互いが感謝し合えるプロジェクトにしてきたのだと感じました。服部さんからは、トリエンナーレとかいわなくても、もっとユニークに違う形を考えた方が生産的ではとのご意見もいただきました。

そして、佐藤さんの「秋田には宝物があるのに、なかなか生かされていない」「帰ってくるとすごいと思うことが実際にある」という言葉に象徴されるように、ゲストの皆さんには「秋田での再発見」という共通項がありました。

私達も、「芸術祭をやりました。その結果は?」ということを考えれば、「終わった後に何かが始まる」とか「別の方向に展開していく」という、私達が住むまちの将来を見据えたプロジェクトであるべきと痛感しました。秋田にしかないものとか、一度外に出て、秋田に戻ってきて発見する何かを見いだしながら、人がつながる場をつくりたいと思います。

「夜楽」第1回「もう一つの場所」をつくる　ドキュメント

石倉敏明（以下、石倉）：「《秋田のリアル》から未来を考える対話」についてですが、「夜楽」というタイトルでこのシリーズを企画いたしました。これから何回か、仕事や学校が終わる夜の時間に、秋田に関するリアルなトピックをとりあげて、少しリラックスした雰囲気で語り合っていきたいと思っています。そこで、「学」という言葉に換えて、音楽や能楽で使われている「楽」という言葉で、美術や芸能に関わるイメージを共有できたら、と考えています。

その第1回目が『「もう一つの場所」をつくる』というテーマです。ここでは、場所とは人が生きる具体的な空間のことをイメージしていますが、それは単なる無機質な空間ではなくて、歴史や文化が生まれ、記憶が伝えられていくような認識の枠組みのことを指しています。たとえば、あるまちで暮らしている人が、災害や事故で人や土地とのつながりを失ってしまう時、自分の居場所を失って生活が続けられなくなってしまうということも起こり得るわけです。この場合、場所とは、まちに暮らす人々にとって、生活の現実そのものです。そして場所の中でこそ、芸術が生まれたり、ユニークなその土地にしかない人々の暮らしの特徴も表れてきます。つまり、人間は場所がないと生きられないといってもいいくらい、場所という問題は大事だと思います。

今日は、実際に「場所づくり」を実践されているゲストをお呼びしました。初めに高橋希さんと服部浩之さんのお二人に、今までどういう場所づくりをしてきたのか、という具体例を紹介していただきます。お二人の話から、与えられた場所ではなく、これから必要な場所をいかにイメージしたり、つくり上げていけばよいのか、どのようにして場所づくりをしていけるのかという話を深めていきたいと思っています。

高橋さんは「オジモンカメラ」という屋号で、カメラマンとして活動をされているほか、「オジフェス」というユニークな地域フェスティバルを企画・運営したり、「ユカリロ」という出版とウェブ発信のプロジェクトを続けたり、とにかく多彩な活動を続けていらっしゃいます。

高橋希（以下、高橋）：私は秋田に戻ってきて5年目です。大学進学で上京して、20年間東京にいました。東京ではフリーのカメラマンだったので、秋田に戻っても同じことをしようと思っていたのですが、友達とのつながりは途切れていたし、仕事もないし。家族も一緒に来たんですけれども、半年くらいは八方ふさがりで、この状況を打破しようと思ってはじめたのが、オジフェスというイベントです。

20年過ごした東京から引っ越すときに、大事な友人100人のポートレートを撮ってきました。秋田でこれを展示をしたいと思ったのが、オジフェスをやろうと決心したきっかけです。実家が所有する小さな空き家でやろうと、自分達で改造したんです。イベントは3週間くらいやりましたが、来場者自身に正の字を書いてもらうことで、何人来たかを確認していました。また、面



石倉 敏明／人類学者
1974年東京都生まれ。専門は芸術人類学・神話学。秋田公立美術大学准教授（アーツ&ルーツ専攻）。明治大学野生の科学研究所研究員。共著・編著に『野生めぐり』（写真／田附勝）『人と動物の人類学』『道具の足跡』『折型デザイン研究所の新・包括図説』『タイ・レイ・タイ・リオ紬記（高木正勝CD＋神話集）』『Lexicon 現代人類学』など。

白いと思ったら投げ銭をしてくださいとお願いして、額じゃなく数で、毎日投げ銭日記を公開しました。

石倉：入場料はなかったんですか？

高橋：2回目までは無料です。2年目は秋田の人や風景を撮った作品を展示して「ひろがる」というテーマで開催しました。このときは前年同様、広面と、現在は「KAMENOCHO STORE」さんが入ってるヤマキウビルをお借りして会場にしました。3年目は、潟上市にある小玉醸造さんが所有する、30年間使われていなかった小玉会館に場所を移し、改装はほぼ全て仲間達で行いました。

石倉：あの時は改装工事から会場の掃除まで、本当にあらゆる準備を自分達でやっていらっしゃいましたよね。

高橋：床が腐っていたので、畳を捨てて床板をはがし、根太（ねだ）を組みなおすところから工事しました。4回目のオジフェスでは、参加アーティストのギャラリートークを行ったり、陶芸家の田村一さんと安藤郁子さんに公開ワークショップをやっていただいて、来場者の方と一緒に作品をつくり上げてもらったり。ただ、オジフェスは4回目でいったん区切ろうと考えています。

石倉：実際にオジフェスに参加してみると、地域の美術作家・工芸作家の作品展示があったり、カフェスペースや出店があったり、子どもが遊べるスペースがあったり、かなり「ごった煮」のイベントだということを感じました。それなのに、不思議な統一感と、作品展示に対する配慮やセンスも感じました。

　たとえば地域芸術祭と呼ばれるプロジェクトでは、アーティストの視点と「祭り」の視点がちぐはぐになってしまう例も多いと思います。高橋さんはアーティストでもありますが、もっと意識が広いんですね。場所をつくるという立場で、運営に関わるノウハウをたくさん持っていて、ひとつのジャンルで括れない面白さがあります。各年度のテーマもユニークで、２０１４年が「つながる」、2年目が「ひろがる」、3年目は？

高橋：「まじわる」、そして最後の4年目が「つきぬける」です。

石倉：最初は写真展示からはじまったプロジェクトが、4年間で思いもよらない複合的なフェスティバルに発展していく。一つのジャンルがどんどん広がっていって、最後は突き抜けてしまうという、壮大なプロジェクトだったわけですね。それがひと段落したところですが、もちろん普段は撮影の仕事を続けていらっしゃると思います。

高橋：そうですね。そのほか、同時期に秋田に来た、編集者の三谷葵（あおい）さんと一緒に、ユカリロ編集部という活動もしています。やりたい場所がなければつくればいいのと同様に、やりたい雑誌をつくろうということで、自分達で出版社というか編集部を立ち上げて、今現在3冊ほど出版しています。

石倉：ありがとうございます。自分のやりたいことを本当に実現してしまう高橋さんのパワーとアイデアの豊富さ、実行力は目を見張るものがあります。

　さて、続いてご紹介する服部浩之さんは、２０１７年の春に、秋田公立美術大学の大学院に赴任されたばかりのインディペンデントキュレーターです。とても刺激的なアイデアとユニークな展示経験をお持ちなので、ぜひご紹介ください。



高橋 希／写真家・オジフェス主宰

１９７４年秋田市生まれ。明治大学卒業後、写真家・河村悦生氏に師事し独立。フリーランスのカメラマンとして活動していたが、２０１３年4月に秋田へ戻る。写真家として活動しながら、インディペンデントのアートイベント「オジフェス」（4回実施）や、〈普通の人の普通の暮らしにひそむ面白さ〉をテーマとしたリトルプレス『yukariro』を仲間とともに制作している。
https://ozimoncamera.tumblr.com/

服部浩之（以下、服部）：僕は10年くらいアートセンターで学芸員をしていましたが、今は個人でいろんな展覧会とか、プロジェクトなどのディレクションやキュレーションをしています。施設に所属せず、インディペンデントキュレーターとして活動しています。

　学生の頃は建築設計の勉強をしていましたが、縁があって今は現代美術の仕事をしています。主にアーティスト・イン・レジデンスといって、ある地域にアーティストが滞在して作品をつくり発表するという創作と交流活動の企画運営をやっていました。公共施設などでなにかやるには、すごく時間がかかることが多いんです。若い頃は、思いついたことをパッとやりたくなるんですが、できないときにフラストレーションを感じてしまい、自分でアートスペースみたいなものをつくっちゃおうと、自宅を他者に開いていきました。

石倉：その活動は公立の施設で働きながら、同時にやっていたんですか？

服部：そうです。公立の文化施設に対して窮屈さを感じていましたが、一緒に仕事していたアーティストが面白い考え方を持っていて、「このプロジェクト、この形じゃできないけど、ほかにできる方法はないかな」とか考え、住んでいる家を開放することにしました。

　美術の仕事をしている友人と家をシェアしていて、とてもオープンな空間でした。近所の子ども達が縁側から入ってくるようになったり、アーティストと飲み会をするようになりました。公共のアートセンターでの仕事とプライベートな場で起こることをつなげることは、視点を変えると、様々な資源や能力を解体し改めて組み立てることで、別の道（回路）を生み出すことでもありました。

　考え方として、予算がないからやらないとか、場所がないからできないではなくて、その時、その状況でできることはなんだろうとか、今ある資源をどうやったら別の方法で活用できるんだろうとか、そういうことを考えるきっかけをこの場所で培いました。

石倉：そうすると、ある意味ではパブリックな仕事の領域と、自分自身の生活というプライベートな領域が混ざっていくことになりますよね？

服部：そうですね。プライベートとパブリックの境界を曖昧にすることで、可能性を拡張しようとしてたんだと思います。

石倉：お祭りのような要素もあって日常とアートの境界だったり、日常と非日常の境界であったり、普通に暮らしている意識と特別な空間の境界をまたぐことをやられていたのかな、という印象を持ちました。ただ、高橋さんも服部さんも、場所づくりの最初の動機がすごくシンプルですよね。

高橋：私の場合は展示を通して秋田でまだ出会ってない、趣味が同じ人、感覚が似ている人と出会いたいというシンプルな動機がありましたが、知り合いだからオジフェスに出てもらうことは極力しないようにし、気になる方には面識がなくても連絡をし



服部 浩之／インディペンデントキュレーター

１９７８年愛知県生まれ。２００６年早稲田大学大学院修了（建築学）。09年–16年青森公立大学国際芸術センター青森[ACAC]学芸員。アジア圏を中心に、展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開。近年の企画に、「十和田奥入瀬芸術祭」（十和田市現代美術館、奥入瀬地域／13年）、「あいちトリエンナーレ２０１６」（愛知県美術館ほか／16年）、「ESCAPE from the SEA」（マレーシア国立美術館、APW ほか／17年）など。

て出店依頼するやり方を続けてきました。参加してもらいたいアーティストには、「あなたの作品が素敵なので一緒に展示しませんか？」という声がけをしました。趣味が似ている人とか、やりたいことが似ている人とシンプルにつながっていきたいというのが、その理由です。またオジフェスは、巻き込まれ、巻き込んでいくのが特徴となっています。

石倉：場所づくりの形としての巻き込み型ですね。でもそれは一方的ではなく、高橋さんが巻き込んだというよりも、今度はこっちが別のプロジェクトをやりたいから、互いに新しい実践の文法をつくっていく、というような相互的なプロセスになっていると思いました。

もうひとつ、子どもがたくさんいる、というのも特徴的でしたね。

高橋：子どもが集まってきて、見守る大人が増えてきて、違う日にもまた来ちゃったみたいな。振り返るとオジフェスはリピーターが多かったですね。

服部：僕は子どもに向けて家を開いていたわけではありません。子どもや猫は不思議に鋭い空間認識能力みたいなものをもっていて、心地よい場所に自然とひきつけられるんですね。川遊びしていたら、気持ちよさそうな縁側を発見したから入っちゃおうみたいな感じで！　そのうち一緒にワークショップもやり始めていました。

石倉：子どもは自然発生的に自分で遊びを開発したり、出入りしたり、自分達で発明して何かやったりしますね。大人とはちがう認知マップを持っていたり、想像力で何もない場所をつくりかえたりできる。

高橋：境界を曖昧にするというのは私も重要視しています。場所とか受け入れ態勢とか、いつでもどうぞっていう感じにすることで、外の人が入りやすくなる。境目をなくしたいということで、毎年オジフェスの最終日にやっていたのが「０円マーケット」というイベントです。

石倉：０円マーケットというのは、なにか物を出品するときに、対価としてお金ではなくて、モノやパフォーマンスによって交換できる市場、ということですね。

高橋：そうです。一芸交換でも物々交換でもいいけれど、やりとりから話すきっかけが生まれるじゃないですか。私は出産後に東京の葛飾区に引っ越したんですけど、暮らし始めた当初は友達がいないし、それまで住んでいた世田谷区と文化が違うために苦しくて。そこで救われたのが、個人商店の人と喋ることでした。その繰り返しがすごく気分転換になった経験から、秋田でも気軽に喋れる場があればいいなと思い、０円マーケットを企画しました。

石倉：大型の商業施設とかチェーン店では、お金だけの交換になってしまいがちですが、個人商店には一人ひとりが対話をしていく仕組みが残っていますね。服部さんの仕事にとっても、言葉やアイディアを交換したり、いろんな人間とのコミュニケーションを深める、という側面があると思うんですけど、その辺りはどうですか？

服部：大きな作品とか展覧会は一人じゃできないもので、いろんな職能の人と関わりながらつくりあげられます。僕は何かやるとき、対象は誰だろうとか、誰に向けてるんだろうというのがすごく気になります。展示って相手がいないと成立しませんが、向けている相手とやってることがずれるとすごく不幸なことになってしまいます。人のアーティストまで様々な人と対話をするわけですが、お互いの見ている方向が共通していたり、たとえそれがズレていてもズレが認識できてさえいれば、コミュニケーションは大抵の人と取れるような気がします。

石倉：パブリックな仕事って、役職とか立場から話をしたり、立場同士でなにかつくったりすることが多いと思いますが、お祭りって立場が溶けてなにか混ざったり、巻き込まれていったり、一緒に盛り上がり、盛り下がりの連続ですね。そういう意味では、地域の人とアートとアーティストが一緒に巻き込まれていく場所をつくるということが芸術祭の企画にとっては必須だと思います。それは個々の作品の質や鑑賞体験にも直結しますね。

高橋：18歳まで秋田にいたので、昔のつながりがそこかしこに点在しています。例えば中学、高校、生まれ年とか。そういうものは結構あるんですけど、年齢を超えた趣味のつながりなどは見つけにくい。そういう共通項を見つける場所があったらいいなって思っていました。

石倉：高橋さんは活動の記録というか、あとに残る形というのは考えていますか？　秋田では、公立の美術館に記録や図録をつくる予算がない、ということが問題になっています。何かやっただけ、やりっぱなしではなくて、その後に続けるっていう意味でどうでしょうか。

高橋：オジフェスをやるに至った経緯や全活動を記録した手づくりの本をつくろうかなと思っています。ユカリロの同僚である三谷に「１万字インタビューしてほしい」とお願いして取材してもらった記事などを集めて。手づくりすることでオジフェスらしさが増すかなと思っています。

石倉：それは楽しみですね。服部さんはどうですか？　今までの活動をどのようにして後に残していくか考えていらっしゃいますか？

服部：写真とか映像より、もう少し手掛かりの少ないと思われる言葉で残るものは面白いと思っています。例えば関わった展覧会を自分が言葉にすることもあるし、別の人にレビューみたいな形で書いてもらって残すこともあります。何が残るかは後世にしか分からないわけですが、当事者の意見や想いだけではなく、客観的な他者の視点で見えてくるものも重要な気がしています。

石倉：レビューは大事なポイントだと思います。たとえば作家が自分で展覧会のために書くテキストと、第三者が批評的に書くテキストでは、作品や展示に対する距離や認識のあり方も変わってきますね。キュレーターの仕事は、そうしたいろんな人の言葉を引き出したり、残るものと残らないものの関係を考えるという側面もありそうです。

服部：何も残らないことも重要だと思っていて、かたちに残らない価値をどう考えていくのかを最近特に考えてますね。

石倉：お二人の話から、とてもおもしろい論点がいくつも出てきました。



オジフェス最終日イベント「０円マーケット」



オジフェス２０１７展示「化ける」

さて、次に登壇します田村一さんは陶芸家で、器を創ってますが、同時にかみこあにプロジェクトや秋田県立美術館でも、アーティストとしての作品を発表されていますね。工芸と現代美術では、それこそ展示場所やオーディエンス、批評のあり方も変わってくると思いますが、モノを創るという作者の立場からはどんなふうに意識されているのでしょうか？

田村一（以下、田村）：僕の中では、器とオブジェは同じ感覚で創っていて、そんなに分けてはいません。器を創るにしても、単純な曲線を連ねていくという感覚がどこかにあって、それを複雑にするか単純にするかアーティスティックになるかの違いだと思っています。

石倉：田村さんは、他で見たことがないタイプの作家です。太平山の麓で工房を営み、自分の物づくりの場所を持ちながら、展示活動は日本全国、そしてアジアやヨーロッパのギャラリーなどにも広がっています。秋田でも「辺境地展」という展覧会をやったり、漫画の「へうげもの」のプロジェクトに関わったりという、サブカルチャーとクラフト、アートの境界をまたいでいくような活動をされてますね。

田村：自分の活動に区別はないんです。やりたいか、やりたくないかを考えてふるいにかけ、やりたいんだったらやる、ちょっとなっていうんだったらやらないっていうだけですね。

石倉：意識としてはモードを変えたり、自分の中で立場を変えるってことではなく、同じような大きなフィールドのひとつとして、いろんな場所を渡り歩いているという印象でしょうか？

田村：そうですね。器を創る、アーティスティックなものを創るのは、意識も手間も違います。例えば、作家は創ったものがどう使われるかに積極的に関われないと思っていて、それが自分の手もとにある期間は短いし、先方に渡ってしまえば使い手のものになってしまいます。それに関しての思いだったり、思いをどう入れるかで作家の違いが出たり、作家の面白みだったりすると思います。

石倉：田村さんの活動でもうひとつ面白いな、と思うのが、土地との関係のつくり方です。天草の陶土を使ったり、益子で技術を磨いたり、というインターローカルな地域性も感じますが、他方で日本酒用の酒器や「かやき鍋」などの作品は、秋田の食文化と深くつながっていますよね？　日本各地の料理が、場所性として作品に映し込まれているように感じられます。

田村：ジンギスカン鍋やご飯が炊ける鍋、焙烙（ほうろく）とかを創るのは僕が料理好きのためですが、きっかけはかやき鍋です。下浜にいる祖父が、「一（はじめ）は知らねど思うども、昔はよー、30センチくらいのホタテあって、かやぎの鍋さ使ったんだ。今のホタテの殻なんか小せくて、かやぎ食った気さねがら、おめまずでっけぐ貝殻創ればいいねが」って言われたんですよ。30センチのホタテの貝殻って見たことないけど、見立てというのは陶芸ですごく大事なんで、じゃあホタテっぽいやつ創ろうとなり、楽しいので自分の器にもフィードバックするんだけど、耐熱調理器具の形って、僕の器の形とまるっきり違うんです。あの形は磁器のモードで創ってみようとしてもできないんです。



田村 一／陶芸家
１９７３年秋田市生まれ。92年早稲田大学入学。美術研究会陶芸部にて「陶芸」に触れる。２０００年大学院修了後、自作を世に問い、陶芸家になる。02年縁を辿り益子へ。11年秋田市仁別に戻る。

石倉：田村さんは他にも轆轤（ろくろ）の音をサンプリングして、その音をエフェクターにつないで音響体験とともに制作を実演するような、音楽とのコラボレーションも精力的に行っています。誰もやっていない実験的なクラフト、アート、音楽をやってるという意味では、秋田の地域性を背負ったワン・アンド・オンリーだと思います。そういう試みが若手作家を集めた「辺境地展」や秋田公立美術大学のギャラリーでの展覧会に展開していると思います。

続いての佐藤祐輔さんは、新政酒造の社長さんで、日本酒をはじめ、秋田の発酵食品文化を発信するお一人でもあります。どういったことから今のスタイルとか、他にないような活動をされるようになったのかお聞きしたいですね。

佐藤祐輔（以下、佐藤）：基本的には酒造りをやりたくて、２００７年に東京から秋田に帰ってきました。東京では物書きの仕事をしていて、雑誌の記事書いたり、自分の本を編集したり、本をつくったりをかなり長くやってました。

石倉：物書きをしてるときの意識と、お酒を造ろうと思って帰られてからの活動というのは、どうつながっていますか。

佐藤：ほとんど同じなんですよね。僕がかなり前にやってた仕事は、食品添加物とかに関する記事がメインでした。ほかに消費者問題とか、悪徳企業とか、格差問題とか、結構硬い記事ばっかりですね。一番収益の柱になっていたのは「週刊朝日」のような、ちょっと硬目な雑誌だったりしましたね。でも、それだけじゃ食べていけないから、すごいゆる い仕事もいっぱいあって。「週刊 SPA」や「月刊サイゾー」などに芸能記事書いたりとか。漫画の原作なんかも大事な副収入でしたね。

石倉：意外ですね。芸能記事も書いていたんですね。

佐藤：そうですね。政治記事も多かったです。総裁選の時に、谷垣さんの実家に取材に行ってみると、廃業寸前の酒蔵だったので驚きました。懐かしいですね。なんでもやるから、お前これやってこいみたいな。そういうのがバックグラウンドにあったんですが、酒造りしたくなったのも、日本酒という素晴らしいものをもっと知ってもらいたいと。私は純米酒が好きなんですけど、日本酒に対する誤解を解きたいというのは昔からありましたね。酒造りの前にそういう方向性があって、実家に帰って蓋開けてみたら赤字が結構ひどくて、経営もやらなきゃいけなくなったんですけど。

石倉：なるほど。ただ、そういう状況の会社を立て直そうとすれば、まずは経費削減とか、規模の縮小に走ってしまいそうですね。普通だったら立て直すことに追われて、遊び心を忘れたり、一切のものを自分に与えることは我慢して、経営を立て直すところに専念しそうなものですけど、そうではなかったっていうことでしょうか？

佐藤：うまくいっていない会社というのは、追い込まれて経費削減とかに走って、ヒット商品とかができなくなります。どうせ潰れるからいいやってことで、どんどん銀行から金借りようと思いました。無理にその場で投資しても、命まではとられないから、大丈夫かなと。

石倉：大胆な作戦ですね。

佐藤：まぁ独立志向が強くてほぼフリーランスのように生きてきてたから、会社が潰れても怖くはないというか、一人でも生き



佐藤 祐輔／新政酒造 社長
１９７４年秋田市生まれ。99年に東京大学文学部卒業後、編集プロダクション、ウェブ新聞社を経てフリーライター、編集者となる。伊豆半島の居酒屋で飲んだ日本酒の圧倒的な完成度と存在感に心打たれ、日本酒に目覚める。２００７年に家業である新政酒造（株）に入社。10年には秋田の蔵元の若手とともに「NEXT5」を結成し、日本酒の新たな可能性の追求を始める。12年に新政酒造（株）の代表取締役社長となり現在に至る。

ていけなくもないんです。もちろん、倒産なんてことになったら、社員にとっては大問題ではあります。彼らの生活のためにもそれは避けなくてはならないということはわかっていました。ただ手をこまねいているわけにもいかない。それより、自分なりに一生懸命考えて、リスクを背負って新しいことにトライすべきだろうと思いました。その上で、潰れたらしょうもないわけです。結果論ですが、実家が業績の良い会社でなくてよかったです。私が大手を振って好きなことをできたのは、まずは会社の業績が悪かったからですから。

石倉：僕から見ると、佐藤さんの魅力というのは、遊び心とストイックなところが連続してるところですね。農業もやられていて、お米をつくる環境の問題として、地域の稲作の継承についても考えていらっしゃると思うんですけど、そういった真面目なところと、遊び心というのはどういうふうに連結しているんですか。

佐藤：だいたいみんな嫌がることって、僕にしてみると、かえって競争相手がいないから面白いんじゃないかって思ったりするんですよ。農業なんかも、みんな儲からないって悲観的だけど、だからといって世の中からなくなるわけでもないし、結局誰かがやらなきゃいけないわけだし。むしろ僕は、人があんまり見ないようなことに頭を突っ込んでみるタイプかもしれません。だから誰かがやめると、じゃあ僕やるみたいなことを急に思いますしね。

今、取り組みを始めているのは、農業。あと、木桶づくりです。メンテナンスは大変だし、毎回味が変わるし、酒は漏れるわで、どこの蔵も戦後からまったく使っていません。けれども、うちの蔵は木桶が大好きなんですよ。だから木桶をどっさり買って、いずれ木桶だけの酒造りをしようと思ってるんです。ちなみに、こうした木桶は大阪のメーカーがつくってくれているんです。

秋田は秋田杉の産地ですから、木材加工業もある程度残っているんですけど。秋田の桶屋さんは、小さな樽はつくるんだけど、六尺桶っていう、でっかい、江戸時代に仕込みに使ってたようなやつはつくれないみたいです。能代の製樽屋さんが、樽ばかりでなく、酒造りの道具なんかもつくってくれるんですね。そこで先日、ちょっと説得して、でっかいのつくってよって話したんだけど、ビジネスベースに乗らないから無理、難しいって言われました。でも、誰かがつくらなければならない事態が発生してしまいました。２０２０年にさっき言った大阪の木桶メーカーが、木桶づくりをやめちゃうことになったんです。これって、結構大変なことで、江戸時代から連綿と続いてた、日本酒とか味噌とか醤油とか作る木の桶がこの世からなくなっちゃうということなんですよ。

石倉：僕は美術大学の教員や学生も、そういう「かっこよさ」に目覚めてほしいなあ、と思う時があります。

佐藤：もっと農業とか。

石倉：実は美大で一番欠けているのはそこですね。農業であり、「食べもの」の問題であり、自分の暮らしている場所の問題であり、植物や動物、素材になっている自然といった問題。僕はそういう根本的な問題に対して、遊び心を持って取り組んでいるのが佐藤さんのユニークさでもあると思うんですけど、田村さんもそういう意味で、切実な北の環境の中で、器づくりをやっていますね。



新政酒造で日本酒を仕込む木桶

田村：秋田に帰る前は、栃木県の益子にいました。益子は陶芸家の濱田庄司（はまだ しょうじ）が来て民芸の里として活動したところで、土地の土を使って、土地の石を釉薬にして、器を粛々と創る産地です。出会いがあって東京から益子に行ったんですが、僕は天草の土で磁器を創っていたんで、「益子の土でやらないなんて、何のために益子に来たんだ」、みたいなこと言われるんですよ、益子でやる意味がないと。

石倉：益子スタイルでやりなさい、という。

田村：じゃあ益子の土で1回創ってみるかってやってみたんですけど、僕にはできないんですよね。無理してでもしょうがないので、益子で磁器を創り始めました。益子にいたときから秋田に帰る、帰るって言っていたんですけど、秋田になんで帰るのか、寒いし、雪降るし、不便だし。益子は東京に近いし、益子にいたほうが作家としては楽だという話を何人にもされたんですけど、ちょっとした出会いがあって、２０１４年の夏に仁別に場所を決めました。

石倉：仁別は秋田市の中心から見ると少し雪深いし、駅からは離れている。でも、太平山という聖域とつながっていて、自然の力に溢れている場所です。田村さんの作風にぴったり。不便なエリアでもありますよね。自分で自分を追い込んでいるようにも見えるけれども、田村さんにぴったりくる何かがある。

田村：僕は青白磁という青白い器を創っています。益子にいた頃に、この色ってなんだろうと考えたとき、雪積もった時の色じゃんってすぐ思ったんですよ。雪って塊になると青く光ることに気付いてしまったら、秋田に帰らなきゃだめだと思って。

「辺境地展」の話をしましょうか。僕がある種キュレーターになり、よその作家を秋田で見せようという展示を、これまで5回やったんです。

石倉：「辺境地展」の作家には、器を創る方もいれば、美術寄りの方もいますね。

田村：自分でテーマを毎回設定して、5回やりました。辺境地展という名前は、その土地で産したものを使って作品をとらなきゃいけないっていう考えに対して、アンチの答えを返したかったんです。土地に縛られてない作家を秋田に集めてやってみようって。だからその産地に対する言葉として「辺境地」って言葉を選んだんです。第1回の時は、千葉と鹿児島と大阪で創ってる子達を集めました。創ってるジャンルもバラバラ。その時はもうほんとに産地の端でやってる人達を集めるというのがテーマでした。

石倉：今ではグループというよりも「アート・コレクティブ」という言い方が多くなりましたが、単なる仲良し集団ではなく、作品に向き合う姿勢や意識の持ち方として、「辺境地」というコンセプトが新鮮でした。

田村：作家をそこに絞ったんで、でかいオブジェを作ってる女の子や、釉薬ががきれいな子だったり、造形が面白い子であったりで、作品としては統一感がないんです。２回目は秋田県出身の世界的な作家の今野朋子さんを紹介したくて。今野さんは本荘出身で、大きいけどすごく緻密な作品を作る方です。朋子さんと話してたら、「秋田でやりたいんだよねー」という意思表示を



作業場にて



太平山麓仁別の雪と青白磁

されるんで、じゃあ俺やりますって、朋子さんと合わせていい作家という考えで展開しました。

秋田がいいのは陶芸のギャラリーがあんまりないことです。東京とかでやると、付き合いのあるギャラリーがあったりして。例えば、ここでやりたいと言うと、「ごめんねっ、隣のギャラリーで俺やってるからできないんだよ」、そういう関係ができるんです。

石倉：秋田の人はよく「なんもねぇっ」て言いますけど、ないからこそゼロからスタートできるっていう。

田村：毎年冬にギャラリーのココラボ（ココラボラトリー）で個展をするんですけど、作家物の器って安くないんですよ。でもそれが、どんどん安くなり始めていて、ちょっとやべぇなって。50代の作家がそれに合わせて、値段を下げてるんですよ。それちょっとダメだろ、そのへんなんとかしなきゃ俺ら食えなくなるって思っているんです。

石倉：そのあたりのマーケットの問題はとても大事で。村上隆さんなんかも美術だけでなくて、工芸の値段の問題をすごく気にしています。そういう意味では秋田だからこそ、この地場を活かしてマーケットをつくったり。美術も工芸もデザインも含めて、展示環境とかまちの中でどうやって根ざしていくのかは、芸術祭うんぬんよりもっと大きな問題だと思うんです。

ところで、さっき田村さんが言っていた秋田の雪の色や、僕が感じるのは雲の色。すごくグラデーションがきれいですね。ピンクや青っぽい色が入ったり。秋田市は独特の空の美しさがあって、これは秋田の他の地域と微妙に違っている、と思うんですけれども。

田村：秋田の秋田らしさに対して、僕は思考に新しい部分ができてきています。阿仁のカラミという素材があります。銅山で銅をとった残りカスで、鉄とかマンガンの小さな粒をお客さんからいただきました。磁器は真っ白だったり、薄いブルーだったりしますが、そういう成分がちょっとでも入るとシミになって、基本的にNGなんです。でも、ちょっとお皿に埋め込んで焼いてみたんです。そしたら宇宙的な、茶色、黒、緑が入ってる妙な色になり、かっこいいぞとなったんです。

そのタイミングで、オジフェスでワークショップやって欲しいと希さんから連絡があったんで「カラミ埋め込みワークショップ」をやったんですが、できたものがすごいかっこいいんですよ。これはいいぞっていうことで、自分の作品にも積極的にカラミを使うようになったんです。新政とコラボレーションで僕の器と組み合わせてお酒を造るんですけど、杯を佐藤さんに見せたら、それが気に入ってもらえ、今回のコラボ作品にカラミを使うことになりました。

石倉：なるほど。また新しいコラボレーションが。

田村：その土地でできたものを使うことに対して、疑問に思っていると話をしてたんだけど、カラミは阿仁のものだから秋田のものということで、図らずも秋田のものを使ってるんですよ。これは何って絶対聞かれるんで「カラミと言って、秋田の阿仁銅山で……」という話が言えるんですね。そこがすごくうれしい。

石倉：その土地に根ざしているものと他の地域の要素がシャッフルされることによって、文化的な化学反応が起こることはあると思うんです。アートというのは美術だけではなく、火を使って「トランスミューテイション」（化学反応に変質）を起こす焼き物の技術も含むし、もちろん発酵によって物質を変えていくという、物自体を変える技術でもあるわけですよね。

田村：化学反応が起きるのは、すごい待たなきゃいけないんです。僕が佐藤さんと造ったお酒は、僕も室（むろ）に入って酒造りに関わったんです。蔵に泊まって2時間おきに麹の温度を計り、それをまた混ぜると麹の感じが違うことから、この期間は絶対離れられないと感覚で分かったんですが、それは陶芸も一緒で、作品を創るには窯を焚きますが、夜も何時間かおきに見ていくことが一緒じゃんって思ったんです。僕としては発見だったんで、今回のお酒は発見っていうユリイカ」という名前をつけたんです。

石倉：「我、発見せり」っていう意味ですね。英語のアートという言葉は「リベラルアーツ」という概念にも含まれているとおり、広い意味で人間が何かを行う技術のことをいいます。そういう意味では狭い意味でのアートではなく、広い意味でのアートを考えたときに、器からお酒造りまで含むような大きな地域の磁場というか、場所性の化学反応みたいなのが見えてくるのではないかという気がします。

ここまでは、秋田の磁場とか、地域でクリエイティブなことをやるには、どんな条件が必要かという話を聞いてきました。最初のお二人からは、自分のアイデアを実現するための関係の築き方や、自分の仕事の延長でどのように自分自身の生活をひらき、新しい実験をつくっていくかということをお聞きしました。後半のお話からは狭い意味でのアートを超えて、もっと文脈を広くとったときに、器とか道具の問題、あるいは秋田の水やお米を使ったお酒造りの技術なんかも広い意味でアーティスティック、クリエイティブび付けられるのではないか、というヒントをいただけました。

田村さんや佐藤さんのお話は、美術界の話題ではなかったかもしれないけれど、非常にアーティスティックで、だからこそ、新しい価だったと思うんですが、服部さんはどのように感じられましたか？

服部：前提条件を疑うところからスタートするというのは、美術とかアートがずっとやっていたことで、だからこそ、新しい価値を持ったりとか、違う考え方が出てくるんだと思っています。お二人とも、それぞれの視点で実践されていて、今まで築かれてきた技術みたいなものを否定するわけではなく、前提として引き受けたうえで、あえてそこに疑問を提示し、それによって新たな何かを生み出す。それはアーティストのつくり方と根本的にすごく近いと感じました。

石倉：田村さんは陶芸の世界の伝統的な決まりごとをそのまま粛々とやってるわけではなく、佐藤さんもお酒造りの世界では異端児的と言われるほど大胆な方法論を実践されていると思います。お二人とも、前提を疑うということは意識してやってらっしゃるんでしょうか？　それとも結果そうなるのかな。

田村：結果的にはたぶん欲求の方が高いんですよ。こういうのが創りたいというのが高いから、とりあえずやっちゃえって。できないんだったら、よく素材との対話みたいなことをいうじゃないですか。できないときはこうするといいよね、みたいなのは



KAMIKOANIプロジェクト2012
出展作品（田村 一）



カラミを埋め込んだ作品



解答として出てくる瞬間がポコッとあるんですよ。それって最初に創りたいなと思ったものとは結果的に形は違うんだけど、できちゃうんですよ。

石倉：佐藤さんにもお聞きしてみたいんですが、自分で思い描いていたお酒と、実際できてくるお酒って最初から一致しているんでしょうか？　それとも微生物が関わってくることなので、ある程度はコントロールできない部分もあるんでしょうか？

佐藤：思った通りに出てきたらたちまち飽きてしまうけど、もしかしてこうなったらというのがあります。

石倉：つまり出てくるであろう、もやもやしたビジョンのようなものがあるんでしょうか？　そのあたりを狙っていこうという技術とか。

佐藤：こう来たらこうなるはずだ、はありますね。例えば、5年前に、一個120万円以上する木桶をいきなり4個買ったことがありました。なんでこんなアナログなものが来たのかと、現場も困惑するし、同業者も首をかしげるし、そもそも販売した桶メーカーも驚いてました。でも自分としては、どういう味の酒ができるのかわからないけど、それはうまいまずい関係なく、江戸時代の人が普通にたしなんでいた「正統な味」なのだから、理解すべきだし、敬うべきだと思って買いました。結果、実際に酒造りをして出てきたのを飲むと、まったく古臭くなくおいしいじゃないか、ということになって丸く収まったのですが。

　ここまで現代的な味覚でもおいしく感じる酒ができるとは、予想してなかったみたいな。そういう驚きは、やっぱ造っていて、いいところだなぁ。だから田村さんも陶芸窯に入れたあとの器は予想できないでしょ。

石倉：このあたりの「暗黙知」はお酒や器といったジャンルに限らず、ありとあらゆるものづくりの領域に関わってくる問題であると思います。想定内とか想定外という言い方もありますけれど、想定できない範囲が入ってくるっていうことはむしろ喜ばしいこと？

田村：そうなんです。結局人によるから。いいものつくってる人って、手から絶対なんか出てるんですよ。そういう汁が。

佐藤：現場見てると、職人型の人間と、アートっぽいというかコンセプト型の人間ってのは分かれます。会社もアーティストというか、クリエイティブな人間ばっかりだと絶対回らないですよね。クリエイティブということがものすごく必要かどうか、僕は引いて見ているとそうは思わない。

石倉：ほんとそうですよね。クリエイティブ至上主義になっちゃうと、天才的なアイデアを競う発想中心の集団になって、技術的な確かさは問われなくなる可能性もありますよね。そのあたり、高橋さんにお聞きしてみたいです。イベントを開くためには現実的にお金の計算をしなきゃいけないし、来場者数や売り上げのことも心配の種になりそうですけど。どうでしょうか？

高橋：秋田に来た最初の年は、売り上げが70万円しかなかった中でオジフェスを企画しました。2年目までは持ち出し額は10万



くらいでしたが、3年目から小玉会館の修繕費が入ってきたことで持ち出し額の桁がどんどん変わってきて。これはもう自分一人で賄うのはやばいなと。かなり身銭切ってやってきたんですけど、合言葉として、新聞に全面広告出すよりは安いだろうと(笑)。その言葉を踏ん張りどころにしてやってきました。

石倉：なるほど。皆さんと共通してるのは、やらされていることではなくて、基本的に自分がやりたいからやってるというベースがあることかもしれません。普通は赤字だったら次は縮小しますけども、佐藤さんと一緒で、もっと大きな事業に展開していきますよね。

高橋：なぜかつぎ込んじゃうんですよね……。小玉会館に移転する話をしたときに、ほぼ100パーセントの人から「秋田市でやらないの？　潟上でやったら、誰も来ないでしょ」と反対されました。近いところなら行くとか、入場無料なら行くとかよく聞きますが、それであれば遠いところでも行きたいと思わせるような内容にしたいと。蓋を開けたら3年目は何千人か来てくださって、やってよかったなと思いました。

石倉：小玉会館、僕も最初はあそこが会場になると聞いて、半信半疑だったんです。ところが、いろんな人が関わって「場所」がよみがえっていった。本当にできたときには、心底びっくりしたんです。

高橋：なんで直せると思っちゃったんだろうって途中でくじけそうになって、後悔がものすごく押し寄せてきました。そんな時期に美大で開催した、服部さんと東京芸大の教授のトークを聞きに行ったとき、服部さんが自分にとってメインの場所で余白を作ることで、自発的に動く人が増えてきて、より面白いものになるという話をされていたんです。オジフェスもそういう場所になりたいと思い、よし、小玉会館直してやるぞと奮起したきっかけになりました。

石倉：服部さんは職業柄、現実的なマネージメントや段取りを考える場面と、アーティストのクリエイティブな発想を両立させなければいけない、という場面を数多く経験されているのではないでしょうか？　やりたいことがあるというアーティストと、こうやったら実現できるっていう具体的な知識との間で、たくさんの調整やネゴシエーションをすることが、キュレーターの仕事のイメージとして思い浮かぶのですが、実際のところはどうですか？

服部：僕は基本的にどんぶり勘定なんです。終わり良ければすべて良しみたいなところがあって。芸術祭とかは、想像できるありとあらゆる問題が大体起こるんです。がちがちに最初から完成像を描きすぎてしまうと、想定外の事態に対応できなくなって、思い描いていた理想像と異なるから「失敗」となってしまうことがあります。でも、ほとんどの物事は大体思い通りにはいかなくて、想定外の連続だと思います。そんなときに、なるべく柔軟に次の手や方向性を考えていけるように、大枠のフレームはしっかりと固めつつも、細かい部分は状況に応じて変化させていける余白をもつことが大事だと思います。

　問題を誰かのせいにしたり、犯人探しや責任追及するよりは、問題を共有し、一緒に乗り越えていけるチームや環境をつくることで、みんなが愉しみながら創造プロセスに携わることに価値があると考えています。



開放された服部さんの住居兼アートスペース「Maemachi Art Center（MAC）」（山口市）

石倉：キュレーターの中にも管理型の人もいると思うんですけど、服部さんのスタイルは常にアーティストと一緒に、あくまでも信頼関係ベースでやってるように見えますね。そして、アートの領域で服部さんが抱えている問題と、佐藤さん、田村さん、高橋さんがやってきたことは、やはりどこか通じている部分があると思うんです。これは悪く言えば「いいかげんな部分」、よく言えば「良い加減な部分」。つまり、あいまいな何かを実現していくにあたり、似ているベースがあると思います。たとえば皆さん、信頼関係は大事にされているように見えるし、それがあるからこそ、ありきたりの結果を越えた挑戦が可能になると思うのですが、いかかでしょう？

高橋：手伝ってくださる方はほぼボランティアに近いので、とにかく信頼関係を大事にして頑張っているつもりですけど、それでも足りていない部分もいっぱいあって。信頼がないと次につながらないなっていうのは意識していますが、それ以前に感謝の気持ちしかないです。

石倉：たしかに最後にお互いが感謝しあえるようなプロジェクトじゃないと、次に発展していかない、という気がします。一番残念なのは、とにかく大きなことをやりましょうということになったはいいけど、終わってから「終わりよければ良し」って言えるかもしれないけど、終わった後になにか始まらないと、気持ち悪いですよね。別の方に展開していくというのは、そういう信頼関係の証だと思います。

田村さんは一人でやってる部分以外に、ギャラリーやユーザーとのつながりがありますよね。佐藤さんは、職人さんとか酒造りをやってらっしゃる社員さん、デザイナーとのつきあいもあると思います。

佐藤：うちは美大の出身の子が、デザイナーで会社にいるんです。もともとフリーでやってたんですけど、途中からうちに入社してくれて。フリーでやってた時から、紹介でお仕事振ってたんですけど、誘ったら入ってくれたんですよね。かなり楽になりましたよ。

僕が酒造りを最前線でやってたのって3、4年くらい前までです。仕事しすぎて倒れちゃってから、実験作とかそういったものを主にやるようになって。一般的な定番のお酒は、やっと口うるさく言わないで任せられるような感じになりました。今は若手がある程度自由にやってます。僕は営業とかに行ったりするし、結構おいしいもん好きだから色々食べて、食全体の中の日本酒のあり方なんかを、最近は考えています。会社としてもやることが増えてきました。ただ酒造りするだけじゃなく、農業部門にも進出しましたし。今年から自分達で無農薬栽培もやり始めましたが……。まあ結果として、いもち病が出て無農薬栽培ではなくなってしまったんですけど。今年は非常にひどい天候の年ということもあり、結構難しかったですね。でも来年は絶対成功します。あと、さっき言ったように木桶の工房も今度つくらなきゃいけないです。どこに工房つくったらいいかって思ってたりもするんですよ。

石倉：田んぼはどこにあるんですか？

佐藤：自社田は、河辺の奥の方、もう大仙市がすぐ近くなんですが、鵜養（うやしない）という名前の山間農村にあります。秋田市なんだけど秋田市の人、ほとんど知らないんですよ。ほんと桃源郷みたいに素晴らしいところです。秋田県の真ん中にへそ公園ってとこがあるんですが、その近くです。仕事やりすぎて倒れて、全く廃人のようになった時、そのあと回復するのによく通いました。車を運転できるまで治ってからは、そこにできるだけ通って、瞑想したり、そこの風景に癒されたりしてカムバックできたので、恩返ししたいなという気持ちがすごくあります。

でも鵜養に限らず、ああいう素晴らしい山間農村みたいなのって秋田にいっぱいあるんですよね。でも、どこも農業では食っていけなくなり跡取りもおらず、平均年齢も70～80歳ぐらいまで上がってきちゃった。10年後にはこんな最高の景色が、水田地帯が無くなるのがわかりきってるんです。でも景観はいいんだから、あえて大量生産とは真逆の価値観で農業をやったりすれば、見に来てくれる人もいると思うし、すごく発展性のある仕事じゃないかなと僕は思うんですよ。そもそも秋田の稲作農業は、高齢化が進むにつれて、大量生産や省力化、機械化のほうへなびかざるを得ず、さらに魅力を失っていってるように見えます。無農薬栽培とかも、秋田であんまりやってないですよね。

石倉：そうですね。無農薬栽培をやっている実験的な農家もありますが、農業や殺虫剤の問題は、まだまだ大きくのしかかってきていますね。

佐藤：岩手とか宮城とか、地形的に不利なところの人が生き残ろうとして無農薬栽培とかして、いいお客さんつかまえて継続しています。平野で米の栽培に適している秋田が一番乗り遅れちゃったり、オーガニックにいけなかったり。宝物があるのに生かされてない例だと思います。秋田杉だって、チップみたいなのにされて、もったいないと思います。あああいうので木桶つくったらすごいと思うし、僕にとっちゃ宝物だらけで、やりたいことが増えるばっかりです。

石倉：そういう意味では、佐藤さんが実践されてきたように、秋田という土地は逆境をチャンスに変えられる土地だと言えるかもしれません。

佐藤：これは蔵に帰る前にある程度固まった感じの僕の思考なんでしょうね。秋田を長く離れてたからかもしれませんね。実際出て行ってそれはよかったんだけど、帰ってみるとすげえじゃんって思うことが実際ありますね。

石倉：たしかに外の視点で地域を見直してみると、気付かれていなかった特徴や資源が発見できるかもしれないけど、終わったをどう活かすか、という問題は「地域アート」以降のあらゆるプロジェクトが直面する課題です。同時に地域の内側にある「宝物」を誉めるだけになってしまったり、普遍的なテーマや芸術的な価値が二の次になってしまうような例も地域芸術祭の問題点として指摘されることが多いです。

果たして芸術祭を開催する価値はどこにあるのか、ということを考えてみたいのですが、全国的には最近たくさんの新しい芸術祭が始まっていて、ユニークな新しい取り組みが民間からもいくつか出てきている一方で、税金を使った芸術祭が想定したよ


小玉会館の改装作業


新政酒蔵の「NO6」（右）と「亜麻猫」（左）


秋田市河辺の鵜養地区

うな経済効果や動員数に結びつかずに社会的に批判される、というケースも増えています。特に、地域作家のコレクションや展覧会のドキュメント、アーカイブという地道な芸術政策を無視して、安易な地域振興策として芸術祭を企画し、一過性のイベントで終わってしまう危険性も多くの人々が指摘しています。

　服部さんは日本だけでなく、世界各地の芸術祭の事例を見てこられていると思いますが、最近の日本の地方のブームや、秋田独自の新しいプロジェクトを計画することについて、どのように考えていらっしゃいますか？

服部：芸術祭って言うだけでも5番煎じくらいになりますから、その構造自体を変えなきゃいけないと思います。ディレクターがいてみたいな構造、そういうものを踏襲する時点で失敗じゃないかと思います。トリエンナーレとかも言わなくていいと思いますし、もっとユニークに違う形を考えた方が生産的じゃないですか。僕はアートのいいところは多数決では決まらないことや、マイナーであることにもあると思います。隙間であるとか、誰もがいいと思わないとか、わかんねぇな、みたいなことが重要なんじゃないかと思っています。

石倉：そこはすごく大事なポイントです。例えば、美術展やアート・プロジェクトの成果を動員数だけで評価しようとすると、マイナーな分野の画期的な表現や実験的な作品展示は失敗とみなされてしまう可能性もあります。集客数の少なさが原因で、秀れたプロジェクトが継続できなくなった例は秋田市も経験しています。

服部：成功と失敗をどこで線引きするのかですよね。何をもって成功とするのか。だから価値基準をつくっていかなければいけないという気はしますよね。

石倉：アートはにぎわいをつくる手段ではないですよね。少なくともそれだけではないはずです。多様な価値観を育む仕掛けよりも「人の多さ」や「経済効果」が独り歩きしがちかも。

高橋：山形ビエンナーレってあるじゃないですか。実際に足を運んでみて規模感がちょうどいいなと思ったんです。有名な作家さんの力に頼るわけではなく、面白いと感じさせる仕組みや企画がすごく良くて、私は楽しめました。有名だからどうこうではなく、場を求めている市民の方々も巻き込み、参加できるような仕組みだったらより面白いのかなぁと思います。

石倉：僕もトークイベントに参加したのですが、たしかに山形ビエンナーレには他にはない特徴がありました。地域デザインや地域のユニークな作家が強く打ち出されていたり、ディレクターとして絵本作家の荒井良二さんが関わっている点もユニークでした。また、山形の東北芸術工科大学が主催しているので、大学の職員や学生ボランティアがスタッフとして活躍していたのも印象的です。東北でも芸術祭の新しいモデルがいくつか出てきていますね。

田村：県立美術館が改装中で、美大の今年度（平成29年度）の卒展をやる場所が決まらないという問題がありますね。「どうしよう」って学生達が言っているときに、この子達はオジフェスとか見たらどう思うんだろうって考えたんですよ。

高橋：小玉会館を貸そうかなぁと思ったんだけど、潟上だと遠いって言われるかなって思って、言えなかったです（笑）。



田村：この3人って逆境好きで、秋田帰ってきて、どうしたらいいんだろうとなった時に、制限がある方が逆に飛び越えれるみたいなことがありますが、美術大学の4年生が今の状態でどういう表現をするのか、どういうふうに乗り越えていくのかを、すごく楽しみにしています。

石倉：美大の卒業生達も美術館が使えない、という逆境を乗り越えるべく知恵をしぼっているので期待していてください。ところで、さっき田村さんが、秋田に陶芸のギャラリーがないことがかえって新しい展示を促すきっかけになるって言っていましたけれど、そのあたりが逆境を変えていくヒントになるのかもしれません。秋田には、たとえばココラボラトリーや小松クラフトスペースというユニークなギャラリーがあって、県外のアーティストやキュレーターのあいだでは、秋田県立美術館や千秋美術館よりもずっと人気があったりします。「もう一つの場所」とはそういう場所かなと思うんです。ある特定の業界とか、特定のジャンルに寄らずに、ジャンルの価値そのものをつくっていける場所を、そのまちが持てるかどうか。

田村：例えば、ココラボだったらライブや演劇もやる、まちのおばちゃんが描いた絵画展もやり、お酒の「NEXT5」のレセプションもやるなど、パンクなギャラリーです。

石倉：ココラボラトリーの面白いところは、もともと印刷会社の工場が入っていた物件を、使用者達が力を合わせて改装（リノベーション）したという点です。美術大学がある新屋でも、最近は空き家リノベーションプロジェクトが進んでいます。新政の酒蔵跡地が新しく秋田市のガラス工房になり、来年（２０１８年）は美大にアートセンターがつくられる計画もあります。新屋地域は、これから美大と連携しつつ、もうひとつの場所づくりが加速化していくのかなと。そこに卒業生とかが秋田市民と一緒になにかつくれる、創造的なプロジェクトが立ち上がったらいいなと思っています。

田村：僕の工房は美大から離れているので、僕は僕で美大がつくる場とはまた違う場をつくんなきゃいけないと、使命感的に思っています。

石倉：そういう意味では、「もう一つ」というより、むしろ「たくさんの場所」がこれから秋田に生まれてくる素地ができつつあるのかもしれません。食・お酒、工芸、アートといったいくつもの領域をつないで、新しいコミュニケーションの価値を創造する空間を準備することです。これは芸術祭を開催するか否か、という問題よりもずっと大きな政策的な問題につながってくるはずです。

田村：新政の田植えに参加したら、稲が育つのを見るのが楽しくて、自転車とかで4、5回行ってるんですよ。稲わらは釉薬の材料になるんです。天然灰って結構厄介な代物なんだけど、それをつくってみようという気持ちになっていますが、それは自分がそこに関わる当事者になってからですね。

石倉：稲作をやってみると、決して食べ物をつくるというだけではない。生活のあらゆる場面に田んぼという場所が関わってい



ココラボラトリーがあるビルの屋上から

るのが実感できますね。「百姓」という言葉は「百の姓（かばね）」と書くわけですが、これは「百の職業」つまり、たくさんの技術を兼ね備えている人という意味ですよね。食べ物をつくるだけではなく、藁細工で道具や装身具をつくったり、神様のしめ縄をつくるという、「マルチタレント」の才能を百姓は持っていました。そういう形の新しいポスト芸術祭的な実践というのはありうるかもしれない。今日ちょっとそんなヒントを感じました。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。









「夜楽」第2回「食と自然」をつなぐ　ノート

平成29年12月6日（水）18時30分～20時30分　エリアなかいち　にぎわい交流館AU4階　研修室1・2

出演者　藤本　智士　氏（編集者）
菊地　晃生　氏（ファームガーデンたそがれ園主）
高橋　基　氏（有限会社たかえん 代表取締役）

コーディネーター　石倉　敏明　氏（人類学者・秋田公立美術大学准教授）

「食と自然」。最初にこのテーマを聞いたとき、違和感は感じなかったものの、「プロジェクトの方向性とどんなつながりがあるのか」という疑問も少しだけありました。しかし、ゲストの方々のお話を聞いた後は、これまで以上に「食」を通じて地域（土地）とのつながりを意識したいと感じました。

食材はその土地が生み出すもの。土地はそこに暮らす人が守っていくもの。そのためには10年後、さらにもっと長い時間を意識して土地と人を愛していくことが欠かせません。この姿勢は、自分の暮らすまちの風景や歴史・文化に対しても同じではないか、と思ったのです。そうした視点から考えれば、今の秋田のまちにある人や活動など、地域の素材をネガティブに見るのではなく、ポジティブに受け止め、いろいろな切り口から編集していくことが大事です。

「（仮称）芸術祭？」の開催検討からスタートした私達の取り組みも、開催が目的ではなく、まちに対する想いを共有し、暮らしの中の豊かさを実感できる機会となるプロジェクトとして考え、その先にある「まちの姿」を見据えていくことが大切だと、より明確に意識できました。「地域のことを考える」意味を再認識できた「夜楽」第2回を振り返ってみます。

編集という掛け算をしながら盛り上げていく

藤本智士さんは、編集者として活躍されています。兵庫県西宮市に住んでいますが、よそ者（本人曰く）視点で秋田でも幅広く活動されています。会社の名前は「有限会社 Re:S」。これは、藤本さんが今から10年ほど前に発行していた雑誌のタイトル「Re:Standard」からきています。「Re:Standard ＝標準、普通のことを提案する」、そういうものを活動の軸にするということで、雑誌名を超えて会社名にしてしまったのだそうです。

「地方から発信していく」「ローカルから編集力を持って何かビジョンを実現していく」「世の中を変えていく」ということに興味があり、それを「編集」という中でやられてきています。

全国をまわり、地方のビジネスホテルに泊まる時に、地元の喫茶店に行ってモーニングを食べ、その地方の新聞を読むのが好きなので、その時に、いわゆる四大紙と言われる新聞も東京のローカル新聞であり、メディアにおいても各地のスタンダードがあることを実感するとのこと。地方紙のベテラン記者は、以前から

しっかりと全国の潮流に対する違和感などを発信してきていると感じているそうです。

だから、ローカルから発信していく時に、みんなが持つ「発信力」に「編集力」というものが掛け算されれば、東京からのアウトプットと変わらないクオリティーで周りに届くようになるとアドバイスをくださいました。ローカルから発信するものの範囲を自分自身で狭めないで、秋田という土地からでも、堂々と日本全国に届ければ良いんじゃないか、と。

藤本さんは今、秋田市民市場で、「なんもダイニング」というイベントをやったり、にかほ市で北限のイチジクと言われるイチジクを取り上げて「いちじくいち」というイベントを手がけられています。その根底には一環してその土地にあるものに編集という掛け算をしながら、「秋田」を盛り上げたいという想いがあるのだと教えていただきました。

日常の豊かさと美しさに気付く

菊地晃生（こうせい）さんは、潟上市にあるファームガーデンたそがれの園主。県外でランドスケープデザインの仕事に関わったあと、秋田に戻ってきて農業を始めて10年になりました。ご実家は農家なのですが、農業のことはまったく知らないで戻ってきたそうです。

「たそがれ」という名前は、名古屋や札幌に住まわれていた時、よく思い出していた郷里の日本海に沈むたそがれどきの夕陽の情景や、夕陽に舞うトンボの姿など子どもの頃の原風景から来たのだそうです。もう一つは、人口減少などが進むこれからの時代をより豊かに楽しむことを考えた暮らし方をしていきたいとの想いをこめたとのことです。

菊地さんは、「農業とは何か」という視点から、「夜楽」のテーマの「食と自然」、そして「日常と超日常」につながるお話をしてくれました。

農業とは？　と改めて考えたとき、それは食べるものをつくるだけではなく、食べる、耕す、育てる、楽しむ、考える、学ぶ、愛するなど、生きる行為そのものが含まれ、風景にもなるものだと再認識しているそうです。日々の収穫と食べる喜びを伝える。そして日々楽しむだけでなく商売としてもその価値を伝えていきたい、喜びを伝えていきたいといろいろな試みをしています。例えば畑の隅で、軽トラの荷台にマルシェコーナーをつくり、その日に採れた野菜をカレーにして振る舞い、野菜の味を楽しんでもらって買っていただく「畑 de マルシェ」、味噌やみりんをつくるワークショップなどなど。

また、今年で140年を迎える県の種苗交換会は、始まりが地域や農民がいかに収量を良くするか、良いものを採るかといった「種子交換会」だったことから、一つの種（しゅ）があれば、何代でも更新していける種を集めて交換し合う会も始めたそうです。生産者だけでシェアするのではなく、食べる人、周りにいる方々にも知ってもらえるよう展開しているのが非常に良いと思いました。

菊地さんの視界には、地域の風景も大切なものとして映っています。自然が見せてくれるグラデーションや色の強弱というのは、人間では出せません。そういう自然が教えてくれる日常の美しさに気付くことも、これからの地方の時代には大事なのだと気付かされました。

地域と人を愛する　10年後を考える

高橋基（もとい）さんは、横手市十文字の有限会社たかえん代表取締役です。お総菜の販売とイートイン、デリバリーといった「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」というお店を営み、21軒の農家さんとの直接取引など、信頼関係を最も大事にしています。

最初に「紅玉」という名前にした理由を、三つ話してくださいました。一つ目は、りんごの品種。紅玉という品種は、同じ花粉同士の品種では実を結ばない、時代遅れのりんごと言われています。昔は地域のりんご農家の畑には必ず1本はあったのですが、今はあまりつくられておらず、紅玉のように独特な、時代性を超越したお店になりたいとの想いでつけました。二つ目は、偶然にも、高橋さんの奥様が紅（くれない）さん、祖母はタマさんだったこと。合わせると「紅玉」ですね。女性が世代を超えて受け渡していく暮らしの中の大切なものを、自分達が守り、伝えていく役割を持ちたいとも思ったのだそうです。そして、三つ目は、紅玉のりんごとしての潜在的な力。非常に酸っぱいりんごでありながら、加熱することでおいしいジャムやアップルパイに姿を変えることから、ご自分の会社や社員の潜在的な力が、働く中から引き出されるようにとの想いを込めています。このお話だけでも、時代を超えて引き継いでいくもの、日常の中の大切なもの、人を育てつないでいくことを考えさせられました。

そして、地元農家が紅玉の栽培に取り組んだきっかけが東日本大震災であることも教えてくれました。ひどい大雪の時の地震だったため、りんごの枝が折れて廃園を考える果樹園もあった状況に、取引をしている若手農家のために「紅玉を植えてみないか」という提案をしたのです。お菓子屋さんなどが紅玉を探しても手に入らない。おいしい焼き菓子をつくるための欠かせない素材として、売り先はあるんじゃないかという想いもあって提案したそうです。アイデアをお伝えした農家の方が「りんごの木は（収穫までに）10年必要なんだよ。でも、10年後のために植えるべ」といって始めてくれたのでした。

こうした積み重ねの中で高橋さんが考えたのは、「何をおいしいと定義するのか」ということ。社内の討論で「素材の味が生きていること」との意見があり、それを「その食材が一番おいしいときに、しかるべき調理方法、しかるべき調味料でつくられること」と定義付けたのでした。

また、地元農家と取引していることから、よく「地産地消ですね」と言われるため、その本当の意味も考え始めました。「地産地消」という言葉が、地元農家の生産物を地元で消費することに限定して使われていることに違和感があったのだそうです。高橋さんの想いは、「地域のありさま、その場にしかないもの、その地域ならではのものを楽しみ、誇り、愛すること。だから、別の地域の方とつながることで、食材・素材を通して人と人がつながり、他の地域の人や風土文化も、自分のことのように大切に思えること」でした。

「地域のことを考える」ということは、自分のことだけではなく、お互いが人の役に立てるものは何かを考えることでは？　という言葉に、私達もこれからの地域において、自立すること、そして信頼関係を持って共生していくことを考えていかなければと感じました。

自分の暮らすまちの風景や歴史・文化などを知り、愛すること。10年後の姿を考えること。それが暮らしへの愛着となり、住んでいる人への尊敬となる。そして、地域を越えて人とつながり、他の地域の人や文化も大切に思える。私達も、こうした視点でプロジェクトを考えたいと改めて思いました。

前半のゲスト3人のお話からは、食を通して人と人をつないだり、地域を深く愛していることが感じられました。土地に根ざした文化を考えるとき、「食」を欠かすことはできません。私達の体は、これまで食べたものからできていますし、食の素材はその土地と自然が育んだものです。こうしたことを、私達は日常忘れがちなのだと思いました。

ネガティブをポジティブに

後半は、ゲストの方々の気付きを中心に会話が展開されていきました。最初に、菊地さん、高橋さんお二人のネーミングセンスの素晴らしさについて、藤本さんから発言がありました。

盛りを過ぎ、勢いが衰えるという意味のある「たそがれ」、「紅玉」も酸っぱくて、あまり量もないなど、ネガティブに捉えられがちなものをポジティブに展開していること。お二人とも、自分の頭でしっかりと考えており、良いイメージがないものであっても、通り一遍に受け取らないところから全てが始まっています。目の前にあるものだけでなく、それがもたらすイメージや風景まで考えた時に、いろいろなことが広がっていくと受け止めたそうです。さすが編集者の視点と思いました。私達も、「(仮称)芸術祭?」を考えるのではなく、その先に何を見るのか、その先のビジョンの実現のために必要なものになっているべきというご指摘に、思わずうなずいてしまいました。

菊地さんは、秋田に戻られる前のご自分の経験から、「秋田のランドスケープって何だ」と考えた時に「田んぼ」が浮かび、新しい暮らし方の一つに「農」というスタイルを取り入れては、と思ったそうです。それが食べ物や土地、歴史など様々なものへの愛を形にしていくことにつながっていると感じました。

高橋さんは、インターンシップを受け入れられていることから、人を育てるという視点でのお話をしてくださいました。まずは「自分が変わりたいと思えるきっかけをつくってあげること」。また、調味料を例に、雑味、雑物が入ってこそ物事は活性化するし、摩擦やぶつかり合いの結果として、融合の過程でそれぞれが成長する場面を見てきた経験からの「育てるより育つ場をつくりたい」という言葉には重みがありました。

みなさんから、地域のスタンダードを育てていき、地域の個性を深めていくにはどうしたらよいかということについてのヒントをいただけたと思います。

また、藤本さんは、秋田市民市場で行っている「なんもダイニング」を例に、興味深いお話をしてくれました。藤本さんが始めて市民市場に足を踏み入れたとき、「食材が豊かで、ここでごはん食べられたら良いのに、観光など単発で来る方は見て出て行くだけになっている」と感じたそうです。昔の市民市場は、まさに「市民の日常的な市場」であったのに、時代の変遷とともに、飲食店などプロユースの方の買い付けの市場になってしまい、それが秋田の少子高齢化、人口減少の象徴みたいに見えたのでした。

そこで、市民市場がチェンジしていくことが、秋田が変わっていく象徴にならないか、つながっていかないかという想いを秘め、若い人達が市場に来る仕組みなども考えて「なんもダイニング」を始めたとのことでした。

私達の暮らしの中にある市民市場という存在は、実は秋田市の「味」の一つであり、秋田を売り出していける場所なのですが、それに気付いていない、生かし切っていなかったのです。編集の力で、みんなが学び、気付いていくのだと思いました。

そして、私達の暮らす秋田をネガティブイメージで捉えるのではなく、外から見たら面白いものや人が共存しており、ネガティブをポジティブに変換していく力が十分にあると改めて感じました。私達自身が新たな価値を生み出していく「編集の力」を育んでいければと思います。

地域の今あるものに新たな価値を見いだし、一人ひとりが「編集の力」を蓄えることで、まちを充実させていく。そんな未来のまちの姿を想い浮かべられた時間でした。



秋田市民市場

「夜楽」 第2回「食と自然」をつなぐ ドキュメント

石倉敏明（以下、石倉）：この「夜楽」のテーマは一貫して「『秋田のリアル』から未来を考える」ですが、このテーマで進めることになったのは、2年ほど前の「秋田市で芸術祭をやるのか、やらないのか」という議論が始まりです。

全国各地で地域芸術祭が流行している中で、秋田市がやるとすればどういうものができるのか、議論を重ねていくうちに、「祭りをやるか、やらないか」ということより先に、２０２０年の秋田市がどうなっていくのかをリアルに「想像」し、アートとデザインと文化政策、文化施設と秋田市の生々しいリアルな日常生活をどうやって「創造」して実現していくのかというところを考えた方がいいんじゃないか、という議論へと発展していきました。

「秋田で開催する芸術祭が、日本のどこでもやっているような既存のフォーマットと同じであれば、やらない方がいいのではないか」という厳しい意見もあり、名前を変えるだけでなく中身も変えて、新しいプロジェクトをどうやって構想し、実現していくのかが秋田市にとっても重要な議題となってきています。

そこで、今年度（平成29年度）は三つのテーマを掲げて進めることにしました。10月の1回目は『もう一つの場所』をつくる」がテーマで、「人が集まる場所づくり」の話でした。11月のシンポジウムでは地域芸術祭ブームの後に来る創造の世界についての話、そして今日の2回目の「夜楽」は「『食と自然』をつなぐ」というテーマです。なぜ「芸術祭」という議論から始まったシリーズが、「食」と「自然」というテーマになるのかというと、「食べものがおいしい」、「自然が豊かである」という特徴が、秋田では「当たり前のこと」と考えられてしまいがちだ、という点が挙げられます。このことを観光客も住民も当たり前のように語りますが、この当たり前を再発見する時に、秋田らしさをどう語れるのかということを考えたいと思ったわけです。

もうひとつ、最近のアート実践の変化として、「食べられないもの」から「食べられるもの」も含めた、広い領域でアートそのものの価値を再考しよう、という流れが深まっていることも挙げられます。これは人と人との社会的なコミュニケーションの道具として「食事」の価値を考えるだけでなく、人と自然の関係や、食べものとなる生物の価値や生命をどう理解し、これからの社会をデザインしていけばよいか、というアートの世界の問題にも結びついているわけです。

今日は、編集者の藤本智士さん、農業の菊地晃生さん、レストラン、サービス業で食にかかわる仕事をしている高橋基さんをお招きしています。内と外の視点から「『食と自然』をつなぐ」というテーマを語り合っていきたいと思います。

最初に、藤本さんからお願いいたします。

藤本智士（以下、藤本）：僕は編集者を生業としていて、兵庫県の西宮市に住んでいますが、よそ者視点で、いろんな活動を秋田でさせていただいています。



石倉 敏明／人類学者 ※21頁を参照

僕の会社名は、アール・イー・コロン・エス（「Re:S」）、「りす」と読ませるんですが、その下に「Re:Standard」と書いています。スタンダード、つまり標準、普通のことを提案するという意味です。「Re:Standard」を活動の軸にする、旗印にあげてやっていこうと思い、２００６年に創刊した雑誌のタイトルにしました。その後雑誌をやめた時にそれを会社名にして、現在は「Re:S」（りす）での〝編集〟という仕事の中で、「地方から発信していく」、「ローカルから編集力を持ってビジョンを実現していく」、「世の中を変えていく」ということに興味があり、活動しているところです。

「のんびり」というフリーマガジンの編集長を２０１３年から２０１６年まで丸4年やらせていただきましたが、その「のんびり」の特集をまとめた『風と土の秋田』という本を、7月に出版しました。同じく7月に出版した『魔法をかける編集』と合わせて2冊の本を抱えながら、全国55か所を回るブックイベントをやっています。

いろんなところに行きながら、「その地方で編集力というものをどういう風に活用していくか」、「地方から発信していく力を持つとどうなるか」を話していて、その際、事例としてあげるのが基本的に秋田の話なんです。僕は「地方から発信していくということ」が、とても大事だと思っています。

地方を回っていて大半はビジネスホテルに泊まるんですけど、ホテルの朝食じゃなくて喫茶店に行ってモーニング食べて、そこでその地方の新聞を読むのが好きなんです。秋田なら「秋田魁新報」ですが、この間、鹿角市に行ったら「北鹿新聞」、「米代新報」という聞いたことがない新聞がありました。秋田はこうしたローカル紙が盛んな土地で、ローカルメディアが残っている土地なんだと実感します。

「読売」「朝日」「毎日」などの四大紙といわれている新聞の論調は、「日本全国すべからくみんな思っていること」的な感じで書かれていて、全国で読まれていると思われがちだけども、これらの新聞がシェアナンバーワンである地域は東京など関東圏とその他一部の県だけで、青森に行ったら「東奥日報」、岩手に行ったら「岩手日報」、宮城だったら「河北新報」という感じで、基本的にはどこへ行ってもシェアナンバーワンは地方紙です。僕はメディアにおいても各地のスタンダードがあることを地方紙を読んで実感しているので、四大紙などといわれている新聞は、東京のローカル新聞だと思っているんです。

ローカルから発信するものは、届く範囲がその地域だけと勝手に決めこまないで、秋田という土地からでも堂々と日本の皆さんに届ければいい。ローカルの発信力に編集力が掛け算された時、東京のアウトプットと変わらないようなクオリティー感を持って、もっと遠くに届くようになるんじゃないでしょうか。

僕がかつてつくっていた「Re:S」という雑誌は、大阪で編集していたのですが、その意味はただ一つ、東京のメディアだけが日本全国に情報を届けるのは、どうしてなんだろうという不思議を解決したかったからです。秋田での「のんびり」や数々のイベントをする中でも、そうした想いが僕の軸となっています。今年は秋田市民市場をメディアにした「なんもダイニング」や、にかほ市の北限のイチジクを使った「いちじくいち」というイベントをやりました。そういう食との関わりも含めて、僕はそこ



藤本 智士／編集者
１９７４年兵庫県生まれ。有限会社りす（Re:S）代表。編集執筆を担当した『ニッポンの嵐』など、手がけた書籍多数。著書に『ほんとうのニッポンに出会う旅』（リトルモア）、編著として池田修三作品集『センチメンタルの青い旗』（ナナロク社）、イラストレーターの福田利之氏との共著『BabyBook』（コクヨS&T）などのほか、最近では、編集長を務めた秋田県発行のフリーマガジン『のんびり』を書籍化した『風と土の秋田 二十年後の日本を生きる豊かさのヒント』（リトルモア）などがある。

に何となく編集という掛け算をしながら秋田を盛り上げていければいいなあと思っています（拍手）。

石倉：面白いですね。「のんびり」は秋田県の広報誌としてとても大きな意味を持っていただけでなく、ローカル・ジャーナリズムの概念を変えるシリーズだったと思います。地方の情報誌は「全国誌風」だったり「東京風」を真似たものが多くなってしまいますが、「のんびり」では、マタギの文化や秋田の発酵食品、寒天特集や版画家の池田修三の記事など、地域に眠っているコンテンツを深堀りして、しっかりしたローカル・スタンダードが提示されています。そして、「食と自然」というテーマについても、様々なアクセスの道を切り開いてくださったのではないか、と思います。

さて、次は、潟上市の「ファームガーデンたそがれ」を運営されている菊地さんにお話をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

菊地晃生（以下、菊地）：ランドスケープデザインという仕事をした後、秋田に戻ってきて農業を始めて10年になります。名古屋や札幌に住んでいた時に、よく思い出していたのは、郷里の日本海に沈むたそがれ時の情景、夕日に舞うとんぼの姿などの子どもの頃の原風景で、それが農園を「たそがれ」という名前にした背景にあります。もう一つは、下降気味の時代をより豊かに楽しむ暮らし方をしていくためという想いもこめています。

このスライド写真はウチの田んぼで、僕の子ども二人がスゲ笠かぶって写っていますが、スゲも田んぼで栽培できます。かつては、食べるものだけではなく、着るもの、住まいも、その地域にあるものでつくっていました。今日のテーマの「食と自然」に沿って、農業とは何ぞやということを考えてみると、食べものをつくることだけじゃなく、生きる行為そのもの……、つくる、食べる、耕す、再生する、育てる、導く、楽しむ、暮らす、考える、生み出す、編む、染める、風景となる、共存する、愛する、などいろんな行為が含まれるということを再認識しているところです。

ウチで育てた農産物や加工品などを食べる方達にいかに届けるかが、大きな課題です。野菜はそれぞれ色も違うし、形も違うし、品種が違えば味も違う。一つひとつ非常に美しい姿をしています。その食べ方を伝えていくことは、僕らの重要な仕事になります。庭からとったバラの花、ハーブ、クズの葉っぱ、クリの葉、ツユクサ。今、こういうものを食べる習慣がなくなってしまったのですが、まだまだ有効利用できる可能性はあります。こういったものを日々収穫し、子ども達と一緒に食べたりして日常的に楽しみながら、田んぼに来る仲間と一緒に食べる喜びを伝えようとしています。

さらに日々楽しむだけでなく商売にして、その価値や喜びを伝えていくために、売りに行くんじゃなく、食べる方とダイレクトに関わって畑に来てもらおうということで、今年試みたのが「畑 de マルシェ」です。軽トラの荷台にマルシェコーナーをつくって、畑の隅にある空き地にタープをかけて会員のスペースをつくり、その日にとれた野菜にふるまって野菜の味を楽しんでもらい、買っていただく。請われればどこにでも、杵（きね）と臼（うす）と籾殻（もみがら）の竈（かまど）を持って餅搗（もちつ）きにも行きます。納豆づくり、味噌づくり、ジャムづくりのワークショップもいろんな場所でやっています。



菊地 晃生／ファームガーデンたそがれ園主
1979年旧・飯田川町生まれ。ランドスケープデザインの仕事を経て現在に至る。慣行栽培の田んぼと家庭菜園から農に入るも、圧倒的な化学肥料、農薬使用に衝撃を受け、1年で慣行栽培を離脱。2年目からは農薬・化学肥料を使わない栽培を目指して、自然栽培の技術を学びつつ自らの農地で実践を行い自主販売を始める。現在、水稲のほか大豆、ブルーベリー、枝豆、トマトなど約150品種を栽培。たそがれ野育園として、子どもから大人まで誰でも農的暮らしを気軽に体験できる学び場を主催している。

こうした農的暮らしや食を豊かにする体験の仕組みとして「野育園」という学び場を設けました。基本的に参加者の皆さんに、田んぼで種まきから稲刈りまで体験してもらう。お米の収量の目標を定めて、1年目から2年目、3年目と成長プロセスを経ながら、自給する力を見つけるという仕組みです。農業を始めて一番うれしかったのは収穫だったので、この収穫の喜びを皆さんに、ぜひ体験してもらいたいという想いでやっています。

「種苗交換会」が始まってから今年で140年になります。いかに収量を良くするか、いかにいいものを収穫するかが目的の「種子交換会」として第1回目が開かれたはずですが、現在、種子交換は一切行われていません。そこで、これを僕らでも1回やろうよということで、一つの種（しゅ）があれば、何代も更新していける「F1（エフワン）」という、一代交雑じゃない種を集めて、それを交換し合う会を始めました。こういったことは、僕ら生産者だけでシェアするのではなく、食べる人や、その周りにいるいろんな方々に知ってもらえるよう展開していく必要があります。

山桜が咲いている光景のグラデーションや色の強弱というのは人間の技や力では出せません。本当に素晴らしいものを自然は教えてくれています。また、農村には素晴らしい建築が残されています。こういうものをつくる力をもう1回取り戻さなければいけないなと感じています。

自然が相手なので時には危険と隣り合わせとなることもありますが、その自然の強さ、優しさみたいなことを感じて生きるということも、農業をするうえでの喜びではないかと思っています（拍手）。

石倉：ありがとうございます。菊地さんはまさに『食と自然』をつなぐ」というテーマを自ら体現するような、ダイナミックで冒険的な「農」の実践者だと思います。2013年に水害で田んぼや農機具が水没した時に、菊地さんが自分のFacebookに「一生のお願いです」と書いたら、日本中から200人ぐらいのボランティア・スタッフが手伝いに来て、「菊地さんのサポーター大会」みたいになったこともありました。菊地さんはこうした災害も含めて、困難を乗り越えていく力を持った実践者であり、子どもを育てるように作物を育てていく能力と愛情を持った人でもあると、いつも感じています。

続いて3人目の高橋さん、よろしくお願いいたします。

高橋基（以下、高橋）：有限会社「たかえん」の高橋と申します。横手市十文字町で「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」というお惣菜の店をやっています。店内にイートインスペースがあり、最近はデリバリー業務もしています。ウチの特色は21軒の農家の方々と直接取引していることで、地域の中でのこうした信頼関係を最も大切にしています。

店の名前の「紅玉」はりんごの品種名ですが、味が時代遅れといわれ、今はあまりつくられていません。それでも地域のりんご農家の畑には必ず1本は残っていて、時代性を超越したそんなお店になりたいという思いで付けました。それから、私の妻は「紅（くれない）」、祖母は「タマ」という名前です。女性が世代を超えて受け渡してきた大切なものを守り伝えていけたらと思ったのも、紅玉にした理由のひとつです。また、紅玉はとても酸っぱいりんごですが、加熱することで、おいしいジャムやアップ



高橋 基／有限会社たかえん　代表取締役
1968年旧・十文字町生まれ。大学卒業後、秋田に帰郷し家業に就く。2008年1月、外食事業として惣菜店「デリカテッセン&カフェテリア紅玉」を開店。地産地消をコンセプトに地域の21軒の農家と取引し、地元のお客様に提供している。惣菜の製造販売、ランチやスイーツの提供、お弁当やオードブルの宅配などを事業の軸として間もなく10年になる。新たな事業として、地域の7軒の果樹農家とともに「クッキングアップルの郷」という連携体を組織。現在は県外のシェフ、パティシエなどに調理専用りんごを販売している。

ルパイに姿を変えます。これと同じように、社員の潜在的な力が、その働く中から引き出されるようになればという願いもこめられています。

私達は「クッキングアップルの郷」という農家との連携体をつくっています。ここに参加するりんご農家は非常に若くて20代、30代が多いです。今までとは違うチャレンジフィールド、「挑戦する畑」を、彼らとシェフとで一緒につくれないかという思いで立ち上げました。

東日本大震災の時、横手市はひどい大雪でした。何よりひどかったのは農業被害で、りんごの枝がバキバキ折れて、廃園にしてしまおうという果樹園も出るほどでした。そうした中で、取引をしている若手農家のために私が提案したのは、「紅玉を植えてみないか」ということでした。雪の被害からの復興というか「禍を転じて福となす」という形に、何とかしてできないものかという思いでした。このアイデアを農家に伝えたところ「おメエ（前）、りんごの木っていうのはよ、10年必要なんだよ」という話をされました。でも、10年後のために「紅玉りんごを植えるべ」と言ってくれて、最初は3軒の農家だったのが段々増えていって、今は7軒が紅玉の栽培に取り組んでいます。

ここで私がやってきたことの背景にある考えを話したいと思います。お料理屋さんのおいしさは一軒一軒違い、それぞれのお店に個性があります。では、「何をおいしいと定義するのか」ですが、社内で討論した時に「素材の味が生きていること」というのがあり、「その食材が一番おいしい時に、しかるべき調理方法、しかるべき調味料でつくられること」と考えました。ですから、旬が大切ですし、素材の味を引き出すために調味料を加えているという定義で料理に取り組んでいます。

21軒の農家と取引しているので、よく「地産地消」ですねといわれるのですが、このことばが農家の生産物を地元で消費することに限定されて使われていることに、非常に違和感があります。単純にものを使って費やしてしまうのではなくて、食べるもの、使うものを愛していくことが大切だと思うのです。地産地消は経済活動や戦略ではなくライフスタイルなんだと考えることが必要なのではないか。そして、その場しかないもの、その地域ならではのものを楽しみ、誇り、愛していく。別の地域のシェフやパティシエの方達とつながっているのは、地産地消じゃないといわれるけれども、そうではないんです。その人達に、地域の暮らしや産物といったものを愛してもらうことが、私達の商いだと定義しています。そこで初めて他の地域の人や風土文化が、自分のことのように大切に思えてくるのではないでしょうか。

私が仕事をするうえで大切に思っていることは、「プロ意識」、「チームワーク」、「地域」の三つです。会社の中だけに限定せず、農家さんともそのプロ意識を共有することで、「お客さんを喜ばせるためには」「人のために役に立つには」などについて一緒に考える。農には農の立場があり、食には食の立場がありますが、誰かの立場に立って物事を進めるのではなく、お互いに人の役に立てるものは何なのかを考えることが、プロ意識の出発点なのかなと思います。そのためには自立しなくてはならないし、相手からも尊敬の念を持ってもらえるよう、信頼関係を結んでいくことが大切だと感じています。

自立と共生といいますが、そういったところをよくよく考えるようになりました。地域で仕事をするということは、その地域に人が残り、何らかの役に立つ行動をしていくこと、そこで自分の生業が成り立つようにしていくことだと思います。そうすることによって初めて地域が守られると考えるようになりました。私のやっていることは、こういった商売の一環なので、参考になるかわかりませんけれど（拍手）。

石倉：ありがとうございました。高橋さんの発表から、食べものを通して人と人、人と自然をつないでいく技術や、地域を深く愛して仕事をしていく方法が見えてきたように思います。プロ意識、チームワーク、地域というキーワードも大変参考になります。美術大学に勤めている僕にとって、高橋さんのお話はとても大事な点に触れていると感じました。というのも明治時代以降、美術大学という制度は彫刻や絵画、工芸、デザインといった「食べられないもの」を中心に組み立てられてきたからです。そのため、自然と社会の循環系をつくっていくような「食べる」ということが軽視されたり、「地域」がカッコつきの限定された文脈の中でしか語られなかったりします。この問題は、地域芸術祭が「食べること」を表現するときの不自由さにも関わってきます。

藤本さんのお話の中で、地域のスタンダードを映し出している地方紙のことが出てきました。食べものに関して言えば、たとえば潟上の「たそがれ」さんや十文字の「紅玉」さんのようなユニークな取り組みが、秋田魁新報のような地方紙に載っているわけですね。そういう事例は「秋田」という県レベルのスタンダードより、もう少し解像度の高い地域のスタンダードや、新しく、実験的な地域性というものを映し出しているように思います。例えば県南のスタンダードや県北のスタンダード、潟上のスタンダードという形で。この解像度を上げていけばいくほど、地域や人の暮らしに近い精度の高い像が見えてくると思うんです。

藤本：まずお二方とも会社のネーミングが素晴らしいですよね。ネガティブに捉えられがちな言葉やものを、ポジティブに転換されている。ネガティブなあんまり良いイメージがないものであったとしても、お二方とも自分の頭ですごく考えていらっしゃるので、それを通り一遍に受け取らないっていうところから、全てが始まっているんだなと思いました。

風景として考えるという話ですが、僕は日本一の寒天の産地である長野県茅野市の、12月15日から2月頭ぐらいまで広がる、寒天づくりの風景がたまらなく好きなんです。寒天づくりも今は工業寒天といわれる粉寒天の生産に変化している中で、秋田のお母さん方だけは頑なに天然寒天である「棒寒天じゃなきゃダメ」って言う（笑）。その状況を前に思ったのは、僕の好きな茅野市の寒天づくりの風景、粉寒天におされて減っているはずのその風景がキープされているのは、ひょっとすると秋田のお母さん方のおかげかもしれないということでした。

お二人のお話について、目の前のものがおいしいかどうかというのは、もちろんあるんだけど、それがもたらすイメージ、風景みたいなものまで考えた時に、そこからいろんなことが広がっていく。芸術祭であれ何であれ、それをやった先に何を見るの



高橋基さんと生産者の意見交換



かが重要で、そのビジョンの実現のためのお祭りであり、イベントであるという考え方にもつながっていくんじゃないか。そう思いながら聞かせてもらいました。

石倉：昔だったら、秋田でつくったものを東京で消費するといった、生産と消費の二元論になりがちだったんです。「のんびり」の寒天の話は、長野の茅野市と秋田がつながっている、つまり「インター・ローカル」の対話ができるということを、まざまざと示してくれてすごく新鮮でした。

菊地さんはランドスケープデザイナーとしてスタートしていますが、風景として考えるといった時に、景観としての食や自然について意識されていることはありますか？

菊地：北海道にいて造園やフォレストガーデンといった生態系をつなぐような仕事にかかわって何だ」と考えた時に、「どっからみても、それは田んぼだ」と、すぐ浮かびました。ところがこれが今、本当に危機的な状況にあります。どうやって農業者人口を維持していくのかが、これから10年、15年の究極の課題になりますが、もはや個人でがんばってもどうにもならない状況です。僕は新しい暮らし方の一つとして、農というスタイルをとり入れてもらい、みんなでその風景を維持していくことができないかと思っています。そういったことが自分達の食を守ることにもつながるんじゃないでしょうか。

石倉：石川理紀之助が始めた「種子交換会」を継承しよう、という取り組みについての紹介がありましたが、種や農業を通して浮かび上がってくるのは、まさに食べ物や景観、土地の記憶、歴史や記録など、身のまわりの世界への「愛」を、どのように形にしていくか、ということです。

菊地さんは「野育園」という形で、自然の作物を育てることと並行して子ども達を教え育てることをしていますが、高橋さんもインターンシップの研究会をやっていて、人を育てることに力を注いでいます。人が育つ、あるいはプロフェッショナルとして育てるということについて、どのように意識されていますか？

高橋：東京大学名誉教授の教育学者、大田堯（おおた たかし）先生の「命の持つ三つの特性」という話に非常に影響を受けています。「命はそれぞれ違う」、「命は自ら変化する」、それから「命は互いの関わりの中で変化する」という三つの言葉で、人は一人ひとり違っていて、自分が変化したいと思わなければ変化はせず、かつその変化したいと思うきっかけは、他人との関わりの中でそれを感じるのではないか、というものです。

人を育てるのは誰かが教えてできるものではない。自分が変わりたいと思えるきっかけをつくってあげる。そこにしか人が育つ方法はないのでは、と思うのです。また、同じ会社の中に同じレベルの人がいると、徐々にまとまってきて、いろんな考えのある人達が、段々に純粋化されるというようになります。ですが、純粋になるのは良くないのです。精選された調味料より粗い調味料の方がうまかったりしますが、それと同じように雑味、雑物が入ってこそ、物事が活性化するというのが、私の今までの経験から考えられます。

学生や全く関係のない人が会社に来て仕事場にいると、摩擦やぶつかり合いも生むんだけれども、結果としてそれらが融合していく過程の中でそれぞれが成長する。育てるというより育つ場をつくりたいとの思いがあって、学生を呼んでいます。

石倉：よく「若者」、「よそ者」、「馬鹿者」などと言って、外から来る人が地域を変えるみたいな話がありますけれども、いわば雑物ですよね。ノイズといってもいいかもしれませんが。学生が教える対象というより雑物の一つとしてこそ効果が上がるというのは、すごく示唆的で、成長していく上での大事なポイントでもあると思います。

昨年（平成28年）11月に行ったシンポジウムで、芹沢高志さんが「生態学的地域計画」というのは、その地域の人だけでなく、自然も含めた広い意味での生態系をつくる計画だとおっしゃっていました。アートプロジェクトはこれができない限りは意味がないともお話されていました。もう一人のゲストの原万希子さんからは、「7世代後のことを考えて物事を決める」というカナダの先住民のことわざを紹介していただきました。

雑物とか雑味というものを生かしていく話や、10年先のりんごを育てる話も、ここにつながってくると思われます。量を増やすということではなくて、地域のスタンダードを育てていき、地域の個性を深めていくにはどうすればいいかということが、皆さんに伝わったのではないでしょうか。

ここからはフリートークにします。

秋田に来たゲストやアーティストから「秋田の食べものやお酒はおいしい」とよくいわれるんですね。秋田の食文化は秋田のセールスポイント、秋田のメリット、ポジティブな意味で秋田を売り出していけるものですが、それを編集して仕事にすることも大事だし、今までつながっていなかったアートやデザインに、つなげていくというのも大事だと思います。

今秋田市で展開されている「芸術文化ゾーン」のあたりと、秋田市民市場のある「食のゾーン」が切り離されてしまっているのが一つの問題だと思うんですが、これについては藤本さんどうですか？

藤本：せっかく秋田駅の近くに市民市場があって、食材豊かだから本当はここでごはん食べられたらいいのになあという、観光客であり仕事でここにやってくるよそ者としてのシンプルな欲望から、「なんもダイニング」の発想が生まれたんです。

まさにネーミングそのままに秋田市民にとっての市場だったところが、近隣にスーパーやコンビニができる中で、いつの間にかプロユースだとか、飲食店をしている人が買い付けに来るみたいな市場になって、少子高齢化、人口減少の象徴みたいになっていた。そこに、僕は秋田県そのものを見た気がしたので、市民市場がチェンジしていくことが、逆に象徴的に秋田というものが変わっていくことにつながっていかないかなっていう想いを潜めつつ、何とかそこに若い人達が来る仕組みがつくれないかを考えて「なんもダイニング」をやったわけです。

先ほどのお二人の話を聞いていて、「おっしゃっていることは教育やな」と本当に思ったんですよ。まさにお二人とも現代の



石川理紀之助の旧住居近くの田んぼ（潟上市昭和豊川）



秋田市民市場で開催した「なんもダイニング」

石川理紀之助やなと（笑）。石川理紀之助は農業の神様とか言われてますけど、僕はあの人は教育の神様だと思っています。食とか農に携わっていくということを考えれば考えるほど、学びを与えるとか、わからせるとかいう世界じゃなくて、そこに放り込まれた時に気付く世界が大事のような気がします。

そうした意味で、市民市場の話は、起点としては単なる僕の欲望から始まり、少し踏み込んで、秋田県全体の問題点みたいなとこまでいっているんだけれども、これがさらに、ある種の教育というか、秋田市民の皆さんにとっては「気付きの場」であり、「学びの場」であるっていう側面がもっと増えていけば、「なんもダイニング」ももっとよくなるんじゃないかと妄想しながら話を聞いていました。

石倉：例えば、秋田県立美術館のカフェで紅茶を飲みながら、千秋公園のお堀を眺めてケーキを食べる体験と、市民市場の中で視線の駆け引きをしながら、秋田の豊かな食材を買って食べるという体験のあいだには大分距離がありますよね。どちらも観光にとっては大事かもしれないけど、僕にはどこか、食の体験が分断されてしまっているようにも感じられます。

お二人は生産なり流通に携わる立場として、市民市場についても感じることがあると思うんですが、どうですか？

菊地：これまでの流通は、農協を含めて小さいところから一度全部吸い上げて、上からトップダウンで市場に流通させるというシステムだったんですけど、その中にすごく大きなロスがあったんです。農家としては、大きなボリュームの農産物を一括して買い取りしてもらえるのはよかったんですが、デメリットも生まれました。

つくっている側にとって食べている人が見えない。誰がどういう風にそれらを食しているのかというコミュニケーションが、そこから奪われてしまった。家族形態やお米の精米具合の好みなど、そういうものが一切情報として届かなくなってしまったのです。僕はそこを修復したい。取っ払われた関係を結び直す、田んぼから直接食卓へという回路が再び必要だと思って。それが一つのマーケットになるんじゃないかと思っています。秋田市民市場には、ぜひ、そういうことが展開できるマーケットを目指してもらいたいな。

もう一つ。ちょっとこれは馬鹿げた話かもしれないですけど、遠くから来た人が秋田駅を出たら、そこにワーッと田んぼが広がっているなんていう光景を頭に浮かべます。田舎の無人駅の前に広がるような田んぼがまちの中にあったらいいなと思っています。ぜひ「なんも田（だ）」を（笑）。千秋公園の水を使いながら展開できたらいいですね。

石倉：すごく機能の高い芸術の公演なんかが見られる文化施設の窓から田んぼが見えるっていうのは、いいかもしれないですね。

藤本：おっしゃっているのは農だけの話ではなく、本の世界でも同じで、大型の書店さんがある一方で小さな本屋がどんどんつぶれていく、市民市場みたいな状況があります。その根本は何かというと結局、ＪＡみたいな日販とか東販とかの取次という、本屋さんと出版社の間を取り次いでいる組織の存在がある。これはある時代においてとても重要な存在だったと思うんですが、いまの世の中においてはここにやっぱりすごくロスがあるんです。



「野育園」の稲刈

僕が秋田の本を抱えて日本全国回っているのは、秋田のことを取り上げているけど秋田だけの話じゃないんだ、訪れた先の皆さんの土地の話でもあるんだということを伝えたくてやっています。

僕がトークショーさせてもらうのは、中心市街地から少し外れたところで、個人で本屋を始めている人だったり、ゲストハウスだったり、そういうところが多いんです。駅前に大型ショッピングモールがバーンとある一方で、かつての商店街のところで、10年後、20年後の未来がある若い人達がゲストハウスなんかを始めたりしている。それが同じまちの半径の中に共存しているのを、いろんな場所で見るんですよ。そういうことが、この秋田でも起こって、共存していく、両方ある姿が見えてきたらいい。そういう意味でまちの中の田んぼも、妄想じゃないよなと思えるところがありますね。

石倉：国道沿いのファストフード店や大手企業の量販店が立ち並ぶ風景って、日本列島の景観をある意味では画一化していると思います。だけど、大型のショッピングモールも、いまや若い世代にとって「懐しい風景」になりつつある。実際に秋田に暮らしてみても、そういうチェーン店を利用しないで生活していくのは難しいと実感します。問題は、里山や田んぼが広がっているような懐しさのリアリティーと、ショッピングモールのリアリティーを共存させられるかどうか。たとえばインドではじまった仏教が日本でローカル化したように、全国展開の商業施設だって日本仏教みたいにローカル化していいと思うんです。秋田駅前のオーパではね、店員さんが秋田弁しかしゃべれないとか（笑）。土地らしさみたいなものがシステムを変えたり、中身が変わっていく現象は歴史的に起きていることなので、共存していくことは可能だと思うんです。少なくともチェーン店の風景を消せばいいという話ではないと思います。その中に全部飲み込まれてしまうんではなく、別の場所をつくったり、別の実践が起こることとはますます大事な意味を持つようになるだろう、と思います。

紅玉さんは、地域づくりに関わる中で、仲間をつくっていく際に何か意識されていることはありますか？　たとえば大きなショッピング・モールの計画に地域の商店街が反対する、というような二項対立ではなくて、別の形の関係ってあり得るのでしょうか？　その辺のオリジナリティーとか秘訣みたいなものがあれば。

高橋：十文字の市街地は昔から「交通の要衝」といわれ、非常に狭い範囲に1万2千人が住んでいるんですが、商業施設は24時間営業のイオン、地元資本のスーパー、このまちにしかないショッピングモールがそれぞれ1軒あるのに、経営は成り立っています。秋田県内で1番売れている道の駅があり、飲食店で言えば秋田市内で結構有名なピザ屋さんの本店が十文字だったりします。

どうしてそうなってきたかというと、交通の動線が非常に豊かなので、人の出入りが多くて、いろんな人達がやって来て自由勝手に商店を立ち上げるということがあります。ダメだったら他のところに移るという自由な土俵があり、それに対して誰もやかく言わない、むしろ、一緒にやろうぜくらいのモチベーションを持っています。

この、活躍できる場があれば誰でも自由勝手に自分の力で何かやれるというところが肝心なんじゃないか。ウチのまちには有



紅玉の1階、デリカテッセン

名な祭りもなければ、名物料理もない。でも、しょっちゅう人がやって来て商売を立ち上げるといった、自由さ、面白さがあるなあと、私はそういう風に思っています。

自分の会社が食産業に参入するにあたって、どんな気持ちでやっていくかを考えていた時に、アメリカのサンフランシスコで地元産の食べものを商っているレストランのオーナーで、アリス・ウォーターズという女性を思い出しました。彼女は自分のやっている商売のことを、こう定義してるんですよ。「これは血を流さない革命、おいしい革命である」と。ファストフードばかりがある中で、あえて地元の食材を使って、料理をよりおいしくしていく。アメリカの市民が、アメリカの食材は工業化されていると思っているところへ、小農家の地元農産物を尊重して食材に使っていく。そういう姿というのが面白くて。

アリス・ウォーターズは、昔のフェリーターミナルを全く新しいショッピングセンターに変えていったんですよ。中に入っているのは、地域の農家のファーマーズマーケットみたいなものと、こだわりのある小さな食のお店で、ファストフード店なんか1軒もない。そういったテナントで成り立っている要因は、そこに住んでいる市民が地元のものを愛そう、他のとこころと違うものをあえて愛していこう、それを誇っていこうという、アイデンティティーの部分でのモチベーションがあるからと思いました。

翻って、こうしたものを秋田に持って来ようとした時に、果たしてどこがベースの施設になるかと考えると、秋田市民市場かなと自分も思っていて、要はその中に何らかの哲学さえ入りさえすれば、ここは日本のフェリーターミナルって呼ばれるところにもなり得るんじゃないかと感じています。

農業はもっと細分化されてしかるべきで、製造業的な農業やサービス業的な農業など、様々な形を全部ひっくるめて農業と呼んでいる現状がおかしい。北海道の大農場と「たそがれ」さんを比べるというのは、そもそも違うのではないかという気がしています。例えば系統出荷ならではの良さもあれば、直売ならではの良さもある、そんな中で、消費者がどういった要素で満足を得られるのかということが肝心なのかなと思っています。

石倉：藤本さんから、本の流通の話と食の流通の話をなぞらえる比喩が出ましたけれども、それになぞらえれば、菊地さんの農業経営をメガ農場の農家と比較するのは、蔦屋書店やAmazonのような大規模書店と秋田の地域に根差した加賀谷書店さんを比べるのと同じようなものだ、という感じですよね（笑）。そういうのって何か理解した気になるのですが、実は職業形態が全然違うのかもしれませんね。業種で無理やり一括りにするのではなく、そこに来るお客さんに対してどんなサービスを提供できているのか、もう少し丁寧に見ていく必要がありそうです。そう考えると、農業やレストランのオルタナティヴな実践は、芸術・文化全般にとっても参考になるのではないか、と思えてきました。大切なことは、小さな選択肢を大きな選択肢と共存させていく知恵といってもよいかもしれません。

今日のゲストに対して、もっと聞いてみたいということがあれば、挙手していただければと思うのですが、いかがでしょうか。



高橋さんと紅さん（一番右）とスタッフの皆さん

横手市から参加した男性：みなさまそれぞれ地方に住んでいて、地方に腰を据えながら職業なさっているわけですけれども、この先に何を見ているのか、何を仕掛けたいと思っているのかを、改めてもう一回お聞かせください。

高橋：特にこれというのはないのですが、できるだけ個の中に入っていきたい、家庭の中に入っていけたらと思っています。我々は食事を提供している側ですけれど、家の中でつくるということに対して何らかの形でコミットしていければ、それが、もしかすると豊かな日常の食生活を生んでいくのかなあと考えています。

菊地：これまでの農業が隣の農家さんと「今年は何俵とれた」というような〝共創〟に変えていく、そういうあり方を求めていきたいというのが一つ。それと、秋田には膨大な森林があるので、林業家としても技術を身に付け、半農半林で山のことも手掛けていく必要があるのかなとも思っています。

藤本：興味があるのは20代の人達で、何かを判断する時に、この意見、この物事は未来を見据えてやっているんだろうかというのが、いつも気になるんです。今日明日の目先だけを見てやろうとしているのか、もっと未来のことを見ているのか、そう思った時に当然のように若い人達がどうするか、この先を生きる人達が思う未来というものがすごく気になります。

僕がすごく優秀だと思う編集者、尊敬する編集者は20代、せいぜい30代前半で、圧倒的に年下なんですよ。もちろん、僕達の時代とは違ってネットメディアを扱っていて、SNSなどを介してどんな地方にいようともつながる世界で仕事をしていて、僕達にはないリテラシーを持っています。そういう若き編集者達が、地理学的条件を超えてインターネットを活用してつくるものから僕はいろんな学びをもらいたいし、そこからどういうものが生まれてくるのかに興味があります。

石倉：僕は潟上市にある菊地さんの農場をはじめ、秋田県のいろんな場所を訪ね歩いて、いつも思うことがあります。それは田んぼや畑であれ、里山や里海であれ、食べ物を生みだす風景は、そこに暮らす人びとの身体と直接つながっている、ということです。だからこそ、各地域の産物を交換することのできる市場があるまちは、大きな意味と役割を持っているのです。

例えば人口が減ってきた時に、秋田市が一人勝ちして秋田の他の地域が衰退していくというのを前提にしていたら、勝ち残れないし、生き残れないぞと思うんですよ。もっとローカルの解像度を上げて見ていくと、十文字には、潟上にはこんなものがあり、五城目にも鹿角にもいろんなものがある。そうした地域の産物には、具体的なつくり方、育て方、調理法、食べ方、といった文化が必ずついてきます。こういう繊細な食文化を媒介し、総合してみると、大都市には決してかなわない、質の高い差異や特質が見えてくるのだと思います。

僕らの大学の学生・卒業生の中にも、そうした解像度の高い地域性を敏感に感じる世代が現れてきました。今までは、地方の美大生の就職先といえば、東京を中心とする大都市のデザイン会社と相場が決まっていたんだけれど、たとえば今、「のんびり」のようなクリエイター、写真家、デザイナーを集約したメディアは、東京ではとても成立しにくいんです。ですから、この卒業



地域のお年寄りから笹巻を習う「野育園」

生は、東京のデザイン会社で数年修行してから里帰りするのではなく、卒業後すぐに秋田市の「のんびり合同会社」に就職して、さっそく活躍してくれています。東京に出て戻ってくるのは時間がもったいない。それよりも、地域を見る解像度を上げていく実践をやってみたい、という20代が出てきたことは、とても面白いな、と思います。

そして同じようなことは、秋田の農業や食の領域でも起きていて、菊地さんの農場でも、高橋さんのレストランでも若手が育ってきています。こんなふうに、これからの秋田を支える「『食と自然』をつなぐ」担い手が増えてくると楽しみですね。









「夜楽」第3回「土地の記憶」を継承する　ノート

平成30年1月31日（水）18時30分～20時30分　エリアなかいち　にぎわい交流館ＡＵ4階　研修室1・2

出演者　岸本　誠司　氏（民俗学研究者）
　　天野　荘平　氏（男鹿市菅江真澄研究会会長）
　　小松　和彦　氏（小松クラフトスペース代表）
コーディネーター　石倉　敏明　氏（人類学者・秋田公立美術大学准教授）

まちや土地の「記憶」とは何か。そんな想いが脳裏をかすめた「夜楽」第3回のテーマ。そんな私達の漠然とした疑問を遙かに超えていくゲストの方々のお話だったと感じました。「自分の住むまち、関わる土地に愛情と誇りを持つこと」。そのためにどんな行動を積み重ね、暮らしを整えていくか。まちに関わる人が増える状況をつくる。私達がこの「夜楽」から得たことです。

「土地の記憶」は、人が見い出し、次の世代に継承していくものです。自分が知らなければ「教える」「語る」ことはできません。そしてこの積み重ねの中心は「人」だと思います。人が交流し、つながる場所をつくることで、土地の記憶が継承され、未来への新しいつながりができるのです。

ゲストの方々は、私達が今年度の取り組みのテーマにした「あきたで学ぶ。あきたで創る。」という言葉を体現してくれているように感じました。私達のまちづくりの根底にあるべきもの、プロジェクトの視点を整理することができた「夜楽」第3回を振り返ります。

まちに関わる人が増える状態をつくる

岸本誠司さんは、民俗学研究者で、現在は「鳥海山・飛島ジオパーク」事務局にいて、鳥海山や飛島を活動フィールドにされています。最初に飛島を紹介してくださいましたが、その中で興味深かったのは、「飛島のかつての暮らしはどんな風だったのだろう」と考え、島の人々に教えてもらいながら活動したが、ここ15年くらいで島が大きく変わりつつあると感じているとのお話でした。様々な人が島の課題を共有して取り組みはじめたことです。

例えば、島への漂着物は島の人だけでは何ともならない、だったら、みんなで何とかしようと２００２年からスタートした「飛島クリーンアップ作戦」をはじめ、２０１１年には、島に関わる行政、ＮＰＯ、大学など様々な人達が一堂に会する「とびしま未来協議会」が立ち上がったり……。岸本さんは、そんな中で２０１３年に「とびしま漁村文化研究会」をつくり、若い子達と一緒に活動しているのです。２０１６年には、「鳥海山・飛島ジオパーク」が日本ジオパークに認定され、島の人口は減っているのに、島に関わる人の密度は高まりを見せる状況になっているとのこと。この「関わる人が増えている」状態をつくる、という

のは、これからのまちづくりには欠かせないと感じました。観光・交流人口以上、移住未満。秋田市に足繁く訪れ、興味のある活動に関わり、秋田市をつくる一人になっている。アートを切り口に、こうしたまちに関心を持ち、関わりたいと思う人を増やすプロジェクトが理想なのではないかと感じました。

自分達のバックグラウンドを知る 自分達のやっていくことの意味を考える

こうした活動の中で岸本さんが知り合った30代の島の若い仲間達が合同会社を立ち上げ、様々な活動をしているそうです。その名は「合同会社とびしま」。「私達はこんなコンセプトで島で仕事していきますよ、島で暮らしていきますよ」ということで、漁業、農業もやる、加工もする。そして島でカフェを持つ一方、酒田市内にもお店を持っていたり、島の旅館業を引き継いだり、島の様々なインフラの保守に関わる仕事などをしています。

このお話で私達の心に響いたのは、若い世代の方々が活動している姿勢です。「0次産業」と言われているそうですが、島はこれからいろいろと変わっていく、自分達も生きるためにいろいろな仕事をしなければいけないけれど、この場所（島）を大事にしたい。だから、島の人達がつくってきた風景とか技術とか知恵とか、そういう自分達のバックグラウンドになっているものがあってここに住んでいるから、自分達のやっていく仕事の意味を考えていきたい、と思って活動しているとのことでした。

私達も、秋田のバックグラウンドを知り、これからの暮らしや将来のまちの姿を考えた時に、自分達がやっていくことの意味を考える必要があります。そうした視点でどんなプロジェクトが良いのか、考えるためのヒントをいただきました。

未来につなぐ、時間をかけた取り組み 新しいつながりをつくる

岸本さんは、いろんな人が関わり、評価してくれるようになった。そして数年後にはどうなるかという議論ができるようになるまで15年かかったそうです。同じ目的を持ち、様々なコミュニケーションをしながら進めていくというのは、改めて時間がかかることと感じました。でも、それが着実に島の未来につながっている気がするとの言葉には、私達も今の取り組みに向かう背中を押していただいた気がします。

そして、もう一つ、私達が教えていただいたこと。ジオパークは「地球の記憶」。そして何のためにジオパークをやっているのか、どんな効果があるのかということを考えると、岸本さんは「人と自然」「地域と地域」「人と人」の三つに新しいつながりをつくる場を頭の中で想像できました。

その後のクイズも、またウィットに富むものでした。「鳥海山はどこから見た姿が一番かっこいいでしょう?」皆さんはどう思いますか？　酒田から？　遊佐から？　仁賀保から？　由利本荘から？　飛島から？　答えは「どこからみてもかっこいい」。

自分の愛する風景、愛着のある場所をこう言い切れる岸本さんの姿勢は、是非、見習いたいと思います。

日常の中の記憶　言葉で伝える 会話を持つことが大事

続くゲストは天野荘平さんです。男鹿市菅江真澄（すがえ ますみ）研究会の会長を務められています。「土地の記憶」というテーマを意識して、ご自分がこれまで調査・研究してきた中から、地震とナマハゲについてお話くださいました。

土地の記憶はどうやって継承されていくのか？　一つ目は、男鹿市五里合（いりあい）地区における昭和14年5月1日の地震。今もって地元の方が発生日時を「5月1日午後3時」と覚えているのは、地震のあと「復興歌」を歌っていた年代の方々が歌詞として記憶していたのでした。今は途切れてしまっていた復興歌ですが、日常の中で伝えられ、引き継がれていたのです。

もう一つは、ナマハゲについてです。東京では、小学校6年生の社会の教科書にナマハゲが登場するのですが、地元秋田では採用されていません。天野さんは、ナマハゲを知るには現状を知らなければいけない、ピックアップするのではなく、全部調査したいと思い、男鹿市の全町内にアンケート調査をしたそうです。その中で、ナマハゲ行事が途絶えている町内、継続している町内に加え、復活した町内があることに着目しました。昔は独身の若者に限られていたナマハゲのなり手も、現在は若者が減ったことから、「俺達がやる」ということで50代の方がやっているところも24町内あります。所帯が多くても途絶えている町内もあれば、所帯が少なくてもやっている町内もある。そして、15年も途絶えていた飯ノ森地区ではナマハゲが復活しているのです。これは、一人が「ナマハゲを復活させたい」と声をかけたところ、有志が集まり、大晦日にナマハゲが10匹登場することになったのだそうです。きっかけはちょっとした声かけ。とにかく伝えていく、守っていくということには、会話を持つことが大事ということが実感されました。

※「ナマハゲ」は文化財登録の表記です。観光的な「なまはげ」と区別するため、ここではカタカナ表記としました。

ものごとを見る目を学ぶ
複数の方向からものごとを考える

ゲスト3人目は小松和彦さんです。ＪＲ秋田駅にほど近い場所に「小松クラフトスペース」というお店を構え、祖父の時代の小松呉服店から、現在は様々な工芸作家の作品やアパレル、海外から集めてきた民芸品も扱っています。

小松さんが幼少の頃から、お店には全国を旅している作詞家・放送作家の永六輔さんや、民俗学や考古学に興味のある方が立ち寄られ、そうした日常に強く影響されたようです。お店を継ごうとは思っていなかったのに、考古学を学び、旅先でいろいろな布や工芸品を見ているうちに、発掘をやめて商家を継ぐまさかの展開になったそうです。

こうしたことから、小松さんは「海外から見るとアジアの一地域である秋田」という視点で物事を見ていらっしゃると感じました。

その後、あるきっかけで「遊郭」に興味をもった小松さんは、昔の地図や文献を調べ始めて気付きました。それまで「遊郭は陰(裏)の歴史」と思っていたのですが、実は「近代の日本では遊郭でにぎわいを生みだそう」という時代もあったと感じて、ちゃんと勉強しようと取り組んだそうです。一つのものごとを複数の方向から見て、自分で調べ、考える。この姿勢は本当に見習うべきものですし、私達の取り組みにも必要なものの見方と思いました。

秋田に積み重なっている時間と記憶を掘り起こす

小松さんが最近出版された『秋田県の遊郭跡を歩く』。この編集の過程で、小松さんは「遊郭というのは人と金が動く場所にしかできない。そこをたどっていくと現代の秋田の少子高齢化問題につながり、秋田県はなぜこんなに衰退するのかというテーマになった」と話していました。

一つの物事を突き詰めていくと、新たな「知らないこと」に出会い、また調べ考え始める。そして、いろいろな要素がつながっていくことがあるという実体験を聞くことができました。

秋田も掘り下げていくと、小松さんが息子さんを取材した明治・大正・昭和の農村を記録した五城目町の畠山鶴松さんという方や、昭和4年に出版された秋田の花柳界、川反の花柳界を扱っている『美人の秋田』という専門誌の編集者・山田憲三郎さんなど、当時の日常を残した方々がいて、私達は、時間を超えて当時の暮らしを知ることができ、それが新しい気付きや発見につながっていきます。将来のまちの姿を考えて行動していくことは、「未来の記憶」をつくることでもあるのだと思います。将来のまちを考える「プロジェクト」として、私達のまちに積み重なった記憶を探り、未来の記憶をつくっていきたいですね。

土地の記憶は、時間を尺度として考えてみる

3人のお話を踏まえて、進行を務めた石倉さんが素晴らしいまとめをしてくださいました。3人のお話は、それぞれ尺度として時間を捉えていること、そして「土地の記憶」は、一つは岸本さんの話された「地球の記憶」があり、尺を絞ると天野さんが話された「民俗・文芸の記憶」があり、さらに我々の日常生活に視点を近づけると、小松さんの話された「コミュニティーの記憶、まちの記憶」というように、自分が暮らしていく場所の記憶に移っていくと言えます。非常に分かりやすく、頭が整理されました。

風景の成り立ち、場所に持たせた意味を理解し、共感できる仕掛けをつくる

このあとのディスカッションでは、石倉さんの整理を受けて、ゲストの方から改めて分かりやすいお話をいただけました。

岸本さんは、「ジオ（大地）の風景は地形や地質、億や万という単位でできてくる時間スケールの様々な自然、エコ（生態）の風景がある。そしてそこに暮らす人がエコとの関係を持ちながら生活を営んでいる」と捉えており、自分達が暮らす場所の風景はどうできたのか、どういう人がどういう意図でそこに意味を持たせ、守ってきたのかを、いろんな人が理解したり、共感したりできるような仕掛け・仕組みをつくっていくのが仕事の一つと考えているそうです。これからの地方の時代を考えると、みんながこうした視点・意識を持つとより地域が際立つように感じました。

外の世界を受け入れる
境界・ボーダーを行き来する

小松さんと石倉さんは、「秋田は土着の質が強そうに見えるが、過去を振り返れば、よそ者が来て秋田をつくっている面がある」「外から来た人を受け入れている秋田の懐の深さを感じる」と話されました。天野さんも、以前、菅江真澄の本を片手に1年間かけて男鹿半島を一周したとき、地元の人に話しかけると最初は警戒されるけれど、「こんなことが聞きたい、知りたい」と具体的に聞くと歓待して親切に案内もしてくれる、そして帰りにはお土産もくれるという経験を多くしたそうです。アプローチの仕方もありますが、そうした受け入れの土壌はあるのではないでしょうか。

歴史や風土を知ってから考え始めると、まちにも外と内をつなぐ境界があり、文化や人の受け入れを繰り返して今の秋田があるのだと感じます。こんな境界、ボーダーを意識し、そこをどう行き来するかということが、まちの新たな価値を生み出すきっかけになるのかもしれません。

人のつながりを生み出すものは何か教える
語るということは知ること　交流で知識と人を知る

新しい価値に気付き、あるいは生み出すためには、外の世界を受け入れ、境界を行き来することが一つのきっかけになりますが、やはりその中心は「人」だと思います。そういう意味では、今回の取り組みの検討を進めていくには、地元を始めいろいろな関係者や機関が交流し、つながることが欠かせません。例えば美術館、博物館などの専門的な機関、そして行政、大学などです。

さらに、「知る」ことに関して、天野さんからは「土地を案内する人が、どこからどれくらいの知識を得ているかが問題」との意見がありました。たしかに、ガイドする人は、知識として知るだけではなく、その場所に行って、そこの人達と話し、交流しながら知識を得ることも重要です。人に教える、語るということは、自分が知らなければ教えられないし、語られない。私達は自分のまちについてどれくらい知っていて、どれくらい愛情を持って語れるのでしょうか。この点は、忘れることなく心に置いておかなければいけないと強く思いました。

岸本さんからも、ジオパークはガイドを非常に大事にしていて、すごく時間をかけて人材育成しているとのお話がありました。新しいつながりを生むために、ツーリズムで来た人を楽しませるだけではなく、その土地のことを正しく、愛情を持って伝えられる人を育てているそうです。自分の住むまち、関わる土地に愛情と誇りを持つこと。これが私達の「プロジェクト」の根底にあれば、土地の記憶のバトンを次の世代に渡していく仕組みができるのではないでしょうか。

「夜楽」　第3回「土地の記憶」を継承する　ドキュメント

石倉敏明（以下、石倉）：「夜楽」シリーズも今回で3回目、ひとまず最終回を迎えました。前年度（平成28年度）までは、芸術祭をやるのかどうか、開催の是非について議論してきたのですが、どうやら定型化した地域芸術祭を、そのまま秋田でくり返しても意味がないだろう、ということで、むしろ秋田という地域が宿している文化的なバックグラウンドや、歴史的な資源を見直すことによって、未来に何を継承できるのかを問う方向へとシフトしてきました。そんなわけで今回も秋田市が芸術祭をやりますという説明会ではなく、もう少し広い視野を確保したいと思います。

３回目の今日は『「土地の記憶」を継承する』ということで、秋田市だけでなく、秋田県全体、あるいは県境を越えたもっと広いエリアでテーマを捉え直し、満を持して「土地の記憶の継承」という民俗学的なテーマを扱っていきたいと思います。さて、秋田にはたくさんの芸能や祭り、民俗的な伝承や工芸技術が伝えられていますが、それらは閉じた社会の記憶を伝えるというよりも、自然界や生物の世界にも開かれた「土地の記憶」という大きなシステムにつながっていると言えそうです。「土地の記憶」に触れる体験ができることは、東北の大きな魅力かもしれません。

今日のゲストの岸本さんは、酒田市に住んで鳥海山エリアでお仕事されています。また、飛島を中心とするフィールドで民俗学の研究を続けていらっしゃいます。岸本さんどうぞよろしくお願いいたします。

岸本誠司（以下、岸本）：兵庫県出身で46歳、酒田市に住んでいます。２００５年に山形市の大学に赴任したことが東北とのご縁の始まりです。現在は「鳥海山・飛島ジオパーク」の事務局にいて、鳥海山や飛島をフィールドに勉強を続けています。

飛島は山形県の島ですが、秋田県を含めた出羽の国（山形・秋田）唯一の有人離島です。飛島には東北、日本海岸を代表する漁民の文化が生きています。私の専門は民俗学で、飛島でその研究と実践を行っています。周囲約10キロ、標高が68メートルの小さな島で、人口は約２００人、平均年齢が71歳で、子どもは中学生が一人います。島と鳥海山との距離は30キロぐらいあります。北前船がたくさん入ってきていた江戸時代の島の人口は、およそ１０００人ぐらいで推移していました。明治に入ってから人口が増えはじめ、昭和10年代は１７００人に達しました。戦後には、漁業の進歩で船が大きくなり、大きな港を基地として漁をするようになったため、人口が減りだし、今は２００人になってしまいました。10年後には１００人になるのは間違いありません。

１０００人以上いた島が、１００人の島になってしまったらどうなるのだろう。過去の何を受け継いで未来があるのだろう、などと考えながら島の若者達と活動を実践しているところです。

過去の写真を見ると、昭和10年代は島の一番低いところに張り付くように家が並んでいました。１９４８年の航空写真で



石倉 敏明／人類学者 ※21頁を参照

は、港周りがほとんど整備されていません。１９８１年には、畑が減って森が増えてきたような気がします。２００２年に港はしっかりと整備されましたが、畑が大変少なくなり、そのぶん森が増えています。

人口の減少にともなう日常、暮らしの変化に応じて、島の社会環境が、ここ15年ぐらいで大きく変わりつつある中、様々な人が島の課題を共有して、その課題解決に取り組むようになりました。例えば、海岸に押し寄せる漂着物、海ごみは、島の人だけではどうにもなりません。みんなで何とかしようということで、「飛島クリーンアップ作戦」が２００２年からスタートしています。

また、「三島交流会」では、飛島、粟島、佐渡島の三島が互いの現状や課題を共有しながら自然を守り活かした島づくりをめざしています。２０１１年には島に関わる、様々な人達が一堂に会す「とびしま未来協議会」ができました。私は、２０１３年に「とびしま漁村文化研究会」をつくり、島の若者達と一緒に様々な活動をしています。２０１６年には「鳥海山・飛島ジオパーク」が日本ジオパークに認定されました。島の人口は減っているのですが、一方で島に関わり合う人の密度というのは高まりを見せています。

今、飛島ではＩ・Ｕターンの若者達が「合同会社とびしま」を立ち上げ活動しています。メンバーは８人で、会社の理念の基盤に据えているのは「０（ゼロ）次産業」という言葉。これは「島の風景の保存と、島の生活の知恵や技術の継承」に関する活動です。島の人達がつくってきた風景だとか技術や知恵を自分達のバックグラウンドとして、これからの島の仕事の意味を考えていきたい、と活動しています。

私の活動では、「飛島学講座」を開催したり、『飛島学叢書』という本を出しています。「島のミュージアム　澗（にま）」ができ、近年は、島の若者や「とびしま未来協議会」が様々な賞をもらうようになりました。いろんな人が関わって時間をかけて島の課題や未来を語り合い、今では外部の人も評価してくれるようになりましたが、このようになるまで15年くらいかかりました。いろんな人達が同じ目的を持ち、コミュニケートをしながら推し進めていくというのは、ある程度時間がかかります。でも、それが着実に島の未来につながっているような気がします。

ジオパークは地球の記憶を扱います。世界遺産やエコパークやジオパークは、ユネスコが推進するプログラムで、地球を守り、持続可能な社会を実現するという目的で進められています。今、ジオパークは日本に43か所あり、東北では８か所、秋田県には４か所あります。「鳥海山・飛島ジオパーク」は秋田県由利本荘市、にかほ市、山形県遊佐町、酒田市の４自治体で取り組んでいます。私なりに何のためにジオパークやっているのか、ジオパークはどんな効果があるのかを考えると、多分、自然の新しいつながり、地域と地域の新しいつながり、人と人の新しいつながりをつくる、この三つのことが大事なのではないでしょうか。

突然ですが、ここでクイズをしましょう。地球は46億年、日本列島は１５００万年、飛島は１０００万年です。では、鳥海山は何年、何歳でしょうか。１番・１５００万年、２番・３００万年、３番・60万年のどれでしょうか。

――２番と３番が半々くらいですね。正解は３番、60万年・60万歳です。

もう一つ。鳥海山はどこから見たのが一番かっこいいでしょうか。１・酒田から見た鳥海山（拍手）、ありがとうございます。仁賀保からみた鳥海山　４・由利本荘から見た鳥海山　５・飛島から見た鳥海山（拍手）、ありがとうございます。

実は、この答えは、どこから見てもかっこいいです。理由は二つあります。鳥海山は60万年の間、何千回も噴火を重ねて噴出した溶岩がつくった地形、「溶岩地形」が発達しています。これが見る方向によって違って、かっこよく見えるからです。もう一つあります。鳥海山のような火山は崩れやすく、特に北麓の秋田側は崩れた地形が見られます。「溶岩地形」と「崩壊地形」の見え方がどこから見ても美しいので、自分の住むところからみた鳥海山が一番かっこいいとなるのです。

石倉：地球の歴史から身近な山や島の記憶まで、46億年の歴史をわずか15分で語っていただきました。すばらしいものでした。飛島の過疎や人口減の話も、むしろ逆行を越えてゆく若者達の新しい取り組みを紹介いただいたことで、希望や創造性が浮かびあがってきたように思います。それでは次に天野さんには、男鹿周辺のお話をうかがいたいと思います。

天野荘平（以下、天野）：男鹿市脇本生まれで、潟上市追分に住んでいます。勤務先は秋田市で、土日を利用して好きなことをしています。

地震とナマハゲの話をしたいと思います。私達は交流のある団体と協力して、男鹿で起きた過去の地震の記憶があるか、また、その時、どんな状況だったのかを聞き取り調査をしました。私達は男鹿市五里合地区に出向き、年配の方達に地震の記憶を尋ねました。すると、口々に「５月１日だべ」「５月１日午後３時だよ」と言うんですね。

どういうことかと、よくよく聞くと、昭和14年（１９３９）５月１日午後３時に、五里合地区にとても大きな地震（男鹿地震）があったことを、地震後に、「♪ごがつ　ついたち　ごご　さんじ」で始まる「復興歌」を、毎日のように学校で歌わされていたことで覚えていたんですね。

では、その歌はどんな歌だったのかということを尋ねましたら、歌うことができるという方がおりました。歌ってもらった歌をテープにとって、五里合のこおひい工房・珈音（かのん）の佐藤毅さんに譜面に起こしてもらいました。そして、その歌を今の子ども達に歌ってもらいたいと思い、校長先生に話したところぜひ来てくれということで、佐藤さんと二人で五里合小学校に行きました。平成25年（２０１３）のことです。地震の起きた日と同じ５月１日に発表会を開きました。地域の人達もいっぱい集まってきてくれて、一緒に歌ってくれました。ＮＨＫの全国ニュースになり、全国にいる五里合小学校の卒業生からたくさんの反響があったということです。

男鹿では昔から、大きな地震が結構あるんですね。平成23年（２０１１）の東日本大震災、昭和58年（１９８３）の日本海中部地震、昭和14年（１９３９）の男鹿地震、そして文化７年（１８１０）の菅江真澄の体験した地震ですね。



岸本 誠司／民俗学研究者
１９７１年兵庫県生まれ。専門は環境民俗学。近畿大学大学院修了。民俗学者野本寛一（２０１５年国の文化功労者）に師事し、以降、全国の農山漁村のフィールドワークを重ねる。05年より東北芸術工科大学専任講師。06年より山形県の離島・飛島の民俗調査を開始。13年にとびしま漁村文化研究会を結成し、島の若者達とともに島の文化の記録や継承活動に取り組んでいる。15年より鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会主任研究員。



天野 荘平／男鹿市菅江真澄研究会会長
１９４９年男鹿市生まれ。男鹿市文化財保護審議会会長。ＮＰＯ法人あきた地域資源ネットワーク副理事長、潟船保存会事務局。江戸時代の旅人・菅江真澄が残した記録をもとに、多面的な調査を行い地域づくりへの活用を考えるほか、八郎潟の漁撈習俗などについて調査中。２０１５年からナマハゲ行事の実施状況調査を男鹿市教育委員会と行い、「男鹿のナマハゲ」報告書を作成した。

その昭和14年の男鹿地震では、住家はほぼ全滅、田んぼも全滅なので、田植えのやり直しが必要でした。地震で倒壊した住宅をつくることになり、７００円の住宅を、お金のある人は１２００円だったそうですけれども、県庁の職員が設計してつくられました。この時の地震では1.5～2メートル幅の地割れの被害が大きかったこともあげられます。また、男鹿温泉郷でお湯が20か所自噴したそうです。

これは五里合地区にある日本海中部地震の慰霊碑ですが、海抜６．８９メートルの、ここまで津波が来たということですね。寒風山の中腹に「じしづか」（地震塚）と呼ばれる場所があります。文化７年の「變死（へんし）亡霊供養塔」や昭和14年の「震死群霊追福之碑」があります。

ナマハゲの話をしたいと思います。最近、東京の小学校６年生の社会の教科書にナマハゲが登場しました。しかし、地元・秋田県での採用はありません。秋田の教育委員会に話したりしていますが、なかなかうまくいきません。

ナマハゲのことを知るには現状を知らないとダメだということで、2年かけて現状調査をしました。一部だけの町内のピックアップではなく、全町内でのアンケート調査をしました。その結果わかったことは、ナマハゲの名称にはいろいろあって、ナマハゲ、ナマバケ、ナマハグ、ナモミハギ、ナマゲなど14もの呼び名がありますが、みな、なまけ者が火にばっかり当たっているとできる火形を、ナマハゲが刃物で剥ぎにくるのだということからきているようで、どうも原型にそういうことがあるような気がします。ですから、ナマハゲ行事は、子どもに向けた行事というより、大人に向けた行事だと私は思っています。最近分かったことですが、「オロロロ」「オロオロ」と呼ぶ地域もあるそうです。

もう一つ、ナマハゲに扮している人の調査もしました。昔は独身の若者に決まっていたそうですが、今は若者が少なくなっているので、状況は違います。若い人達がやらなければ、俺達がやるということでやっている町内は24町内もありました。

地域別に見ますと、男鹿市で一番所帯の多い船越本町・４８０所帯では、ナマハゲをやっていません。少子高齢化のためだそうです。しかし、所帯数が少なくてもやっているところはあります。これは一体どういうことなんだろう。せっかくアンケートで、分かったことですから、訴えていこうかと思っています。平成28年12月31日現在、１４８町内のうち86町内（全体の58％）でナマハゲをやっています。私は毎年、見ていますが、多分、死ぬまでかかっても、全部は見られないと思うと残念です。

最近、飯ノ森地区でナマハゲが復活したことが全国ニュースになりました。この復活はうれしいですね。15年間も途絶えていたのに、誰か一人が声をかけたら多くの人が集まってきたのはちょっと不思議ですよね。それで、12月31日に、ナマハゲが10匹登場しました。ちょっとした声掛けで、こんなに集まるとはね。

やっぱり酒でも飲みながら、とにかく会話を、話し合いを持つことが大事です。秋田駅に行くと、男鹿のナマハゲの広告があります。「男鹿のナマハゲは12月31日ですよ」と、書かれていますが、掲げられている写真は2月に行われる観光用の「なまはげ柴灯（せど）まつり」の写真です。



飯ノ森のナマハゲ

石倉：数年前に僕が真山地区でナマハゲを見た時も、やはり人手不足で、親子でお父さんと息子がジサマとバサマに扮していました。

天野さんからは、飯ノ森地区のナマハゲ復活の話や、86町内でナマハゲをやっているという地域の多様性についてもご紹介いただけました。これはやはり大変に貴重なことで、男鹿半島の文化として世界に誇ることのできる「土地の記憶」と言ってよいと思います。

同時に、先ほどの岸本さんのお話とも共通するような、自然と文化の世界をつなぐダイナミックな視点も現れてきました。お二人の話から、鳥海山や男鹿半島の地質学的な特徴や、人口減少や地震といった災難や課題を乗り越えていく知恵も浮かび上がってきたように思います。

次に、秋田市の秋田駅前にある小松クラフトスペースのご店主、小松和彦さんのお話をうかがいます。秋田市はある意味では、秋田中の文化の交差点、交流点でもありますが、小松さんのお店では秋田だけではなく世界中の文化が集まっていて、しかも小松さんはそこを拠点にしながら、秋田の文化を深く掘り下げていらっしゃいます。

小松和彦（以下、小松）：もともとは60年ちょっと前に祖父が小松呉服店として創業した店ですが、様々な工芸作家の作品、アパレル、世界で集めた民芸品などを扱っています。今の店舗ができたのは、ちょうど36年前で、その時から父が着物だけじゃなく様々なジャンルの民芸品、工芸品などを取り扱うようになりました。

青森県で民俗学や考古学を在野の立場で研究されていた田中忠三郎さんという父の友人から、小学校2年生ぐらいの時、お土産として、本物の縄文晩期の土器をもらいました。雷にうたれたような衝撃を受けて、すっかり感化されてしまいました。小学校4、5年生ぐらいの時には、この方を、私がつくった歴史散歩のルートで秋田市内をご案内しました。このルートは今も現役でフィールドワークを頼まれた時に使っています。そういった趣味が高じて大学では考古学を専攻しました。

作詞家、放送作家として知られている永六輔さんも時々来られました。永さんの師匠の一人が民俗学者の宮本常一さんで、宮本さんの影響で全国を旅して回られていて、秋田に来ると当店に立ち寄られたのです。永さんの友人のカンボジア人女性ベン・セタリンさんが、戦争などで肉親などを失った女性達を助けようと、カンボジアの伝統的な素材の衣類や小物などを販売しており、永さんからそのチャリティーバザールをやれないかという相談を父が受けて、１９９７年に当店で開催しました。

永さんも駆けつけてくれて、トークやサイン会をやってくださって、すごい売上金や義援金が集まり、学校をつくろうということになって、カンボジアのプノンペンの郊外に小学校をつくりました。できた学校を見に行った時訪れたカンボジア、ラオス、タイなどには、その後毎年のように訪れることになりました。



小松 和彦／小松クラフトスペース代表
１９７６年秋田市生まれ。青山学院大文学部史学科卒。99年に参加したカンボジアでのＮＧＯ活動をきっかけに、民族文化や手仕事に関心を抱き、世界各地の美術工芸品の収集・販売を始める。２０１１年から秋田県内の遊廓等の調査活動を始め、16年に『秋田県の遊廓跡を歩く』を刊行。「世界の民族工芸」「遊廓」などに関するレクチャーを京都、秋田の美術大学などで行っている。現在、秋田魁新報電子版にて郷土史コラム「新あきたよもやま」を隔月連載中。

農村のすごく明るい印象と、昔ながらの生活に感銘を受けたのと、古代のもののような建物や道具が現役で使われている伝統的生活に魅せられたことなどが理由でした。それまで全く店の仕事を手伝ったこともなく、継ごうとも思ってもなかったのに、旅先でいろんな布や工芸品を見ているうちに、発掘をやめて商家を継ぐという、まさかの展開になりました。

店を継いですぐ行ったのは、あこがれのインドで、２００３年ごろからは毎年のように行っています。あとは、中央アジアに敷物のキリムの買い付けや、草原地帯の遊牧民の生活を見たくて出かけました。アフリカにも布の買い付けなどに行きましたが、この頃は、秋田を顧みることがあまりありませんでした。秋田にいるとどうしても日本の中の、東北の中の秋田ということになってしまうんですが、海外から見るとアジアの一地域なんだという想いで見ていました。

２０１０年ぐらいから、周りには縄文時代にはまる人が増えてきて、私も「縄文土器とアート」というテーマで講演させてもらったり、県立博物館から「土偶について話してください」のオファーがあったりで、これは本格的に郷土史などについて学び直さなくてはと思い勉強している中、興味が縄文ではなく別のもの、何と遊郭に移ってしまったんです。

秋田市の古い地図を見ていて、遊郭を見つけたことがきっかけでした。その場所は、予想と全く違う保戸野の方でしたので、何でこんなところに遊郭があるのかなあと思って、いろいろな本などで調べていたら、ああ、これはすごいぞと思えてきたんですね。それまで遊郭については、陰の裏の歴史みたいに思っていました。ところが、近代の日本では、遊郭によってにぎわいを生みだそう、みたいなところがあって、これをちゃんと勉強すると面白いものが出てくるんじゃないかと思えて本を買い込んで、とりつかれたように勉強しはじめました。その時、千秋公園にある「料亭・香雲亭」で縄文のことについて話してくれという依頼が舞い込んだのです。

会場を見に行ったら、縄文じゃなく遊郭について話したいと思わせる会場でした。遊郭についてやることにし、後に遊郭専門出版社を起こす知り合いの渡辺豪さんに相談して、彼とフリーライターの井上理津子さんの二人を呼んでトークショーをやりました。ちょっとマニアックで、内心心配だったのですが、お客さんは全国から集まり、満員札止めの盛況でした。若い人や女性も多く、遊郭に関心を持つ人が多いことを実感させられました。

その2年後くらいに、脱サラした渡辺豪さんが、日本初の遊郭専門出版社・カストリ出版を立ち上げました。第2弾として発売されたのが『全国遊郭案内』で、それを読んで私なりに秋田県の遊郭のことをまとめたものが、その本の第2版からの付録になりました。その翌年は渡辺豪さんから共著で本を出す誘いを受け、ちょっとした冊子ができればいいなという軽い気持ちで取材スタートしましたが、その取材途中、ああ、これはちゃんとした本をつくるのがいいなという気にさせられて出したのが、『秋田県の遊廓跡を歩く』です。遊郭というのは人と金が動く場所にしかできないもので、そこを辿っていくと現代の秋田の少子高齢化問題につながり、そこが落としどころになっている本です。

さらに、この本を見たさきがけデジタルの安藤伸一さんから声をかけてもらい、去年の４月から「新あきたよもやま」というタイトルのコラムを秋田魁新報デジタル版で連載しています。最初に書いたのが、浅草で秋田民謡の民謡酒場をやっている方の話。金の卵として東京に出てなかなか故郷に帰れなくなった人達が浅草の民謡酒場に集まって故郷の想いを語り合ってきたのだという。それから、五城目の畠山鶴松さんという明治・大正・昭和の農村の記録画家ですね。その方の息子さんに取材しました。次は二ツ井町の小掛というところで人形道祖神・ショウキサマの60年ぶりのつくり変えというのがあり、これは、もうかなりなインパクトでした。

昨年は、昭和４年（１９２９）に出た『美人の秋田』という、秋田の花柳界、川反の花柳界を扱っている専門雑誌の復刻出版をしました。この雑誌の編集者・山田憲三郎はずっと気になっていた人物でした。昭和28年（１９５３）に出た、川反芸者などを扱った『秋田美人と民藝』という本も、付録としてカップリングしています。

36年ぶりの店舗のリニューアル工事が今日（1月31日）で終わり、記念イベントとして、川反の芸者さんとして活躍した若勇さんを迎えて「最後の川反芸者・若勇さんの舞を見る会」を2月18日に開催します。

今やりたいことは、今じゃなければできないことをやることです。例えば遊郭や民俗学でも、今のうちに、80代、90代の人に取材しておかなければ、もう全く何も書き残せません。

石倉：縄文土器から遊郭研究まで、個人史に秋田の歴史が透けて見える大変面白いお話でした。３人のお話は、非常に大きな尺度によって、時間を捉えるという共通点があったように思います。整理しますと、土地の記憶というのは、多様な捉え方があり、そこには岸本さんが「地球の記憶」と言った46億年の地質学的時間というものがあります。もっといえば、これは１４０億年前のビッグバンから始まった、宇宙の記憶にもつながってくる時間軸で生物が生まれる前の世界がそこでつくられています。

その上に40億年前から始まる生命の歴史が重なり、エコロジーをつくる世界の尺度が生まれてきます。ジオパークをつくり出す景観は、こうした数十億年単位で築き上げられてくる時間軸に根差しています。

それともう一つ、尺度を絞って、民俗の記憶とか、文芸の記憶とかが出てきますね。日本列島に人がやってきて、旧石器時代の文化が伝えられ、それから更なる大きな文化的な飛躍を経て、縄文時代が始まる。そして、それぞれの地方史のユニークな特色が生まれる。地方史や郷土史というのは、そういう民俗学的、地誌学的な観点で切り取るところが多いと思いますが、もう少し、我々の日常生活に近づけてみると、コミュニティーの記憶、まちの記憶、あるいは村の記憶、そういう自分の暮らしていく場所の記憶に移っていくのだろうと思います。大まかに、三つに整理させてもらいました。

地球の記憶というのは我々人類全体の問題でもありますが、そこに民族の歴史があって、それがベースになって、それぞれ地域集団の生活、共同体というものがある。こういった時間軸が、たとえば飛島のような小さなエリアにも重層的に折りたたまれているといるわけです。岸本さんが、15年くらいの飛島の活動があって、それが受賞者も増えて、いろんな形で注



小松クラフトスペース2階
世界の民俗コーナー



小松さんが復刻した『美人の秋田』

目を浴びてるということをお話してくださいましたけれども、その背景には１０００万年に及ぶ島自体の時間があり、さらに鳥海山は60万年の時間を持つと考えるととても面白いですね。鳥海山は「出羽富士」とも呼ばれ、秋田（羽後）と山形（羽前）をつなぐ蝶番のような位置にありますが、岸本さんからは秋田はどんなふうに見えていましたか？

岸本：山形市にいた時は、秋田市を非常に遠く感じていて、東北学・地域学に取り組んでいるグループを組めませんでした。そのくらい遠く感じていました。ただ、庄内地方の人は、山形市よりも、秋田市の方を近しく感じていると思います。

石倉：確かに秋田市から山形市に行くには電車や車でも４時間ほどかかってしまい遠い感じがします。荘内藩と秋田藩の関係は戊辰戦争のときにちょっと、こじれてしまったこともありますが、それにしても、地域性には共通性が強いというか、まるで兄弟のように感じられるときがあります。

岸本：山形側の最北・女鹿（めが）を境に両県の風景、文化的な風土がはっきり変化していると感じます。その出羽の国を真ん中から分けているのが鳥海山です。もっと古い時代で言うならば、ヤマトの国の一番北の端に鳥海山があり、その時、平安時代の国府、今でいう県庁のようなものが秋田にあったり、庄内にあったり、そういうせめぎ合う、狭め合う空間があるということです。

石倉：確かに有耶無耶（うやむや）の関を越えて、手長足長の伝説を思いながら鳥海山を見るとすごく古代的なものを感じますね。手長足長という妖怪が村人を苦しめていたという伝説ですが、最後に慈覚大師が怪物を退治して、金峰（きんぽう）神社が建てられます。

鳥海山の麓は芸能も伝説も豊かで、一つの文化的なホットスポットと言えそうですが、ここは同時に、自然的な生物多様性とかジオ的な多様性もあるんですね。そうすると自然と社会と人間がつながった大きな多様性の渦のようなものが見えてくる、その意味でも、鳥海山は魅力的だと思うんですよね。

岸本さんの仕事の中でジオパークはおそらく地質学的尺度に関していて、これを民俗学的・文献学的な尺度に接続していく必要があるのではないかと思いますが、そのあたりどうつないでいらっしゃいますか？

岸本：それは私の大きい宿題、課題ですね。ジオ（大地）の風景は、億や万という単位の時間スケールでできるものです。また、もう少し短い時間スケールでできている様々な自然、エコ（生態）の風景があります。そして、そこに暮らす人々は、ジオやエコとの相互の関係を持ちながら生活を営んでいるということになります。ジオ、エコ、ヒトのそれぞれの関係をしっかりと理解して、ジオパークの活動に反映することが私の仕事に求められています。

鳥海山は秀麗な山で、そこには神様がいるとか、滝や洞窟には不思議な力を感じるといった、いわゆる「神々の風景」があります。たとえば、そういった風景というのはジオ、エコ、ヒトの相互関係の中でどのように成立したのか。あるいは、どういう人達がそこに意味を持たせたり、その意味を守ってきたのでしょうか。このような地域の風景のなりたちや意味をいろんな人が理解したり、共感したりできるような、そんな仕組みをつくっていくのが、私の仕事の一つだと思っています。

石倉：これは本当に重要な、地球的課題と言ってもいいような問題だと思います。僕達の目の前には数十億年に及ぶ非生物の運動があり、ジオ的現実となって現れてきます。僕達が「エコ」と呼んでる生物の世界はだいたい数億年規模の生命史の尺度があり、その上にやっとアントロポス＝人類の現実というものが現れます。岸本さんがおっしゃったジオの世界、エコの世界、ヒトの世界は、その三つが複雑にからまりあった世界です。この三つは、たとえば男鹿半島でも感じられると思いますが、天野さん、いかがでしょう？

天野：男鹿はジオの教科書のようなところだと感じています。私の生まれた脇本には脇本城跡があり、その下のトンネルを抜けると、貝の化石がある地層が露出しています。貝のいた海底が長い時間をかけて隆起して地上に露出したのですね。昔は海の底であったこの地形をうまく利用して、安東氏が山城をつくったことを考えると、ジオと中世の歴史が関連しているのかなぁ、と思ったりします。

昭和14年の地震の話に戻りますが、先の調査で、「地震の時、どんな状況だったか」「何か困ったことはなかったか」と聞いたのに対し、ほとんどの回答が、田畑や海からとれるものがいっぱいあったし、保存食もあったので「何も困ることはなかった」ということでした。食糧のない人には、近所の人が持ってきてくれるということでした。干拓前の八郎潟では、「モク」という藻類がたくさんとれて、田畑の肥料に、ふとんの綿の代わりに、オムツに、落とし紙などに使ったそうです。身近なところで生活必需品が手に入ったようです。

石倉：八郎潟のような広大な湖を干拓する前の記憶というのは本当に重要ですね。また、災害をどういう風に伝え、語り継いでいくのかは非常に大事な問題です。日本海中部地震の唄を小野花子さんという民謡歌手がラジオの番組の中で唄っていたんですが、こういう歌い継ぎ方もあるんだと感動した記憶があります。アートの世界でも、東日本大震災のあとの、災害という出来事や死者の記憶、故郷を放棄しなければならないこと、あるいは放射能汚染や防潮堤の建設をテーマにアプローチすることも増えています。そういったものも含めて継承を記憶していかなければならないってことが現在の課題かなと思いました。

話が少し変わりますが、男鹿半島には菅江真澄、柳田国男（やなぎた くにお）、折口信夫（おりくち しのぶ）など、非常にたくさんの旅人や民俗学者が訪れて記録も書いていますし、外から来た人を受け入れているという印象があります。鳥海山麓も地震で景観は変わりましたが、古くからの景勝地で菅江真澄や松尾芭蕉も来ていますね。

小松：秋田にはよそ者が多いです。大阪の陣とか北陸の一向一揆に敗れて落ち武者になって逃げ延びてきた人が多く入って



象潟漁港から見た鳥海山



男鹿市脇本の貝化石

きています。秋田って土着の質が強そうに見えますが、よそ者が来て秋田をつくってきている面もあります。

天野：僕は菅江真澄の本を片手に、一年間かけて男鹿を一周したんです。そしたら、当初抱いていたイメージと違いました。男鹿の村々では最初は警戒されるんですけど、「こんな風なことが聞きたい、知りたい」と具体的にたずねると親切に教えてくれるし、歓待して案内もしてくれる。帰りにはお土産もくれる。これは、すべてアプローチの仕方だなあと思いました。

男鹿は特殊なところで、大塔宮（おおとうのみや）、漢の武帝、徐福、雁の使いの蘇武（そぶ）などもたような日本の中央で活躍する人間、大陸で活躍する人達の記録が何で男鹿に残っているのか不思議です。ナマハゲには漢の武帝説、漂着したロシア人＝異邦人説などがあります。そういった伝説には事欠きません。しかし、「９９９の石段伝説」や「椿伝説」など新しい伝説もあります。「９９９」については菅江真澄は一言も書いておらず、ただ鬼が一夜でつくったとだけですね。おそらく誰かが明治になって考えついたものと推察しています。

石倉：本当にそうですね。菅江真澄の後にも、蓑虫山人（みのむしさんじん）みたいな不思議な文人画家も来ているんですね。もちろん岡本太郎やシャルロット・ペリアン、最近ではシャルル・フレジェといったアーティストが男鹿半島に訪れています。昨年はバンクーバーからシンディ望月さんという日系人のアーティストが取材に来られました。また、男鹿半島と鳥海山の文化をつなぐ要素としては、修験道の精神文化を欠かすことはできないと思います。

鳥海山麓エリアも、ある意味、修験道＝山伏の世界。男鹿には円空も来ていますし、二つの地域には非常に宗教的に深いものを感じるんですね。そういう意味では鳥海山のあたりの開かれ方というのはどうでしょう？

岸本：時代によって違うと思いますが、古いところから言いますと、例えば延喜式内社（えんぎしきないしゃ）っていうのがありますね。延喜式神名帳（じんみょうちょう）・巻九・十という書物ですけれど、そこに神様、大和の国の神様と関わりの深い神様が３０００人ぐらい書かれているんです。ただ、出羽の国の神は９しかない。９座、９の神様しか書いてないです。そのほとんどが海沿いにあります。鳥海山は大物忌神（おおものいみのかみ）。その沖の飛島は小物忌神（おものいみのかみ）。１０００年前から、その場所は、大事な土地の大事な神様の場所だよと言われてきたような場所です。

酒田市も秋田市も男鹿もそうですが、海のイメージがこれ相当大きいなと思います。非常に漂着伝説というのが多いんですね。いろんな人やモノが海の向こうからやってくる、その歴史的な層というのを重ねながら地域の歴史をデザインする、そういうことなんですね。そういうことで海っていうのは非常に大事です。

石倉：鳥海山麓へ行くと、有耶無耶の関のように峠ひとつ越えると別の国に来たような境界線を感じることがあります。秋田城や払田柵（ほったのさく）も一つの文化的境界というか、ヤマトと蝦夷の世界を隔てる膜のように感じます。そういう外と内をつないでいくエリアが出羽の国全体にあったのではないかなと想像します。

最近、まちづくりの話の中で、細胞膜のような境界の話がよく出てきます。生物は代謝をして外から栄養を受け入れたり、内から外に老廃物を放出するライフサイクルがあります。これが硬直すると壁になっていくのですが、硬直した壁をアクティブ・メンブレイン、活動的な膜に変えていくという発想と技術が活きたコミュニティーや文化的活力の秘談だと言われてるんです。この活きた環境は「ライブ・エッジ」とも言われています。そういう意味では、前に小松さんに秋田城や高清水のあたりを歩くコースを案内していただいた時も、膜というか、ボーダーというか、境界線というのをすごく強く感じました。

小松：秋田城が建設された時、そこは日本の北限で、北方社会との境界であり、玄関口でもあったんですね。秋田城近くにある古四王神社も今は西向きですが、元々は北向きに建てられていたんです。そこには、国家の北方社会に対する何らかのメッセージがあったのではないかと思うんですよ。

石倉：考えてみたら国の境界がそこにあるのは自然なことなんですね。最近も北朝鮮から流れついた船が新屋浜に打ち上げられましたが、ここにも境界や膜の感覚を感じました。

小松：８、９世紀の秋田の沿岸部は東北アジアの国・渤海（ぼっかい）国との交流の玄関口でした。渤海国からの使者は国交を結ぶためにやってきていましたが、時には地元の住民に殺されたりという、そういう１２００年くらい前の歴史、当時の大陸と秋田を結ぶ関係は、最近の木造船の漂着のニュースを見るたびに考えさせられます。

石倉：カルチャーツーリズムとかジオツーリズムの面ではポテンシャルが高いのではないかと思うのですが、一方でそれぞれの地域や土地、施設や機関に行くとあまり交流は生まれていない。例えば美術館、博物館であったり、それぞれの行政であったり、大学であったり、それぞれ孤立しているようにも感じてしまいます。我々の大学もさほど他の美術大学とつながっていないので、反省するところがいっぱいあるんですけど。人と人のつながりというのは、観光の面ではどういう関わり方がありますか？

天野：案内する人がどこからどれくらいの知識を得ているかが問題です。一番いいのは案内先に行って、対象物を見物・知識を得るのはもちろんですが、現地の人達と話をしながら、交流しながら勉強して知識を得ることです。生の情報収集です。逆に言うと、行ったことがないところを案内して、「こうですよ」「ああですよ」などとガイド本の類を読むだけでは誤ったことを教えてしまう可能性があります。

教える、語るということは、知らなければ教えられないし、語られません。そのためには、よく勉強、学習しなければならないと常日頃思っています。

石倉：定型化した知識を繰り返して伝えるのと、たえず生きた知識を更新していくのとでは、体験のあり方も根本から変わってきます。ここにも生きた「知識の細胞膜」があるのかも。それにしても、男鹿半島、真山地区の、なまはげ館でナマハゲ



菅江真澄の描いたナマハゲ
（『男鹿の寒風』秋田県立博物館蔵写本）



秋田市寺内にある古四王神社

面を見ていますと、膨大な数の面がそれぞれ違う素材で、異なる様式でつくられていることに圧倒されてしまいます。

岸本さん、ジオパークの仕事や飛島での仕事を通して、ツーリズムというか観光の目線を通して持ったガイドの課題はどんなものでしょう。

岸本：ジオパークは秋田県に4か所ありますが、すべてのジオパークでガイドを非常に大切にしていて、時間をかけて人材を育成しています。ジオはつながりだと言いましたが、ガイドの存在が新しいつながりを生む仕組みの一つだと思っています。ジオパークのガイドさんは、努力を惜しまず勉強されていて、分かりやすく、正しく、楽しく、ガイドができるようになっています。ジオガイドは、その土地にツーリズムで来た人を楽しませるだけでなく、その土地のことを正しく、また愛情を持って伝えられる人達です。ジオパークはそうしたガイドの質の管理も担っていますが、これからの観光では、その土地に精通した人を介したツーリズムの需要が高まっていくんじゃないかと思っています。山伏というのは本当に岸本さんのやっていることと似ているように感じます。山伏は里人を山中に案内する「先達（せんだつ）」として出羽三山の聖地をめぐりますよね。修験道という伝統はその土地において学ぶ知恵の体系です。

小松さんはさきがけデジタルの記事で同じく「案内人」として活躍されています。「小掛集落のショウキサマ」の記事では、男性のシンボルと女性のシンボルをちゃんと紹介しているんですね。案内人によって、フォーカスというか見せ方が変わります。小松さんの味が大好きです。

小松：私は自分が見て面白いと感じたことを書こうと思っています。歴史や民俗学のファンだけじゃなくて、サブカルチャーやアートなどが好きな方々にも面白いと思ってもらえたらなと。私の遊郭の本を買う人は、結構若い女性が多いです。本を通して秋田はかつて鉱山、油田、林業などの産業で栄えていたことを知ってくれたらうれしいです。

石倉：鉱山の周りには独身男性が集まっていて、遊郭ができ、そこに芸能や舞台などいろんな文化が花開き、温泉もあって、そういう意味では今の観光スポットの多くは、鉱山文化と切り離すことができないと思います。もう一つ、秋田の芸能で欠かすことのできないのが番楽ですね。これは山伏と山立（やまだち＝マタギ）が伝えた地域の神楽で、古い形の翁や三番叟（さんばそう）の舞も伝わっています。こうした芸能も、伝える人、紹介する人がいなかったら、秋田中には広がっていなかったでしょうね。

小松：畠山鶴松さんのお孫さんはケシゴム版画をやる人で、最近おじいさんの鶴松さんの絵を彫って、それを商品化したそうです。忘れ去られていくものを、イベントなどを通じて世に紹介し、再評価していくことは有効なことじゃないでしょうか。

石倉：そういう意味では、アートを文化的なツールの一つとして使っていくことで、バトンを次に渡すことができるのかなと。今日発表していただいた壮大な「土地の記憶」も、そうやって人から人へと、世代を越えて伝えられてきたのではないかと思います。

それでは、会場のほうで質問のある方、どうぞ。

会場の男性：岸本先生におうかがいします。飛島での取り組みが15年かかったそうですが、何でそんなに時間がかかったのかということと、民俗学者でありながら、研究に専念しておられればいいのに、ジオパークないしは仕組みづくりとかいえばいいでしょうか、それを若い人達と一緒にやる気になったのは何故ですか。どうして、そういうことになったのかその背景をお聞かせください。

岸本：飛島にかかわるいろんな人達が、同じ部屋で、いろんな議論をするようになり、島の未来を語り合うことができるようになった時間が15年ということです。その中で私は民俗学を勉強し、島のいろんな生活文化や歴史を調べ、これからの島に何がどう必要なのかということを考える一人のメンバーとして、そこに入っていました。

それから島づくりですね。民俗学には、大きな目的がありました。それは〈日本人とは何か〉ということです。柳田国男は、〈稲作を大事にする民族である〉との一つの答えを出しましたが、民俗学は現代という時代から何を要請されているのでしょうか。それを考える時に、民俗学は地域の先輩の人達が、どう生きていたかをしっかり学んで発信していく役割を持っていると思います。他所の考え方を地域に持ってきても、うまくいくかは分からないです。一番成功に近いのは、過去から学ぶこと。また、地域や私達はどう生きていくのかということを、いろんな人と考えていくのが大事で、そこに民俗学はどう貢献できるのかが私の大きなモチベーションになっています。

そうした状況の中にいろんな若者が入ってきて、若者達も島を勉強したり、これからは自分達が継承者だ、よそ者だけど継承者なんだという自覚を持って生活しています。そして、そんな若者達を多くの大人が応援しています。

石倉：きれいに全体の話をまとめていただきました。よそ者の視点と内に住んでいる人の視点は好対照で、対立して捉えられがちなんですけれど、本当はそうじゃない。人類全体のことを考えれば、われわれは皆、アフリカ大陸から何万年も時間をかけて移動をくりかえしてきた「よそ者」ということになります。本当のことを言えば、その場所に何年住んだから「内の視点」になるか、ということは厳密には決められない。そういう意味では私達は皆、移動しながら、その土地に生を享け、土地の富を交換し、文化を醸して、次の世代につなげるのかなと思います。

今日は秋田の北と南でそれぞれの土地のやり方も垣間見ることができました。世代を超えて、どういうことが必要なのかなというコミュニケーションを深めることも大切だと思います。次にバトンをつなげていくためにはどうすればいいのかと。



ジオパーク・ガイド（男鹿市安田海岸）



飛島の勝浦集落。北前船の寄港地だった。

第4章 シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク ～地域芸術祭を超えて～」



この「夜楽」第3回で最後になります。今日は雪の中、鳥海山麓や潟上・男鹿エリア、そして秋田市の駅前からゲストにお越しいただきました。どうもありがとうございました。









シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク ～地域芸術祭を超えて～」 ノート

平成29年11月23日（木・祝）14時～17時　エリアなかいち　にぎわい交流館ＡＵ２階　展示ホール
ゲスト：芹沢　高志　氏（アートディレクター・P3 art and environment代表）
原　万希子　氏（コンテンポラリーアートキュレーター）
高堂　裕　氏（「踊る。秋田２０１７」実行委員会委員長）
藤　浩志　氏（美術家・プロジェクトディレクター）
コーディネーター：石倉　敏明　氏（人類学者・秋田公立美術大学准教授）

今年度（平成29年度）は、「あきたで学ぶ。あきたで創る。」をテーマに取り組みを進めてきました。「夜楽」があきたを学び、「日常」を深める場とすれば、シンポジウムは新しい価値の創造に向け、「超日常」に気づき、将来のまちの姿を考える場と言えたと思います。

「辺縁と創造のネットワーク～地域芸術祭を超えて～」には、取り組みのスタンスを踏まえて幾つかの意味が込められています。「辺縁」には、地理的な視点から、私達が暮らす秋田市は日本海に面した「縁（エッジ）」という意味、また、社会的な視点からは、人口減少や少子高齢化など、地域社会の崖っぷちに立った時の課題、これからの地方都市の立ち位置という意味もあります。

そんな背景のもと、ゲストの方々からは、「未来に向けた可能性（未来予測）」のスタンスや、芸術を取り上げる意味とは何かなど、様々なキーワードをいただくことができました。

普段、私達が見ている世界を、アートを切り口にさらに想像して、新たな価値を創造する。言葉遊びのようですが、これから私達がまちに関わっていくスタンスを考える良い機会となりました。

地方都市にありがちな「自分のまちには何もない」という言葉。それを転換して「何もないと思う場所にある価値を考える」こと。そして、短期的な経済効果のみではなく、このまちに住む一人ひとりが精神の基礎体力をつけていくように、アートを通した体験の場をつくり、創造性豊かな楽しいまちをつくっていくというロードマップを思い描けたシンポジウムを振り返ります。

未来に向けた新しい可能性を考える（予測する）

芹沢高志さんは、数学や建築を学ぶ中で、エコロジカルプランニングに出会い、生態学やエコロジーの視点も組み込んだ土地利用計画を立てる「地域計画」を手がけられてきました。当時は、日本に環境アセスメントが導入され始めた時代だったので、環境影響予測という言葉を使っていたそうです。

その後、フリーになってから東京四谷の東長寺の４００年記念の新伽藍建設計画に関わった際に、現代文化に対して寺の空間を開放していく可能性などを考えるようになり、個人的にも「魅力的な風景にアートという芸術を持ち込んでいくことをしたい」と考えていたことから、地域で開かれる芸術祭のディレクターを務めることが多くなったとのことでした。

日常へのスパイス　閉じられた場所を開く　日常の中の深い体験
何もないと思う場所にある価値を考える

芹沢さんがこれまで関わった芸術祭のお話からも、感じることが多々ありました。北海道の帯広競馬場を会場に、風景の中にアーティストの作品を点在させていくやり方をしたことについて、「すごく良い服地を着ているんだけど、なかなか服地に目がいかない。そういうときに、柄を打つことによって、その服地の良さを感じることができる」という例え。日常に何らかのスパイスがあれば、超日常に気付いたり、日常の奥の深さに気付いたりするのでは、とすぐに感じられました。

横浜トリエンナーレでは、会場とした山下埠頭の倉庫がまだ市民が入れない場所であったことから、「アートの力でそれをこじ開ける」ことに関心があったそうです。昨今、期間限定の場所やイベントには人が集まりますが、まさに日常と隣り合わせの閉じられた場所を開くことで、新たな価値や風景を見せたのだと思いました。

そして大分県別府市の混浴温泉世界。これは、芹沢さん自身が土地の力、場所の力に惹かれて行ったのだそうです。地域の温泉銭湯が発達していることから、みんな生活の日常として温泉を使い、独特のコミュニティーをつくっている。そういう別府の姿を見て欲しいと思って、アーティストの作品をまちの中に点在させ、巡ってもらう形にしました。３回目の際は、ツアー形式だけで成立する芸術祭（アートゲートクルーズとベップ・秘密のナイトダンスツアー）として、ガイドがいろいろな場所の鍵を持って、普段閉まっている建物の中にある作品を見てもらうという、参加者に深い体験をしてもらうことをしました。これは、そのまちに暮らす人にとっても、「まちとの関わり」という視点からは非常にインパクトがあり、「自分は本当にまちを知っているのか」と感じる内容だったのではないかと思います。

一番最近は、さいたまトリエンナーレ２０１６のディレクターをされたそうですが、関わることを決めたきっかけが非常に印象的でした。知り合いのさいたま出身・在住の方々に「さいたまってどんなところ?」とお聞きしたところ、皆さんが即座に「何もない」。あまりに皆さんが何もないというので、それに興味を持って実際行ってみたら、「ある意味何でもある」と感じたのだそうです。「人はなぜ、何でもあるところを何もないと思うのか?」というのが動機になって、ディレクターを引き受け、生活の現場にどんどんアートを組み込んでいったとのことでした。住んでいるまちに「何もない」と思う心。それに対して「あるもの」を気付かせるきっかけをつくる。これはこれからの地域を考えていくにあたって、根底にしっかり意識すべきスタンスなのだと思いました。

入口の議論をとことん

芹沢さんがお話されたことで、もう一つ私達が考えさせられたことがあります。それは「今の秋田市の状況」です。全国様々な地域で展開されている芸術祭。秋田市も単純にこの流れに加わるのか？　という、今後に臨むスタンスを今一度見つめ直す言葉として受け止めました。「なんで芸術祭を開くのかということについて、とことん話し合い、納得しあってから進むべき。一番基本の部分の議論を最初に」ということです。昨年のシンポジウムにおいても「開催が目的ではない」という意見をいただいており、私達も「その先」を意識しながら検討してきたつもりでした。こうした言葉をいただき、様々な検討の結果が少しずつ結びつき始めた気がしました。

芸術を取り上げる意味を考える精神の基礎体力

また、入口の議論にあわせて、「芸術」を取り上げる意味も改めてしっかりと考えたいと思いました。私達（行政）は、やはり費用対効果がすぐに念頭に浮かびます。しかし、芹沢さんも「芸術には指標というものがないから、集客数とか動員数とか、どれくらいお金を生んだか（経済効果）が評価の基準になりやすいが、そういう短絡的な経済効果を求めるのが目的なら、わざわざ芸術を取り上げなくても良いでしょう」とお話されたように、芸術・文化を切り口にしたプロジェクトをやるその先に、何を見据えているかが大事なのだと思います。

10年、20年経った時に、自分の人生に深く関わってくる芸術の体験。個人個人の精神の基礎体力のように、これから生きていく時に、一人ひとりが持つ何らかの力に芸術を通して気付く機会をつくるプロジェクトにしたいと思いました。

《場所の精霊》に聞いてみる

私達が暮らしていく秋田市を「創造性豊かな楽しいまち」にしていくために、日常を知り、超日常に気付く機会をつくるとすれば、土地に根ざした文化やまちの歴史をより一層知る必要があると思います。そのヒントになると感じたのは「ゲニウス・ロキ」という言葉でした。「ゲニウス」とはその場所の精神みたいなもの。その場所に行ったときに、他とは違う何かの雰囲気を感じることを「ゲニウス・ロキ」というそうです。芹沢さんは、「地霊」とまでは言わないけれど、「場所の精霊」と言われました。

こうした視点からアートプロジェクトの意味を考えると、世界中同じ条件で同じ効果を得ることをテクノロジーの力を使ってつくり出そうとして、場所の精霊を封じ込めてきたのが「現代化」とすれば、アーティスト達の力を借りて、閉じ込められたその場所の力をもう一度外に取り出させる機能が、地域で展開されるアートにあると言えます。だからこそ、将来のまちの姿を想像し、芸術を通して私達が何らかの気付きを得て、今あるものの新しい価値や暮らしの中の豊かさを実感し、次の創造につながるよう取り組んでいきたいと思います。

アートによって世界を想像／創造する見えないものをアーティストが読み込み、場所にもたらすものを地域の人と共有する

次にお話してくださった原万希子さんは、平成29年春から秋田公立美術大学の国際交流アドバイザーをされており、今回はバンクーバーから2度目の秋田においでくださいました。奇しくも、お話のテーマは「アートによって海を越えた世界を想像／創造する」です。先の芹沢さんのお話から、私達が受け取ったメッセージと同じキーワードでした。

ご自分が関わられた「鳥取藝住祭」を例に、芸術を媒体に、新しい価値を地域の中に創造していこうとする試みについて、ヒントとなるお話をしてくださいました。鳥取も人口減少や高齢化、市街地の過疎化の進行などの問題を抱えています。したがって、アーティスト・イン・レジデンス型の取り組みを試験的にやってきたのですが、そうしたプロジェクトを通して地域特有の問題を考える場をつくっていって欲しいということで、関係者の熱意もあって関わり始めたそうです。

そうした過程で、市街地から離れた場所にある臨海公園を視察したとき、原さんの中で「場所の精霊」的なものを感じ、直感的にバンクーバーとの風景の類似性を手がかりに、芸術祭のコンセプトを立ち上げたとのことでした。二つの隔たった場所の類似性、ある種の原風景的なもの、その風景の中に存在しているものとして、人間、風土、歴史、場所の持つ力などをアーティストに提示することによって、場所の可能性を開いていけると思ったとのことです。

原さんの取り組みは海を越えた二つの場所が持つ、普遍的な時間の流れのようなものをアートを通じて共有することによって、世界、地球上で起きていることを海を通じて共有できることを見せたものですが、秋田においても、先人が積み重ねてきた文化があり、芸術がそれを引き出したり、場所の記憶を取り出すことで、根源的な原風景を私達が共有できるのではと感じました。芸術を通して、普段見えないものを想像し、新しい価値を創造していくということなのだと思います。

楽しみ方は人それぞれ。自由に楽しみ、その後の成果を想像する

後半は、ゲストの高堂さんと藤さんが加わってのトークです。

高堂さんは、「踊る。秋田」の実行委員長をされています。「踊る。秋田」は、見方を固定するとか、解釈を一つにするということは全くなく、老若男女に自由に楽しんでもらい、その姿を他の人達が「良い光景だな」と思ってくれるような関わりや理解が広がって欲しいと思って取り組んでいるそうです。こうした高堂さんの姿勢は、全てのイベントやプロジェクトに当てはまると感じます。実現したその後に、人のつながり、新しい関わりが残ると言えば良いのでしょうか。

現時点では、「踊る。秋田」の成果がどのような形になるかはわかりませんが、5年先、10年先に舞踏やパフォーミングアーツ、果ては秋田が生み出したものとして研究する人が出てきたり、どこかで才能を現してくれれば良いと思います。

すべてのことを楽しむことができる人が増えて欲しい

また、イベントを通して、面白い人達、すごい人達がたくさんいるということを実感されたそうです。イベントに参加する、お手伝いをしてくれる人を見ていて、何回もイベントに足を運んで楽しんだり、敢えてマイナス意見を言ってくれる人が秋田にもっといて欲しいなと感じたとのことでした。会場の方とのやりとりでも「すべてのものに関して、それを楽しむことのできる人達ができるだけ増えて欲しい」という言葉から、秋田にいて日常の全てを楽しもうとする高堂さんの姿勢が伝わってきました。こうした視点に気付けば、場所を問わず、まちを楽しめるようになるし、まちを楽しむ方が増えると、そうした場所にはさらに面白い人が集まってくると妄想させてくれるお話でした。

藤さんは、前半に原さんが話された、カナダの先住民の「7世代先の自分達の子孫が豊かに生きられるような場所を、自分達の時代に保守していかなければならない、作っていかなければならない」ということをキーワードに、広がりのあるお話をしてくれました。

まず、「7世代」と聞いたときにすごくリアリティーを感じたそうです。「7世代先」の視点と言えば、２００年先の視点。普通、私達は、２００年前の先人の生き方から受けた恩恵や知恵みたいなものをどう引き継いでいくのかと考えます。しかし、藤さんは、同じ「7世代」という時間の幅は、自分を基準に考えると3世代上と3世代下と捉えれば、ひいお爺さんからひ孫までとなり、実際に見ること（体験すること）が可能で、かつては同じ時代を過ごせたのではと受け止めたのでした。確かに私達の親世代くらいは、家庭や地域の中で、先の世代から自分達に、そして、自分達から下の世代に実際に引き継いでいたいろいろな経験や知恵が身近にあったように思います。

場所を開いていく 場所が経験していく

次にお話されたのは、人の営みの積層をどうやってつくっていくのか、そして、場所や土地が何を経験するのかということがすごく重要で、良質な経験を重ねていかなければいけない、ということでした。そういう意味では、秋田は使っていける場所を開拓しなければいけないし、場所がもっと経験を重ねていかなければいけないと感じているそうです。そういう仕組みが必要なんじゃないか、どのようにつくっていくのかという投げかけでもありました。この「仕組み」「フレーム」というものが、私達がつくろうとしているものなのだと思います。秋田のまちの「なにか」を開くことで、その場所が経験を重ねていく。いろいろな場所が経験を重ねていくとどんなまちになるのか。経験を積み重ねる機会としてのプロジェクトという考えもあると思いました。

未来の記憶をつくる

この後、ゲストの方々から、いろいろな切り口でお話をいただきました。その中で、私達の心に引っかかったものを幾つか拾い上げてみました。

今回検討してきた「(仮称) 芸術祭?」は、これまでの検討の過程で、私達も「将来のまちを見据えたアート・プロジェクト」として、その先にあるものを見据え、まちを知り、様々な気付きを得るプロジェクトに整理してきました。小さな取り組みであっても、いずれ将来のまちにつながっていく大きな動きになればいいと思っています。芹沢さんの「未来予想」の言葉に呼応して、高堂さんが「未来予想というのは未来の記憶だと思う」と言われました。未来の記憶をずっと持ち続けて暮らすこと。今は先行き不透明で、明日のこともわからないと考えてしまうと、今も未来も揺らぐのではないか。そうだとすれば、将来のまちの姿を想像して人や場所が経験を積み重ねていくことは、「新しい記憶」をつくっていくことなのだと思いました。

地域に縛られるのではなく、精神的な一つのテーマで結んでいく 年に1回など、日常からハレの日に切り替えることを楽しむことから始める

また、藤さんからは、「新屋の公立美術大学から少しずつポイントが広がり、小さい範囲でも良いから、大事な活動がつくられていく現場ができていくとか、つながっていく感じが必要という気がする」との発言があり、原さんからは、「ネットワークとよく言うけれど、今回の「(仮称) 芸術祭?」のように、行政が何か一つの文化構造や枠組みをつくる際、「秋田」というものを外して文化圏などの枠組みでアートのあり方みたいなのを考えると、それはやりにくい。多文化の世界をどのようにバランスを取っていったらいいのかとか、今までの構造的な枠組みもそれでいいのかとか、違う視点がどこかにないのか考えることが必要」との意見をいただきました。

地域に根ざした土着的な問題と飛躍的な視点がパラレルにあったら、全く違う考えに至るのではないかとの指摘は、まさにそのとおりだと思います。秋田市の文化政策の延長線、実現したいまちの姿があるとすれば、何年かに1回つながりながら、何かを一緒にやるハレの機会をつくり、それに向かって日常の活動を楽しみながらつながっていくというフレームを思い描くことができました。

改めて課題も見えつつ、素晴らしいヒントをゲストの方々からいただくことができたシンポジウムでした。行政として、文化政策、芸術政策が日常生活に根付くことをしっかり考える機会ともなりました。

シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク ～地域芸術祭を超えて～」ドキュメント

石倉敏明（以下、石倉）：今日のシンポジウムは「辺縁と創造のネットワーク～地域芸術祭を超えて～」というタイトルになっています。辺縁とは縁（へリ）という意味ですが、二つの意味を持っています。一つは日本海に面したこの秋田市という場所を表す言葉で、地理的にひとつのエッジになるということです。秋田公立美術大学では、辺境芸術と言ってますが、地域的に社会と自然が接している場所で、なにか新しいことができるのではないかと思っています。もうひとつは文字通り崖っぷちという意味で、人口減少や高齢化の問題、これから地方がどうなっていくのかというような社会的な課題も含めて考えていきたいと思っています。

さらに考えてみたいのは、海を越えた都市との関係です。日本海や太平洋沿岸の「辺縁都市」は、実は歴史的に、海を越えた別の国の「辺縁」と交易を行ってきました。「辺縁と創造のネットワーク」を考えることによって、これから国境を越えた新しいプロジェクトの可能性も探っていきたい。また、他の地域で行われた過去の芸術実践の事例とか、これから未来に向かってどのような新しい可能性があるのか、ということを考えていきたいと思います。最初にご講演いただくのが芹沢高志さんです。

芹沢さんは「P3 art and environment」というプロジェクトで、アートの世界で非常に新しい可能性を切り開き続けて来た方です。芹沢さん、よろしくお願いします。

芹沢高志（以下、芹沢）：私は芸大や美大で美術の勉強をし、この世界に入って来たのではありません。土地の利用の仕方を経済だけでなく、生態学、エコロジーなどに知見を組み込むべきという考えで、地域計画をやってきました。また、地球規模の環境問題とかの知識も動員して、未来予想をするということにも興味を持ってきました。そんな私に、東京の四谷にある東長寺という禅寺から、開創４００年記念に伽藍を新しくしたいので、新伽藍建設計画のプロジェクトチームに加わらないかという声がかかりました。もちろん建築としてどういうものをつくるかという話もあるんですが、できた後に何をするのかという話も考えなければならないという立場でした。

住職達と話をし、お寺というのは、亡くなった人を見ていくのも重要な仕事だけれど、それだけではなく、同じ時代を生きてる人達にお寺を開いていくことも、重要な営みじゃないかということに気付きました。そのために最初は境内を使おうと思ったのですが、境内は違う理由から池にしてしまったので、人が集まるのは難しくなった。そこでここを掘り抜いて、アンダーグラウンドの境内を提案しました。それで形の方はできたのですが、活動は誰がやるんだということになり、言い出しっぺということから私がやることになり、運営のために、P3というチームをつくりました。



石倉 敏明／人類学者 ※21頁を参照



芹沢 高志／アートディレクター、P3 art and environment 代表

１９５１年東京生まれ。神戸大学理学部、横浜国立大学工学部を卒業後、（株）リジオナル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。その後、東長寺（東京・四谷）の新伽藍建設計画に参加したことをきっかけに、89年にP3 art and environmentを開設し、様々なアートや環境関係のプロジェクトを展開。最近では、別府現代芸術フェスティバル２０１５「混浴温泉世界」総合ディレクター、「さいたまトリエンナーレ２０１６」ディレクターなどを務めたほか『この惑星を遊動する』（岩波書店）など、著書も多数を数える。

私自身は、もともと地域計画出身ということもあって、景色とか風景とか風土とかに関心があり、風景の中でアートを展開したいとずっと思ってきました。

私が最初にやった芸術祭は、北海道の帯広競馬場を使った「デメーテル」でした。レーストラックの奥に厩舎が広がっている場所があり、帯広の開拓時代のような風景が残っていました。そこを市民に歩いてほしいと思い、８組ほどのアーティストに声をかけ、競馬場の風景の中に、作品を点在させていくということをやりました。

その３年後に、「横浜トリエンナーレ」に、キュレーターとして加わることになりました。潮風や湿気があるなど、美術作品を展示する環境ではありませんでしたが、重要だったのは、ここは保全地区という指定があるため、普段は市民が入れない場所です。そこをアートの力でこじ開けてみるということでした。

そのあと、大分県別府市で「混浴温泉世界」と名付けたプロジェクトをトリエンナーレ形式で３回続けました。別府に関しては、土地の力というか場所の力に強く魅(ひ)かれました。とにかく掘ればお湯が出てくるというまちで、独特のコミュニティーをつくっている別府の姿を見てほしいと思って、作品をまちの中に点在させ、それらをめぐってもらう形にしました。同じような考えで２回目は別府タワーを使ったり、営業を終えたストリップ劇場を市民劇場に改修してコンテンポラリーのダンサーがショーをやったり、人通りが少なくなってしまった商店街を舞台にしてダンスをつくるとかしました。最後の３回目は、ツアー形式だけで成立する芸術祭をやってみました。お客は1回20人ぐらい。ガイドの登場の仕方もちょっとへんてこにして、ガイドがいろいろな場所の鍵を持って、別府のまちに皆さんをお連れしていくツアーにしました。鍵を開けて、いつもは入れない建物の中に入って作品を見てもらうのです。

去年（平成28年）は、さいたま市がトリエンナーレを始めたので、そのディレクターを引き受けるべきか少し迷い、15人ぐらいのさいたま出身の方や在住の方に、「さいたまってどんなとこ?」って聞くと、ほとんどの皆さんが即座に「何もない」というんです。そこにものすごく興味を持ちました。何もないところとはどんなところだろう? ところが行ってみると、何もないどころか、ある意味、何でもある。人は何で何でもあるところを何にもないと思うのか? その問いが動機になって、生活の現場にアートを組み込んでいこうと思い、全体の計画を立てていきました。

２０００年になってから始まった、ビエンナーレ、トリエンナーレ形式の芸術祭には、十勝のように1回で終わらせるもの、混浴温泉世界のように最初から3回と考えて終わらせたものもありますが、たいていは、まだ続いています。今年（平成29年）も北アルプスとか奥能登が始まりましたし、石巻の「Reborn-Art Festival」も続きます。

芸術祭というものに対して、いろいろな立場、いろいろな考えがあると思いますが、秋田市が今後そういうことを考えてみよう



「混浴温泉世界」ベップ・秘密のナイトダンスツアー（２０１５年８月）

という時期であれば、何で芸術祭を開くのかということについて、とことん話し合い、納得し合ってから進むべきだと思います。この一番の基本部分の議論をあまりされないうち芸術祭が進んでいくと、最後になって、あるいは何かうまくいかなくなったときに、ボタンの掛け違いがものすごく問題になっていきます。なぜ、わざわざ文化芸術を取り上げるのかを、一番入り口の、最初の時に議論しておかないと、最後の方でおかしなことになりかねません。

文化芸術に対する評価の指標というものがないのですから、集客数とか動員数とか、どれくらいお金を生んだとかが、評価の基準になりやすいです。そういう短期的な経済効果を求めるというのが目的なら、わざわざ芸術を取り上げなくてもいいでしょう。例えば、AKB48やピカチュウでも呼んできた方が、効果があると断言します。文化芸術、とりわけ芸術に関しては、即、何らかの効果が出てくるものではないと私は思っています。

10年とか20年経って、自分の人生に深く関わってくる芸術の体験というのは、実際にあると思います。芸術体験とは精神の基礎体力のような気がしてなりません。本当に困ったときとか、本当に生き抜いていこうと思ったときに、何らかの力になってくれると感じます。私は現在も、芸術を地域でやっていくことはとっても大事だと思っていますが、芸術祭という形を取るか取らないかは、根本的にみんなで話し合ったらいいと思います。

ここから先は芹沢個人の考え方です。「ゲニウス・ロキ」という言葉があります。その場所の精神みたいなこと。私自身は、「地霊」とまでは言わないけど、場所の精神、「場所の精霊」とは言ってみたい。まず、この場所の精霊に尋ねてみる。それが極めて大事です。我々は現代化という名のもとに、場所の精霊を封じ込めてきたと思います。それらを封じ込めることによって、我々はすごく便利になったけど、見失ったものも多くあるのではないかと思っています。

アートや芸術についてですが、芸術の「術」、「すべ」という字があります。漢文学者の白川静（しずか）の「字統」という辞書でこの字を引いてみると、呪力を持つ生き物を使って、十字路の真ん中で、自分達の旅の安全を祈っていく祭事とか呪術的なものを表していると彼は言っています。余談ですけれども、「道」という字は首を吊るして、旅の安全を祈った様子からつくられたものです。

とにかく芸術は、ある種の呪術性というか魔術性を持っていると思うので、場所の力が封じ込められていることに対して、現代だったらアーティスト達の力を借りて、その封じ込められた場所の力をもう一度解放させる機能が、地域で展開するアートにはあるんじゃないかと思って、いろいろな取り組みをしてきました。

石倉：ありがとうございます。最後に思いがけず「場所の精霊」という話題になりましたけれども、秋田市のアートプロジェクトでも、これまで何度か精霊という言葉が出てきました。「千秋公園の精霊たち」もそうですし、ココラボラトリーでの「精霊の学校」というレクチャーには私自身も関わらせていただきました。そういう意味では、目に見えない場所の可能性について、喚起力のある精霊という言葉、非常にぴったりなテーマを選んでいただいたように思います。

次にご講演いただくのは原万希子さんです。原さんは、現在カナダのバンクーバーに在住されております。今回は、「アートによって海を越えた世界を想像／創造する」というタイトルで、太平洋を越えて活動されているアーティストの紹介を、「鳥取藝住祭」のケーススタディーとしてお話をしていただきます。

原万希子（以下、原）：今日は、芸術祭をテーマにお話しますが、芸術祭というのはどういった効果があるのかという話の中で、アーティストがその場にインスピレーションを得て、何かが起こっていくというようなことが、秋田市の芸術祭を考えていくときの参考になればと思います。

私がかかわった「鳥取藝住祭」は、「藝術祭」ではなく「藝住祭」です。なぜ「住」っていう言葉を使っているかというと、テーマの中に「アーティスト・イン・レジデンスの概念を丁寧にとらえ直し、『芸術を媒体に、新しい価値を地域の中に創造していこうとする試み』」というサブタイトルがついているからです。

私自身、普段はカナダ西海岸のバンクーバーを拠点にしてますが、２０１３年までコンテンポラリー・アートセンターで、アジアのコンテンポラリーを紹介するチーフキュレーターをしてました。２００７年にその仕事に着任をしたことをきっかけにカナダに移住しましたので、今年でもう10年間、カナダを拠点にしています。

２０１３年にアートセンターを辞めて独立し、２０１４年に日本に1年間帰ってきて、横浜トリエンナーレと同時に開催された黄金町バザールという、アーティスト・イン・レジデンス型の国際フェスティバルのキュレーションをしました。その時に、別府の混浴温泉フェスティバルに関わっていた、初期のメンバーの林暁甫（はやしあきお）さんという方から、「原さん日本にいるんだったら、一緒に仕事をしませんか」ということでお声がけいただいたのが「鳥取藝住祭」です。この藝住祭は、鳥取県内の6市町で、独自の活動をしていたアートや劇団など11の団体が参加して、一つの大きな流れにしようということと、鳥取県が助成することによって、それぞれの団体がアーティスト・イン・レジデンス型の活動を促進していくという動きです。

なぜ藝住祭かというと、鳥取県はＩターンとかＵターン移住が非常に多いのですが、社会的な人口減少とか、市街地の過疎化、高齢化の問題を抱えています。もともと農業が盛んなところだったんですが、それも後継者がどんどんいなくなっていくなど、ほかの地域と共通する課題を抱えています。そういった場所で、芸術と住むことをテーマに、何か新しい、世代を超えた親密なつながりをつくっていくということがテーマになっていました。

私が呼ばれたのは、AIR475（エアヨナゴ）という米子市を拠点にしている建築の人達がやっているグループです。主催者である米子建築塾は、20代から60代ぐらいまでの建築関係の方々で、今回は建築の視点ではない、アートという広い視点でなにかをやっていきたいということと、参加団体の中でここだけ国際的なレジデンスをやっていきたいということで声をかけていただきました。



さいたまトリエンナーレ2016 目「Elemental Detection」（2016）
撮影・忽那光一郎
©さいたまトリエンナーレ実行委員会



原 万希子／コンテンポラリーアートキュレーター

１９６７年東京生まれ、バンクーバー在住。コンコルディア大学美術学部美術史修了。２００７年に国際現代アジアアートセンター Centre A のチーフキュレーター就任を機にカナダに移住、13年に独立。90年代よりカナダとアジアをつなぐアートプロジェクトを数多く手がける。最近の主なアートプロジェクトは、Scotia Bank Nuit Blanche（トロント、09）、鳥取藝住祭、AIR475 プロジェクト（米子市、14 - 16）『仮想のコミュニティー・アジア』黄金町バザール２０１４（横浜、14）など。17年春から秋田公立美術大学国際交流センター、アドバイザーに就任。

ただきました。

米子以外の地方都市でも同じような現象が起こっていると思いますけれども、米子はもともと、米子城があった城下町だったんですが、庶民の力が強くて、明治時代になってから、米子城を商人達がつぶしたのです。城下町だった形跡として、加茂川というカナル（運河）が残っていて、それが中海という汽水湖につながっていて、そこからさらに日本海につながっていくという構造になっています。市街地がかなりシャッター街になっていて、70年代ぐらいから、産業や時代が止まってしまったような印象を受けましたが、戦争で爆撃を受けなかったまちなので、古い建物があるなど、まちとしては魅力的です。

AIR475と一緒にやることの条件は、私とアーティストを招聘して、米子市内でアーティスト・イン・レジデンスのプロジェクトを実施し、サイト・スペシフィックな作品を制作展示して欲しい。プロジェクトを通して、地域特有の問題を考える場をつくっていって欲しいというのと、予算が300万円ぐらいと少ないということでした。とても小さな予算でしたが、皆さん凄く熱心に、何かをやっていきましょうという気持ちが強く、私もそういったことに胸を打たれて、やり始めました。

メンバーの方達と市街地を3日ぐらいかけて様々回った後、視察最後の日に米子市に隣接している中海という場所に行きました。中海は夕日が美しく、かつては「錦海（きんかい）」とも呼ばれ、夕焼けに赤く染まる場所でした。その後、干拓事業に失敗し汚染され、それを地元の人達が頑張って、臨海公園を整備したりしながら、少しづつ復活させていこうとしています。この公園は市街地からちょっと離れてますし、主催者の方々も、ここでなんかやってくださいという話ではなかったんですが、私の中では場所の精霊的なものというか、直感的にここととつながるんじゃないかなっていう印象を持ちました。また、この風景とカナダ西海岸の島々との類似性も直感的に重要だと感じ、これが手掛かりになると思ったのです。

そういった視察から「海によってつながる、時空を超えた場」のようなテーマが生まれ、それは米子とカナダという場所から拡大して、バンクーバーだけではなく、中海がもっている歴史とか、カナダが持っている歴史とかの、時間軸を超えたようなものでやりたい。この二つの隔った場所が類似性、同じような風景、風土を持っているということ。ある種の原風景的なもの、その風景の中に存在しているものとして、人間と海の関係、風土と歴史などをアートを通じて開いていくことができるのではないかと思いました。

私の立ち位置として、カナダと日本とのつながりを、Trans-Pacific、環太平洋圏の中で考えたい、ということがありました。特にバンクーバーという地域は、カナダの中でも一番アジアに近い場所です。環太平洋という動きの中に一つのつながりが見られるんではないか、ということを常々考えていたということがあります。また、カナダは今年、建国150年です。イギリスとフランスが入植してきて、カナダという国をつくりました。しかし、もともと住んでいたのは先住民族の人達です。その人達の文化を、近代現代の中では非常に野蛮な文化だとして、それを否定して近代化していった歴史があります。カナダでは2008年から先住民族の人々との和解調停が始まり、現在は彼らの文化が再考されています。

秋田にも独自の先住的な文化というものが非常に濃くあり、それらを芸術が引き出していったりとか、記憶を取り出していったりとか、そういったことに大きく先進的に、秋田公立美術大学は関わっていると思いますし。

私は、先住民的なものとして非常に興味があるのは、7世代先の自分達の子孫が豊かに生きられるような場所を、自分達の時代に保守し、つくっていかなければいけない、という話です。7世代先というのは、200年先ぐらいの視点のことです。それは200年前ぐらいの生き方から受けた恩恵や知恵みたいなものを、7世代先にどうやって引き継げるのか、というような視点が動いていると思います。

鳥取のフェスティバルに参加したシンディ望月さん（以下、シンディさん）というアーティストがいます。シンディさんは非常に面白いアーティストで、バンクーバーをベースにしているカー人、やはりバンクーバーをベースにしているカーン・リーさんがいます。20歳ぐらいの時に韓国からカナダに移住した、韓国系カナダ人アーティストです。彼の「ハート&アロー」という作品は、60センチ角ぐらいのアイスキューブを冬の日の出前から、日が昇るまでの1時間15分ぐらいの時間、ずっとノミで削ってダイヤモンドの形にしていくというビデオ作品です。ダイヤモンドを置いている後ろから日が昇ってだんだん光が入ってきて、日の出になると、太陽がダイヤモンドを通じてぱぁっと真っ白になるという、光の変化を見ていく作品です。これを、中海が錦海という状態になる日没時に合わせて上映しました。この日は見事に晴れ、ちょっと体験したことのないような1時間15分になりました。

私達は具体的な解決策は出せませんが、このようにアートを通じて、バンクーバーで起こっている日が昇って日が落ちていくというような一つの流れの営みと、この場所でも同じように起こっている、非常に不変的な時間の流れみたいなものを共有することで、地球上で起きていることを、海を通じて共有できることを見せていくことによって、なにか閃ければいいなと思いました。

シンディさんには、新しい作品をつくってほしいとお願いしました。鳥取県からカナダへの移民や、中海の遊覧船の船頭さんの話などをきっかけに、米子市（よなごし）からカナダへ移民して成功した磯島さんという方が、かつて中海の島にあったとされる料亭に時代を超えてやってくるという「Paper」というフィクション作品を書いて、ラジオドラマにしました。そして、中海の遊覧船に乗って、そのドラマと船頭さんの話を聞く、というツアーを組みました。この作品は、様々な偶然の出会いや気付きによってつくられています。

鳥取の弓ヶ浜からカナダの西海岸に渡った移民の歴史や謎の料亭の話など、それらをシンディさんは、「CALLING＝お導き」とよんでいます。アートというのは、ある種のフィクショナルなものをつくるわけですが、それを芸術の場所に置いたときに対比というか、一つの場所がパラレルな空間になっていくというか、そのような効果があるということですね。そしてこの作品は、





中海（錦海）での「ハート&アロー」



料亭「たつみ」があった萱島

「Rock.Paper.Scissors」という3部作になりました。これは、じゃんけんぽんということで、ロックが石で石炭などの鉱業、ペーパーが紙で林業、シーザーがはさみで鉄鋼業に関わり、この三つは、開拓移民の人達が北米に渡ったときに就けた、自然の資源を使った主な仕事ということをテーマにした作品です。

これがシンディさんが作品をつくっていくときの一つのプロセスで、大きな意味で海と海を越えたものをつなげながら、その場でいろんなものと偶然に起こっていく発見とか出会いとかいうものを、シンディさん自身CALLINGとして、それらを題材にアートをつくっていくということで、こういう「Rock.Paper.Scissors」という作品をつくって、今年の春にカナダの日系博物館で展示しました。それを米子市美術館に２０１８年2月に持ってきます。

直感的に感じた風景の類似性とかは、もしかしたら、米子とバンクーバーに限らず、どこにでも原風景としてあるものかもしれません。そこから何を読み込むか、見えないものの言葉の地場みたいなものを、どうやってアーティストが読み込んで、そしてそこに何をもたらして、それをどういうふうにして地元の人達と共有していくかという、一つの例としてお見せしたいと思いました。

石倉：ありがとうございました。米子という土地に関わりながら、個人的な召喚（CALLING）の体験をベースに世界性を持った作品をつくり上げていくシンディさんのプロジェクトがよくわかる発表でしたね。シンディさんは先日、秋田でも一緒に調査をさせていただきましたので、これからつくられる新しい作品も大変楽しみです。

ところで、前半の芹沢さんのお話にも、場所や土地の精霊というお話がありました（86頁13行目から参照）。これは現代のわれわれが生きている歴史的な時間と関わりのあることで、同時にまだ実現されていないクリエイティビティーにとっても重要な問題です。その地域の具体的な歴史や記憶というものが、とても強力な制作の動機や手段にもなるし、一つの芸術的な文脈をつくり出す契機にもなるということだと思います。

芹沢さんと原さんからたくさんのヒントをいただきました。その中でキーワードと言いますか、これから考えなければいけないポイントがたくさん出てきたと思います。これからは、前半の発表への感想や反応も含めながら、さらに論点を深めたいと思います。

まず、高堂さんから、よろしいですか？

高堂裕（以下、高堂）：私は「踊る。秋田」の実行委員長という形で、ここに呼ばれております。

日本という弧状列島は、昔からあった訳です。平安時代の初めに渤海国から秋田に流れ着いた一団のことを都に報告すると、即座に「丁寧に扱え」と言われたそうです。それは、渤海国がその２００年ぐらい前に、日本と一緒に中国と朝鮮半島の合同軍と戦った歴史があったからです。その人達の末裔が渤海国をつくったということを、電話も、メールもない時代の人達が、知識として知っていたということは、すごく面白いなと思っています。歴史というのはややこしいようですが、そうではなくて、本当にその場所なんですね、記憶みたいなものの積み重ねだろうと。



高堂 裕／「踊る。秋田２０１７」実行委員会委員長

１９４８年秋田市生まれ。明治学院大学仏文科満期退学。秋田市大町で地ビール醸造販売を行う（株）あくら代表取締役。秋田市大町商店街振興組合理事長。文政12年に始まった「感恩講」評議員。万延元年創業清酒「程よし」の醸造を家業としていた高堂家6代目として、清酒「高清水」の経営にも参加。趣味として能楽と多方面の読書を楽しみ、その蔵書数は膨大なものとなっている。

先ほど、芹沢さんのお話の中に「道」と言う字のお話がありましたが、本当にそうなんですよね（86頁19行目から参照）。戦の進軍や凱旋の折に、敵方勇者のマナ（霊力）宿る首を路の両側に置いて、その力を自分達の力として行進してゆくということがあったんだと。中国の饅頭の頭に赤い点が付いている由来に、諸葛孔明が、それまでの倣いとしての首を積んで戦勝祈願する風習を饅頭にした、だから狩った首の証としての血の色があり、饅頭の別字に万頭がある、などと言う面白い話がありますが、この三国志の蜀（しょく）などよりかなり古い時代からの長江（揚子江）流域のあたりが、黄河文明と肩を並べる文明地域でした。仮説ではありますが「倭族（わぞく）」の繁栄した故郷であり、そして三星堆遺跡で脚光を浴びた四川盆地、さらにその奥のチベット高原を源とする二つの大河が長江とメコン川ですね。

メコンの流域には首狩りの習俗があって、その河口の果てにはジャワ海を経て、首狩りの奇習で有名なパプアニューギニアがあります。この広大な地政と歴史の中にそれぞれの文明風俗の伝播があり、様々の時代に北に流れたどん詰まりの一つが、やがて日本と呼ばれる弧状列島である訳です。我が国の、戦における首狩り、田んぼの四辺に毀損した埴輪頭部を埋める習俗、鳥居、蛇と実り等々、ルーツとは申しませんが、何らかの共通する信仰文化があったと思います。じゃあ秋田はどうなんだとなりますね。

私の先祖は、江戸宝暦（１７５１～１７６１）のころ秋田に住み着いた、富山の薬売りです。ですから、大昔の秋田（出羽）と大陸からの船は、多く日本海のどこかに漂着します。平安時代の毛皮交易文化の仕掛け人であった渤海使が多く上陸したのは出羽の国でしたし、それ以前もそれ以後の交易の多くも、実証されているより遙かに多くが日本海沿いに興っていたことは想像に難くありません。うまく説明できないのですが、大陸南方へ開いた心もちのようなもの、祭りや季節のしきたりへの関わり方や感じ方の中に、小さな私個人と壮大な時間と空間のありようが共感し合う感じがすることがあるんです。そんなことをとても面白く思っております。

もう一つ、アートっていうのは、技術でもあるし、技でもあるわけですけれど、つくる人と、それを楽しむ人と、江戸時代でいえば、施主と職人さんと二つあった訳ですね。両方いなければ駄目だったんです。芝居でもなんでもなんでもそうですが、やる人と見る人が両方必要です。

私はよく言うんですが、見る人の形質や質や悪口というものがなければうまくなれない。ミーハーのただ単に褒めそやす、綺麗だからと言って褒めそやす、立派だからと言って拍手をするだけではだめで、鋭いことを言う人がいつでも必ずいて、「ふん」と言って若い連中達のことを、役者を鼻で笑う人達がいたものです。そういうふうなものも一緒にあわせて、一つの大きな世界をつくっていく。歌舞伎なら歌舞伎の世界をつくっていく、能の世界でもそうですし、おそらく今の芸能の世界もそうなんだと思います。これは、世界中きっとそうだったんだろうと思います。

それをもう一度秋田でなんとかならないかと考えています。「踊る。秋田」というのをやっていても、面白い人達、すごい人達



「踊る。秋田２０１６」
大駱駝艦公演「ムシノホシ」

がたくさんいらっしゃいます。そういうものに参加する、お手伝いをしてくれる人をみて、何回も見て楽しんだり、マイナス意見を言ってくださる人達がもっともっと秋田に欲しいなというのが、一番の思いです。

石倉：高堂さんのルーツはもともと富山県にあったということでしたけれども、秋田県は北前船の寄港地でもあり、特に秋田市には加賀屋さんとか佐渡屋さんという名前も多くて、日本海沿いの移住が大変盛んだった地域でもありますよね。

また、秋田全体の特徴として、古いものと新しいものが重なり合っているという特徴があります。そういった意味も含めて、秋田市のアートプロジェクトでは、「時間のレイヤー（積層）」をめぐるという意味で、「時層の旅人」というタイトルをつけていましたが、そういった地域性も関係あるのかなとも思いました。お話の中で、たまたまパプアニューギニアの首狩りの話がありましたけれども、そのパプアニューギニアに行かれた藤浩志さんは、どのようにお聞きになりましたか？

藤浩志（以下、藤）：さっきの原さんの話で、ちょっと面白いなって思ったのが、先住民が7世代っていう話をされていたのが、すごくリアリティーがあるんですよ（89頁4行目から参照）。7世代っていうのは、自分を基準に考えると、3世代上と3世代下じゃないですか。200年というとすごく遠い世界に思えるけど、3世代上ってことは、ひい爺ちゃんですし、ひい婆ちゃんです。下にいくとひ孫ですよね。子ども、孫、ひ孫まで、これって実際に見れるんですよね。

芹沢さんの話でも、そのキーワードとして面白いと思ったのは、「ゲニウス・ロキ」、それを近代が封じ込めてきたっていう話をしてましたね（86頁13行目から参照）。父親世代達がやってきた封じ込め作戦。戦争っていう非常につらいものがあったかと思うんですけれども、なんでこんなに塗り込め、記憶を消そうとしているのか、ということに対する違和感と、その反発ってすごくあったと思います。そして、その塗り込められた僕らは何やってんのかと思うと、どうもその塗り込められた近代の隙間を、こじ開けているような感じがするんですよ。

芹沢さんが重要なことをおっしゃっていました。地域計画は80年代の後半ぐらいから、生態学的ということを考えていて、その先にある未来予想をしていく視点と、生態学的にその地域がつくられていくという視点（84頁12行目から参照）、これはまさに、暴力的に何かを持ってきて、未来のビジョンをあえて無理やり描き、そこで何かをボーンとつくるのではなく、活動がどういうふうに地域と関係を持ちながら、その環境をつくっていくのかに近い重要な視点だと思っていました。

そういう意味でいうと、さっきの知恵の話で人の営みの積層だと思いますが、それぞれの時代の何世代もあとの積層や、さらに次の積層をどういうふうにつくっていくのかという感じだと思うんです。そのためには、こじ開けなければいけない部分もあるかもしれないし、なにかもっと深めなきゃいけない部分もあるかもしれない。場や土地が経験していくこと、その土地が何を経験するかがすごく重要で、良質の経験というか、ここにすごく大事な経験というのを重ねていかなきゃいけない。そういうのを僕としては、いろんな立場でいろんな形に関わりながら、なにか面白い状況をどうつくればいいのかとか、次の活動がどういう面白い人達とできるのかとか、そういうことを考えながら、点々と巡ってます。

さっきシンディさんの話など聞いていても、せっかく来てもらっているから作品を見たいのに、秋田でそういう展示ができない、できる環境にないんです。なぜかというと、近代に塗り込められているからだと思うんです。コーディネーターがいない、でも場所はあるんですよ。古い家もあるし、使われなくなった施設もあるけど、そこをこじ開けようとするコーディネーターが不足しているのと、そうしようとする意識や意思がない。もしかしたら、そこに邪魔をする人達がいるのかもしれない。

美術大学ができて5年経ち、大学院もできて1年経ちます。大学には作家がいっぱいいますが、秋田県外でばっかり展示しています。秋田でやってくれって言われてもできないんです。だって、場所がないし、やってくれる人がいないし、もったいないなと思うんですよ。それをやるには、コーディネーターを育てなければならないし、使っていける場所を開拓しなければいけない。そういう意味で、場所がもっと経験を重ねていかなければならない感じになってきていると思いますね。

ここで新しい活動をどうつくっていくのか。美大には、デザインも含めて、新しい価値をここでつくろうとしている人達が学んでいます。ところが、秋田でそのまま活動できればいいんだけど、活動する状況がないかもしれないですよね。みんなほかに行っちゃうんですよ。鳥取に行くし、僕は新潟の「水と土の芸術祭」に誘われ、コーディネートすることになっていますが、他の地域で活動しなければならない。それはもったいないと思うし、どういう人達が、どういう形で活動できる状況をつくっていくのかということが大事だし、逆にどこをこじ開けていくのか、どういうふうに次の積層を作っていくのか、もしくは、どういうふうに次に積層を読んでいくのかということを、もっとやっていくような感じの仕組みが必要なんじゃないかと今、思っています。

石倉：僕は5年前、美大ができた年に秋田市に移住したのですが、その時に、鴻池朋子（こうのいけ ともこ）さんが秋田市のアートプロジェクトで、「東北を開く神話」というたくさんの市民作家を集めた面白い展覧会をやっていました。これは、秋田県全域の古い地名や、近代に塗り込められたものを掘り起こし開いていくという斬新なプロジェクトでした。非常に感銘を受けた展示でしたが、会場となった旧県立美術館でできていたことが、新しい美術館ではできなくなってしまっています。何を開いていかなければならないのかというのは未だに宿題ですし、秋田市の問題としては、古い建築を壊してしまったり、古い伝統やルーツをあまり問わないままイベント化してしまったり、なにか一過性のものにしてしまったりというような弱みもあるのではないかなと思います。

藤さんから、生態学的地域計画というのは、非常に大事な概念じゃないかという話がありましたし（92頁18行目から参照）。高堂さんのお話の中にも、地域の社会的な生態系に関わるトピックがありました。芹沢さんは改めて現在の視点から、「エコロジー（生態学）」をどんなふうに考えていらっしゃいますか？



藤浩志／美術家・プロジェクトディレクター
1960年鹿児島県生まれ。秋田公立美術大学副学長。京都市立芸術大学在学中、京都情報社を設立。同大学院修了後、パプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。国際展やアートプロジェクトの現場で地域資源・適正技術・協力関係を活かした活動を実践。NPO法人プラスアーツ副理事長、十和田奥入瀬芸術祭ディレクター、十和田市立現代美術館館長を経て現職。



あきたアートプロジェクト
「東北を開く神話」展示作品
アースベイビー（鴻池朋子）

芹沢：エコロジーとか生態学、もっと広く言えば、生き物の視点はすごく重要です。地球に生命が生まれて38億年くらいでしょうか？　生命は、今の私達のようになろうと最初から計画して進化してきたわけじゃない。いろんな生きものとか、物理化学的な環境と相互作用しながら、ゆらゆらと、だましあったり協調したりしながらここまでやってきました。私は生命の創発的な進化の歴史に習うことが多いのですが、特に生態系の発生や進化、振る舞いは参考になります。いろんなプレイヤーが関わって、1人だけが勝つなんてことはありえません。

蔡國強（ツァイ・グオチャン）という中国人のアーティストが、生態系があるんだから、文化の態系、文態系という考えがあってもいいじゃないかと言っていました。中国人的だなあと思いましたが、そもそも、私達の営みを抜きにした生態系というのはない。私達も生態系の一員です。植物とか動物とか地下水だけじゃなくて、人間の営みとか歴史とか働きかけとか全部ひっくるめた視座として、文態系という概念を彼は言っているんでしょう。

言葉はともかく、私達の営みと独立したものとして、生態系を捉えるのは片手落ちだと思います。私達も生き物であり、当然、生態系の一員です。同じ言葉でも、ものの見方によってずいぶん違うことになってしまうから、そこに十分な注意を払いさえすれば、生態学的なアプローチというのは、間違っていないんじゃないかと思います。

石倉：「エコロジー（生態学）」という言葉を創造したのはドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルですが、この概念は現代哲学や人類学、アートの世界を結ぶ非常に重要なラインとなっています。たとえばフェリックス・ガタリというフランスの哲学者が「三つのエコロジー」という本を書いているのですが、そのうちの一つめは「自然のエコロジー」、二つめは「社会のエコロジー」、三つめが「精神のエコロジー」です。おそらく、精神の基礎体力をつくるというのは、自然や社会の秩序に関わってくると思いますし、ガタリ自身は、とりわけ芸術に関わる問題として、新しい主観性、価値を創造していくのは、三つめの「精神のエコロジー」の働きだと言っています。この複合的な三つのエコロジーという概念は、アートプロジェクトをやっていく上で、とても大事なことだと思いますし、未来予測をする上で、欠かせないポイントだと思います。

先ほど原さんの講演の中で「7世代先を予測する」というお話をされましたが（89頁4行目から参照）、こうしたアメリカ大陸の先住民の知恵は、自然・社会・精神という三つのエコロジーが重なるところで受け継がれてきました。先住民の社会に、他の地域から移民が到来したときにどうやって受け入れていくか、という問題も社会のエコロジーに関わります。原さんはバンクーバーという地域社会で、先住民と移民の問題に身近に触れていらっしゃると思いますが、異文化が混ざり合うことについてどのようにお考えですか？

原：移住者は、どこの都市にもたくさんいると思うし、日本でも、世界的にも、実は大きな流れで人々は動いています。この地域は移住者が少ないとか言ったとしても、流れとして、人はいろんなところに動いていけるので、混ざっていってるわけですよね。



人間は今より広く、今よりさらにいい場所を目指して動いていくわけです。今はかなり加速した動きが世界中に起こってると思います。それと秋田がどう関わるかは私にはわかりませんが、海外から秋田への移住者というのは、どんな感じなんですか。

石倉：今年、美大の大学院生もリサーチしているのですが、秋田県の在留外国人は3800人程度で、日本の都道府県では一番少ないそうです。3000人台の人口規模というと、秋田県内の一番小さな市町村がそのくらいです。逆に言えば、ギリギリ一つの自治体になるぐらいの外国人がいるということですね。バンクーバーとはだいぶ違うとは思うんですが、対比的に見た時に、秋田の特徴というのが見えてくると思いますし、実は複数の集団が共存しているということも一つの特徴だと思います。

秋田の古代史を考えてみても、狩猟採集生活を送るグループがすぐに稲作中心の定住生活になじんだかというと、そうではないようです。秋田の先住民は何百年もかけて、日本という国に組み込まれました。その時には、蝦夷（えみし）と呼ばれている先住民のグループと、俘囚（ふしゅう）と呼ばれる大和朝廷側に着いたグループとが、「斑（まだら）状」に存在していたと言われます。このように、たくさんの違うグループが共存しているということ、それがもしかしたら秋田の特徴かなと思います。

現代の秋田にも、アート関係のグループがいくつか共存していて、土方巽（ひじかた たつみ）の研究だけでもグループが二つも三つもあったりして、「斑状」に混じり合わないところも面白いと思います。

高堂：いつの時代でも、どんなところでも、一色になることはおそらくなかったと思います。違って当たり前ですし、一つのまとまりをつくったときに、同じ中に考え方の違う人や、毛色の変わった人や、理解できない人がいても、一つの国の中にあるという連帯感、グループ感みたいなものを持ち得て、初めて自治体が健全に動いていくんだろうと思っていました。それが、かなりの色合いで同じ方向に向けば、たとえば江戸時代の初めのころみたいに立派な城下町ができたり、あるいはヨーロッパでものすごい建築ができるのは、そういう時なのかなと思ったりします。残念ながら民主主義になると大きな建物は建たなかったんではないかと思い、矛盾を感じたりしてるんですけれども。

秋田だと、別に外国から人が来なくても、明日の暮らしもまあいいかなと思ったりするところが、いまだ残っている気がします。港に大きな船が着いて、外国人がまちの中に出てくると、なんとなく目線を合わせないようにするとか、後ろ向いて仕事する人も結構いらっしゃいます。向こうは知りたいと思っているし、こっちだって仲良くなりたいなと思ってるわけだから語り合えばいい。流ちょうな英語も、流ちょうな中国語も知らなくても、一向にかまいません。私なんか外国に行って、何も知らないけど、なんとか楽しくなれるのと同じです。大昔でも同じようなことがきっとあったと思うんですが、それを乗り越えてきたわけです。

石倉：高堂さんのお話には、秋田を俯瞰的に見る視点と、その地域の内側から見る内在的な視点の二つが含まれているというように感じます。お祭りの記憶をたどっていくと、いまは消えてしまった様々な習慣がよみがえったり、あるいは港から来た異人に対して、秋田の人々がどんなふうに感じていたのか、といった具体的な情景が目に浮かびます。



藤さんがおっしゃったのは、近代が埋めてしまったものをどうやってまたこじ開けたり、開いたりするのかということがあると思います。芸術を通じて何かを行えば社会のためになり、観客動員数や観光で役に立つとか、町おこしや人口を増やすみたいなことと言われるんですが、それよりももう少し繊細なことが、例えば「踊る。秋田」を通して、あるいは、秋田でいろんなことをやっているグループを通して問われてきたし、これからも問われなければならないと思います。

藤さん、この数年間秋田で暮らしてみて、可能性とか難しいポイントとか、どういうふうに感じていらっしゃるんでしょうか？

藤：よく話をするのが、結局、手かせ足かせという束縛ですね。近代美術という束縛からいかに解放するか。僕は美術大学を出ているので、その束縛を受けてきたような気がします。地域の中にそういう強いものがあったりとか、ずっとつくってきた権威構造があったりして、その中で抑圧を受けたり、その中で動かなければならない人達というのは、やっぱりいるわけです。

僕、秋田の美大に来て、なんと自由なのかと思いました。学生が何の束縛も受けてない気がするし、自由であり、悩んでいながら、これから何かをつくっていく時に、その一方で秋田は保守的で、なかなか自由になれないことが、たくさんあると感じています。その辺の重石や束縛をどう解き放っていくのかがすごく重要です。そのような中、本当に力強く秋田で動いてる人達がいますから、そういったことが、ちゃんとつながっていくというのがいいと感じています。

社会のためにみたいなこと、作家とかアーティストはたぶん誰も考えていないんですが、新屋にある美術大学から少しずつポイントが広がっていくとか、本当に大事な活動がちゃんとつくれていく現場が、小さい範囲でもいいので、いろいろできていくとか。秋田の駅前も、すごくいい景観デザインの先生達、学生達により、だんだんと良くなってきていますね。そういうポイントが少しずつ広がっていく感じが、去年、一昨年と発酵し、醸造して、だんだんつながっていく感じが必要だという気がします。

そういう意味で言うと、場所を見つけ、その積層を見ながら、精霊や地霊の声を聞き、感じながら、本当に大事な活動というものを行っていく。大事な活動をきちんとやってる人達が、「斑状」にいるというのがすごくいいですね。その人達は頑固で、多分周りと混ざるといろんな危険な状態になるので、頑なに守り続けていると感じています。ビール造ってたりとか、おいしい日本酒を造ってたりとか、頑なに守り続けていきながら、きちんとつながっていく土壌になっていくのかもしれません。そこには可能性があるでしょう。

石倉：カナダから北米・南米にかけて広大な地域に暮らしていたインディアンの社会の特徴は、長い期間「国家を持たなかった」というところにあります。五大湖周辺のイロコイ連邦も連合はつくったけれど、王様は出さなかった。それは国家をつくると危ないことになるということを、本能的に分かっていたからだと思います。

彼らはある意味では「斑状」であり続けたわけです。ただ、カナダの面白いところは、たくさんの異なる価値観を持ったグループが共存していることで、たとえば先住民と植民者の和解政策とか、性的な少数者（LGBT）や民族的なマイノリティーの人達も、きちんと暮らしていけるような政策が進んでいます。そのあたり、日本は少し見習わなければならない点ですね。

原：いろんなものと根底的につながるネットワークって言葉がよく出てきますね。それと芸術祭や国際展が必要かという話とか。芸術祭を考えた時に、まさにそういった国をつくらないみたいなのとつながりませんか。秋田市や秋田県という自治体が、お金を出して何かをやっていくという、一つの文化の構造や枠組みだと思うんですけど、秋田というものをはずして、東北学とか、生態系的に文化圏を共有するものとか、そういった枠組みでアートの在り方を考えると、それはすごくやりにくいと思います。

秋田公立美術大学とか、皆さんそれぞれのネットワークが、ここにボンとできたことで、もしかしたら、日本社会とかを飛び越えたネットワークが、ありうるんではないかと。オーガニックな、地球生態的な構造として、芸術というもののありかたを、秋田とつなげていく考え方とかできるんじゃないかなと。土着的な問題と飛躍的な視点というものが、一緒にパラレルにあったら、全然違う考え方にいくんじゃないかなと、皆さんのお話を聞いていて思いました。

石倉：すばらしいヒントだと思います。秋田市では、何でも「秋田」という行政区の括りでまとめたり、閉じたりしてしまいがちですが、実は東北の古い文化は国境を越えて互いに影響をあたえあってきました。秋田市という地域だけを考えても、実は渤海国とつながった時代があったり、他の地域と北前船でつながっていたりしました。

僕は秋田市のメンタリティーは開かれていると思うし、だからこそ、美術大学でもカナダのバンクーバーや台湾、ヨーロッパや東南アジアとも国際的な交流を行おうとしています。これは、環日本海・環太平洋の広大なネットワークの中に、もともとこの地域が位置づけられてきたという歴史とも関係しています。

藤：実際にいろんな地域をつなげるという芸術祭も出てきてますし、国を越えてっていうのも、もちろんあります。地域に縛る、もしくは地域に縛られるというのから外れて、精神のエコロジーみたいなものとかが一つのテーマになって、それはそれでいろんな拠点を結んでいくみたいな感じの。日常的に本来やっていくべき、秋田市の一つの文化政策として、もしくは、アンダーテイクとしてその延長の中にあって、お祭り的なことをやることが必要なのかどうかもあるけれど、そうやって何年かに1回つながりながら、やっていこうという一つの機会をつくって、それに向かって地道にいろんな活動がされている、そういうフレームのつくり方っていうのはあるんだろうと思いますね。

石倉：たしかに、お祭りって言うとそれに向けてやらなければならないことがあります。お金をためて散在して、消費モードに入ったりする。もう一つの問題点は、先ほどから何度も言ってきてますけれども、観客数というものに縛られたり、目に見える指標として、どれくらいお金が使われ、どれくらい人が来たのか、という数値の縛りが必ず出てきてしまうと思うんです。それについては、いろんなことが言われていると思いますが、基本的には「数えられないもの」の質を担保する、ということを忘れてはいけないと思います。土地の精霊って数えられないですよね。目に見えないものだから。





藤：目に見えないから、圧力が感じられ、なんか精霊が濃いぞ、みたいな濃度で測ったりして。そういう意味では、別の指標をつくらなければいけない。

石倉：芸術祭はたいてい民族的な祭事が衰退しつつある地域に導入されていますが、代替を目指すかぎり、失敗してしまうことが多いのも事実です。「地域芸術祭」というお決まりのフォーマットの次を考えるという意味では、芹沢さんが紹介したツアー型のプロジェクトや長期滞在型の制作プロジェクトもそうですし、新しい形の芸術体験も導入する余地があるのかなと。

藤：芸術祭で広報とか、人が来るかという人員の問題は、広報費にどれだけお金をかけるかみたいな話なんです。展覧会もそうですけど、実態の予算より、はるかに多い予算をかけてやらないと、実際にお客さんが来ません。お客さんがたくさん来ると、入場収入が増えるんだけど、本当にそういうサイクルでやっていいのかということです。そうじゃなくて、実績に何がつながっていったとか、そういう指標の出し方が、最近はいろいろと研究もされているし、そういう見方もあるんじゃないかと思います。ただね、誰も来ないと寂しいんですよ。これは、本当に。

僕は〝水の人〟という言い方をよくしています。何かが育つためには適正な水分が必要で、それが興味関心だという言い方をしています。どんなにつまんない活動でも、横で「面白いなあ」と言ってくれる人がいると活動が続くし、誰も見向きしない、誰も興味や関心をそそられなかったらつぶれていきます。ところが、水が大量に来はじめると洪水になります。「瀬戸内国際芸術祭」を豊島で開催したときに、何万人ぐらいのときはよかったんだけど、何十万人と来てしまい、島に観客があふれて島がどうなるんだみたいな。島がどれぐらいの規模を求めているのかということは、コントロールしなきゃいけないと思います。

石倉：今回の講演とディスカッションを聞いて、参加者の皆さんはアートの世界というものが単なる作品の鑑賞に留まらない、または地域のにぎわいづくりや見世物的な体験だけではない、多くの可能性に開かれているということがわかっていただけたのではないかと思います。何か体験をする上で、どういう環境をつくるのかというエコロジカルプランニング、生態的な地域計画が、実はアートにとってとても大事だということが、今日の流れを通じて見えてきたような気がします。芸術祭というテーマが浮上してきていますけれども、新しいモードをつくるには、おそらくそういった思想的な突破口から地域を普遍性に向けて開いていくことが必要になってくるでしょう。

それでは、そろそろ残り時間が少なくなってまいりましたので、後は会場とのコミュニケーションに当てたいと思います。どのゲストに対する質問でも構いませんので、会場のほうから質問があれば、お受けしたいと思います。

会場からの質問者：秋田市が芸術祭みたいなものをやろうとしている前提があって、本当にそれでいいのか、やるとしたらどういう形があるんだろうと問うときに、実は失敗談というものはすごく得るものがあると思っています。海外のグローバルなアートの世界で活躍している人を呼んできて、いわゆる国際展みたいなものだったり、あるいは、地域の文化や、地域の持ってるものを掘り起こした、地域の価値みたいなものにフォーカスしたアートプロジェクトみたいなものに、なんとなく二分化される印象がありますが、そうではない在り方、あるいは、その先の在り方がないものかと。

芹沢さん、原さん、今日紹介されたプロジェクトじゃなくても、ここがこうできたらよかったみたいなことと、あとは、典型的な芸術祭じゃない芸術祭のヒントってどういうところにあるんだということを、お聞きかせいただければうれしいなと思います。

芹沢：芸術祭というのは多層的なもので、アートの中身だけでことはすみません。さいたまの話ですが、政治、あるいは行政のダイナミックスが、ある段階で噛み合わなくなったときにどういうことが起こるのか、この歳になって、現場で見られたのは、とてもいい勉強になりました。

それから、さっきから生態学の話が出てきていますが、芸術祭をどういう範囲で考えるのかということも重要ではないかと思います。国とか県とか市という行政区分だけで芸術祭を考えていいのかどうか。そうじゃないとお金がついて来なかったりというのがありますが、もっとエコロジカルな地理的ユニットで考えてみる必要もあるのではないでしょうか。

原：構造上、アーティストは、年度内で結果を出すとか、あるいはそこで成果を出すふうに考えていません。アーティストの思考の仕方は、行政の経済構造上つくっている枠組みと本質的に噛み合わないのです。オーガナイザーの芹沢さんもかなり努力されて、辻褄を無理やり合わせたり、長期のプロジェクトにしたりしながら、思考とか精神のアイデアが一番いい形でどのように実現できるかみたいなことを優先させていると思うんですが、それには非常にアクロバティックな技が必要だと思うんです。芸術祭とか高堂さんがやってらっしゃる「踊る。秋田」なども、多分そういう知恵を使って、ここでは一応結果を出すけど、本当に見せたいのはもっと違う大きな構造のところにあると思っているんじゃないでしょうか。

アートの一番の醍醐味は、どれだけ無責任なことができるかにあり、それをどれだけ辻褄を合わせられるかというか、大はったりを打つみたいなことを企画したり、お金を出したりしている人達との間で、なんとかそれを説得する技量でしょうか。

秋田市がやりたいと言っているアートも、実は型にはまらないものもあるので、そういうものだと思って関わったほうがいいですよ、と逆に言いたいですね。常にある種のフラストレーションはあるけれども、ある種の達成感はあるみたいなところで、やり続けているっていう感じですね。

高堂：踊りをやるということの一番の失敗というのは、人間という生ものを持ってこなきゃいけなかったことですね。フィルムフェスティバルでやれば楽だったなと思います。応募は19か国から300人近くきて、その中から選んで行ったのが今回のコンクールでした。選ばれた9か国、100人近い外国の人達が参加しましたが、これを動かす力技というか、その大変さにはあきれ返ったという感じで、スタッフの人達は本当に大難儀し、死ぬ思いだったと思います。こういうのが、もう少し頻繁にあれば逆に面白いと、皆さん思っているかもしれません。そのギャップを、アドレナリンだけで説明していいものだろうかと思うんですが。



会場からの質問



竿燈の祭りでもなんでもそうですけど、昔も今も、祭りって持ち出しの方が多いもんですよ。新しく自分達でやっているムーブメントみたいなものに、少しでも力になり、先ほど申し上げた通り、未来の記憶として断固として継続し、楽しみたいなという人達が増えてきてくだされればいいと思ってます。これはダンスに限らず、2〜3人で、けだるい日常からハレの日に切り替えるものを、1年で1回とか2回とか、楽しむことから始まってもいっこうにかまわないです。

藤：いわゆる芸術祭的な仕組みができることによって、空き家だったり、砂浜であったり、森であったり、いろんな空間を使いながら、すごくいい状態で、いろんな活動がつくっていける状態があるのではないかと思いますが、やはりイベント的になってしまうし、それを恒常的に残す必要もないけれども、作品っていうのは、それぞれ旬があると思っています。永久設置か一時的か。本当はそうじゃなくて、いろいろあって、5年物もあれば、3年物もあれば、1か月ものもあれば、1日で終わるものもあれば5秒のものもあればっていう、旬がそれぞれあるだろうと思います。

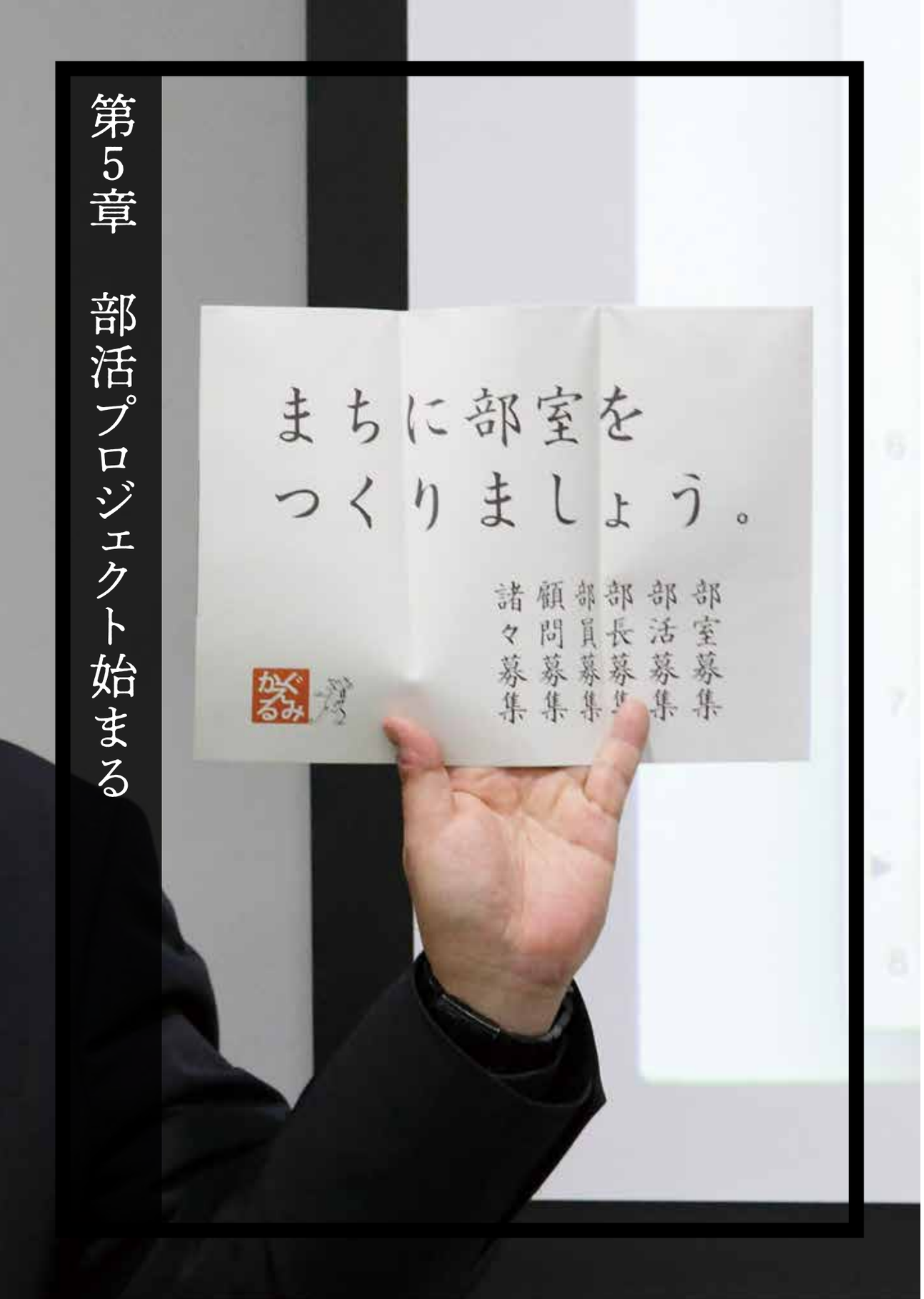
それは地域によってもちがいます。ずっとまちの中に立っているものも、入れ替えてもいいものもあります。空港なんかにおいてあるものの中には、持っていてもしかたがない、邪魔になっているものも実際にあります。そういうのは、それぞれに展示時期をつくっていかなければならないし、それをコーディネートしていく人がいて、それをやっていく拠点があるとすれば、美術館かなと。

今、美術館の領域では、コミュニケーターっていう言い方があって、作品をきちんとつないでいく役割の人がいます。そういうことをしっかりできる環境やある種の現場を、どうやったらつくっていけるのかというのは、すごく重要だと思っています。

石倉：ありがとうございました。今日のシンポジウムは「地域芸術祭を超えて」という副題のとおり、いわゆる観客動員型の、観光と鑑賞体験がセットになった定型的な芸術祭ブームが終わった後にどんなアート体験の可能性が残されるだろうか、という宿題に対するヒントをいただけたように思います。一連の対談を通じて、秋田の地域資源のとらえ方や地域の開き方、ネットワークのつくり方、世代を超えた文化の設計と責任の意識といった話題にもふれることができました。

また、最後の質問にあったように、これまでできなかったことや失敗したことで、困難な体験のポイントを共有することで、次世代の展望が見えてくるのではないかと思います。引き続き、今年度に行われる「夜楽」でも、日常生活に根差した美術政策からハレの文化、あるいは、「超日常」のプロジェクトのあり方を議論していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。





部活プロジェクト始まる

「『部活をつくる』第1回　説明会・ワークショップ」
平成30年2月7日（水）　18時30分〜20時30分　エリアなかいち　にぎわい交流館ＡＵ４階　研修室１・２
藤　浩志　氏（美術家・プロジェクトディレクター）

秋田市に楽しい「部活」をつくろう

藤浩志（以下、藤）：いよいよ「部活をつくる」プロジェクトが始まります。まだ、どうなるかわからない点もありますが、チラシには「部活募集」「部室も募集」って書いていますね。この経緯を話したり、雑談もしながら、面白い部活のイメージをつくっていきたいと思っています。

美術館など発表する場所をつくろうとするけど、中身がないと何にもなりません。美術館に勤めていたころ思ったのは、美術館が面白くなるには面白い作品がないといけないし、そのためには、面白い作家が育たないといけない。面白い作家は面白い場所で育つ。そういう土壌があって、そこで何かやるうちに面白い活動ができていって、そういうのがないとつまらない美術館になって、人も来ません。

学生時代にはいろんな部活がありましたが、面白いのは部室だったと気づきました。そこに行くといろんなものが許されていて、高校時代、教室や家では勉強しなければなりませんでしたが、部室は同じ興味・関心を持った仲間が集まる許される場でしたね。部活募集をしていますが、僕は部室をつくることを狙っています。まちの中に、いろんな場所に、いろんな人達が集まる、いろんな数の部活・部室があればいいなあと思っています。

活動には、まず名前を付けるところから始めますが、ヒットするのは3割ぐらいです。はずれるものも多いです。全国にどんな部活・部室に代わるものがあるのか探し出してみたら、結構、全国いろんなところでいろんな活動をしている人達がいて、部活動のように楽しんでいることがわかりました。カフェが拠点になっていたり、お店の一角だったり、自分達で場所をつくっていたりするなど、いろんなことが見えてきました。一番重要なのは、興味・関心を持った人達がちゃんと集まっていて、開かれていることなんだという気がしています。

秋田で、部活をつくる一つの方向性ですが、実は皆さんはすでにいろんな部活動的な活動をしていると思います。皆さんがやっているいろんな活動をネットワークしていくことで、ミックスされていったり、変化していったり、新しい人が入ってきたり、思いもよらない方向に展開していったり、そういうことが、まちを楽しくしていくんじゃないかなと思っています。どんな些細なことでも、何か面白いことをつくっていく、それが、自分だけでやるんじゃなくて、周りの人達とつながりをつくっていくことで、面白いことが連鎖していくんじゃないかと思っています。

こういうことは、いろんなタイプがあればあるほど面白いし、全然違うチャンネルがあって、全然違う人達が集まると、場所や人が違う面白さがあって、それがつながっていくことで、楽しいことが起こるんじゃないかと思っています。

活動を続けていくと、予期せぬことが起こるというのが面白いと思っていて、自分がこうやるとこうなるだろう、という予定の中でやっていることじゃなくて、こうなるといいなと思いながらも、えっ、こんなことになるの、という状態にどうやればなるのかなと。そのためには、もっとはみ出ていかなければならないんじゃないかと。部活って言っても、活動がこぢんまりするというよりも、何かあふれ出ていっている感じ、周辺にあふれ出ていっているものがすごく面白いと思っています。

今日、ここに来ている人は、こういうのがやりたいなというイメージを持っていると思いますし、それをこの先秋田市がどういうふうにフォローするかとか、全然違う部活動がこれからどういう風につながっていくのかは、これからの課題です。それぞれの活動がどういう風につながっていくのか、どうしたら深まっていくのか、部室にできるのか。いずれにしても、今日集まった人達で、どんな活動があると面白いか考えていきたいと思います。これから妄想の部活を考えてください。

僕が以前いた、十和田市現代美術館で冬季間、「超訳びじゅつの学校」という企画をやりました。学校なのに授業がない、先生がいない、でも、部活の部室だけがあるという、僕からすると理想の学校です。美術の学校をつくって、気軽にお申込みくださいということで募集しました。藤森八十郎という架空の人が校長で、校長が承認すれば部活として認められるというルールでした。参考まで、どのような部活があったかを、お知らせします。

「ものがたり部」原稿用紙を置いているだけで、ひたすら物語を書いています。
「観察部」まち歩きのようなもの。
「被服部」ひたすら縫物をする。
「わら部」わらを使って人形とかをつくる。
「ちいさな美術部」アーティストの奈良美智が部長の、実は豪華な美術部。



藤 浩志／美術家・プロジェクトディレクター
※92頁を参照



「おおおどる部」コンテンポラリーダンス。美術館内で踊ることが許されていた。
「たてばんこ部」「変音部」「薪ストーブ」「よいどれ」などなど……。

席替えして、隣の人と話し合い

今、活動していることや、こんなことをやってみたいという妄想を、隣の人と二人一組となって紹介し合ってください。そして、隣の人の活動を紹介してもらいますので、お互いを取材してください。

Aさん：隣のBさんは、「堀を語る会」という活動を去年の8月から行っているそうです。月1回、ねぶり流し館、なかいち、県民会館とかに15名から30名集まって、千秋公園のお堀を語るだけではなく、自分達で草刈りができないかとか、千秋公園とか中心市街地について話し合い、例えば、千秋公園は夏草がたくさん生えているので蚊が多いとか、お堀の水質が良くないので水質を良くしようとか、千秋公園の再整備計画へのパブリックコメントをするなど、お堀を軸に中心市街地の魅力を発見していく活動を行っているそうです。

藤：ロゴマークってあるんですか

Bさん：ちゃんとしたものではありませんが、それっぽいものはあります。

藤：ジャケットつくったり、Tシャツつくったりは。

Bさん：そこまでは……。

Cさん：隣のDさんは大学生の方で「地下鉄部」の話をしてくれました。秋田市に地下鉄ができればどうなるかを夢見て、路線図を考えたり、ここを通るのは何号線とか考えながら散歩しているそうです。

Dさん：小学生のころ、鉄道とか交通が好きで、紙に国道に沿ってこういう線路があれば住んでる人達もっと使えるのになあとか、妄想しながら描いていました。

藤：僕の知っている鹿児島の人ですが、完全に架空のまちの地図を完璧につくってるんですよ、相当大規模に。鉄道の延長で遊びとしては最高なので、ぜひ路線図をつくりましょう。秋田地下鉄。出口だけでもつくりましょう。まずはロゴマークから。





二度目の席替え、違う人にヒアリング

Eさん：「屋上開拓部」だそうです。秋田市はビルの屋上に行ける場所があまりないけど、もうちょっと空に近づきたいと考えて、封鎖されているビルの屋上を管理会社に交渉して許可を得る「屋上管理部」をつくり、屋上でパーティや写真を撮影したり、かまくらづくり、雪合戦などを企画する「屋上企画部」もつくり、音楽や垂れ幕などで、屋上で何かやってるということを下を歩いている人に気付いてもらう仕組みだそうです。

藤：屋上って解放された感じになるよね。福岡で取り壊されるビルで若者が遊びはじめたら、その建物をもっと活用しようという活動が生まれた、ということがありました。

Fさん：「なべっこ遠足部」です。太平山とかに行くんじゃなくて、まちなかで、市民市場とかで買い物して千秋公園で食べるとか。いろりをつくってもらい、そこで食べるとかしたいそうです。

藤：食べるだけとか、幽霊部員もいたりして。毎回、どこ行こうかとか、市民市場から始まっているのがいいですね。僕、なべっこ遠足やったことないんで、やりたいですね。

藤：まだ発表してない人に発表して欲しいのですが、皆さん、違う人に話すことで伝え方が変わったりしたのを感じましたか。

Gさん：「カオハメ部」だそうです。観光地にあるカオハメ（顔を入れて写真を撮るための絵入り立看板）をつくる部で、あの場所だったらどんなカオハメがいいかとか、逆にカオハメを先につくって、このカオハメが生きる場所はどこだろうとか。そして実際に写真を撮ったりしたいそうです。

藤：カオハメって、僕ははまらない（笑）。カオハメ選手権やって、カオハメの最も似合う人決めは楽しいね。

皆さんにいろいろ話し合ってもらいましたが、残念ながら、今、話し合ったものがそのまま部活にはなりません。来年度（平成30年度）、市の体制が整ったら部活募集をしますので、何らかの形で皆さんに活動して欲しいと思っています。

今日は楽しい話でした。このノリで応募してください。こういう活動が育っていくと、地域に面白い市民の活動がいっぱい出てくるんじゃないかと思っていて、それがまた、いろんなコラボレーションとか、いろんな人とつながると、違う形で展開していくんじゃないかと思うんですね。誰とつくるか、これが一番大事。企画の大原則です。誰とつくるかで変わってくる。



何がやりたいかというより、誰とつくるか。ネーミングを魅力的に。小さいことから、無理しないで持続的に。あといつどこでやるか決めれば活動は始まります。

秋田市への要望としては、そういうのを取材して開いていって、そういうのがまちの中にあふれ、はみ出てきているような状況がつくれると、もっとまちを楽しむことができるんじゃないかと思っています。ぜひ、小さく始めて、ネットワークで発表しあえるような感じにできればいいと考えています。







『部活をつくる』　第2回　説明会・ワークショップ」

平成30年3月14日（水）　18時30分～20時30分　エリアなかいち　にぎわい交流館ＡＵ4階　研修室1・2

藤　浩志　氏（美術家・プロジェクトディレクター）

2回目の説明会とワークショップが開催されました。藤さんの説明の後、二人一組の組み合わせでお互いにヒアリングを行い、発表してもらいました。その後、四人一組に再編成して、部活イメージをブラッシュアップ。人と話し合う、人の話を聞く、このように人との関係を広げることにより、イメージが豊かになることを期待してのことでした。その成果発表は……。

Aグループ：秋田市の名所・旧跡に、お弁当を持って自転車で回る「自転車部」です。弁当を持って行ったり、そこに名物のおいしいものがあれば、おにぎりだけ持って行ってピクニックしたりする活動です。汗をかくので、帰りに温泉に寄ってもいいという部活です。

藤：楽しそうですね。うちの美大にも「ゆるゆるサイクリング部」があって、私もママチャリで一度参加しました。雄物川沿いを走ったら気持ちよかったですね。

Bグループ：うちのグループは、ぬいぐるみっぽい服をつくってファッションショーをやる「手づくり部」です。10代～70代、孫からおばあちゃんまで参加してもらうほか、ミュージカルをやろうとしている人もいたので、その衣装にもしたいという話になりました。

藤：「手づくり部」いいですね。ある事情があって、僕はすごい数のぬいぐるみを持っているので、よかったら相談してください。

Cグループ：子ども時代の懐かしいまち並みが好きなので、秋田は都会を目指す必要がないという人。秋田のお祭りを県外でやったり、県外のお祭りを秋田でやったりしての交流をしたいという人。その場所でしか体験できないことを子ども達に体験して欲しいという人がいました。そのように、何かをやりたいときに、一人ではできないかもしれないけど、きっかけがあれば動けるかもしれないので、まずは、「きっかけ部」が必要ということになりました。

藤：「きっかけ部」いいですね。役割があって、それが発展していけば楽しいですね。

Dグループ：二人の人から「歩く部活」が出ました。まち歩きからトレッキングなどありますが、近所の文化を学びながら歩き



ネクストステップ　まちのビジョン







たいという話でした。もう一人の人は、スパイスを取り寄せるほどカレー好きで「カレー部」をやりたい。さらに、お母さんがやる手芸の「オカンアート」が気になっている人がいましたので、すべて掛け合わせて「オカンカレー部」にしたいとなりました。お母さんが作ったカレーを持ち寄って、互いのカレーを食べあい味を楽しむ部活です。

藤：オカンアートですが、舞台デザイナーで、オカンアートを舞台衣装に付ける村上亮太という作家がいます。それが評判になり、お母さんと会社までつくっています。「オカンカレー部」いいですね。

まちに部活をつくるプロジェクト、説明会では、参加した皆さんのイキイキと話し合う姿が印象的でした。

また、説明会終了後、帰り際にお互いの連絡先を交換しあったり、一緒に帰ったりと、新たな「つながり」の予感がありました。

さて、プロジェクト「アーツ秋田」とあわせて、平成30年度はどんな展開になるのか？

まちに関わる、まちを楽しむ、どんな活動ができるのか？

楽しみです。

まちのビジョン

「(仮称)芸術祭?」は、「夜楽」で学び、シンポジウムで気付かされた多くのキーワードから、「創造的な都市」を目指す「アーツ秋田」として位置付けます。様々なアートを切り口に、このまちに暮らす私達が「つくる(創る)」ことに関わり、創造の連鎖を触発するため。つくることを「見せる」ことで、交流が始まり、生み出された知恵が新しい「まちの楽しみ方」「まちの使い方」を提示する。そして、新たな文化や産業とその担い手を生み、住み続けたいまちにしていくことで、これからも「ともに生きる」ことにつながるのではないでしょうか。

現在、秋田市が中心市街地で取り組んでいる「芸術文化ゾーン」も、作家・アーティストや商店街、民間事業者だけではなく、まちに関わる全ての方々の創造性を育み、まちに反映するための基盤づくりを目指しています。

このまちを舞台に、様々な人が多様な活動を楽しみ、つながり、輪が広がっていくことで、つくり手の姿が見え、まちにグラデーションができる。そんな「人」が中心のまちを思い描いています。

プロジェクト「アーツ秋田」が、例えばまち中の空き店舗に新たな活動者が入って、まちとつながったり、ものづくりの若い担い手の移住につながったり、そんなふうに人がつながり暮らしが整っていくきっかけとなること。その先には、仕事が生まれ、秋田を訪れ、まちに関わる人が増え、まちの魅力が積み重なっていくこと。

「文化」には、人が興味・関心を持ち、関わることを通じて「当事者性」を生み出す力があります。こうした切り口から、文化による「創造的な都市」という未来の姿を見据えて取り組んで行くプロジェクトをスタートさせます。

秋田市総合計画に掲げる基本理念「ともにつくり　ともに生きる　人・まち・くらし」。「ともにつくる(創る)」のは私達が暮らすまち。これまでの「芸術・文化によるまちおこし」をさらに進め、文化による「創造的な都市」を目指します。

「あきた豊醸化計画」「(仮称)あきた芸術祭?」など、仮の名前で検討を進めてきたこの取り組みは、ようやく方向性がまとまり、「創造的な都市」を目指すためのプロジェクトという姿が見え、次の一歩を踏み出すところです。

「地域芸術祭」のその先を考えることを意識し、私達が暮らすこのまち・秋田の将来の姿を考える機会になることを念頭に進めていきます。文化の力を生かすことで、まちの創造性を高める。新たな価値を見い出し、それが私達のまちへの愛着と誇りにつながり、次の新しい文化をつくっていく、という、創造的な循環を目指します。

方向性や名称が固まると何かを理解したように感じてしまいますが、これから「アーツ秋田」と呼びます。あわせて変化することを忘れずに、まちの将来像を見据えて、プロジェクトの検討を深めていきます。

「to be continued……」



本市基本理念

ともにつくり　ともに生きる　人　まち　くらし

文化的・創造的な都市へ

Project Arts Akita

プロジェクト「アーツ秋田」

芸術・文化によるまちおこしのさらなる推進

総合計画	新・県都『あきた』成長プラン
成長戦略	芸術文化・スポーツ・観光による都市の魅力向上
重点プログラムⅠ	芸術・文化によるまちおこし

ドキュメント　アーツ秋田構想　Document for Arts Akita

2018年３月29日発行
企画・発行：秋田市企画財政部 企画調整課
〒010-8560
秋田市山王一丁目１番１号
TEL : 018-888-5462
FAX : 018-888-5463
http://www.akita-hojoka.com/
E-mail : ro-plmn@city.akita.lg.jp

アドバイザー　藤　浩志（美術家・プロジェクトディレクター）
石倉　敏明（人類学者・秋田公立美術大学准教授）

制作　NPO法人あきた地域資源ネットワーク
編集　鐙　啓記（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）
渡邊　由紀子（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）
チーフデザイナー　石井　明日香（ノリット・ジャポン株式会社）
デザイナー　三浦　裕介（ノリット・ジャポン株式会社）
写真　小阪　満夫（小阪写真事務所）
鄭　伽倆（撮影と映像制作）
三輪　卓護（Otan/Photography）
校正　永井　登志樹（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）